

阪大 —地域に生き世界に伸びる— NOW



トピックス

平成23年度 入学式挙行

【クローズアップ】

研究者のアウトリーチ活動、社会との連携活動を支える
大阪大学21世紀懷徳堂

「国民との科学・技術対話」大学窓口としての取り組みをスタート

2011 4月号

No. 124

目次

トピックス	2
入学式告示	4
クローズアップ	8
役員室だより	12
80周年	30
ナウススペシャル	32
キャンパスニュース	34
記念講義	53
表彰等	54
人事	55
訃報	62
インフォメーション	63
職員インタビュー	67
海外拠点だより	68
海外レポート	70
交流協定大学	74
クラブ&サークル	75
被災された皆様へ	76



表紙写真：風車（彫刻）

（永廣 隆次 作、1986年 コールテン銅製、高さ 33メートル）

「ふうしゃ」ではなく「かざぐるま」と読む。子ども時代に遊んだ風車をイメージしており、下から見上げればこの作品が理解できる。（写真下側参照）
ざらざらとした赤黒い肌は、レンガ造りの本部事務機構と芝生や周りの木々の緑との空間に調和している。

表紙デザイン：ウェブデザインユニット

平成 23 年度 入学式挙行

平成 23 年度入学式（学部、大学院）を4月6日（水）、午後1時30分から大阪城ホールで挙行了しました。

式は先の東日本大震災による現状を踏まえ一部予定を変更して挙行し、また開式に先立ち、犠牲となられた方へ弔意を表すため、黙祷を行いました。

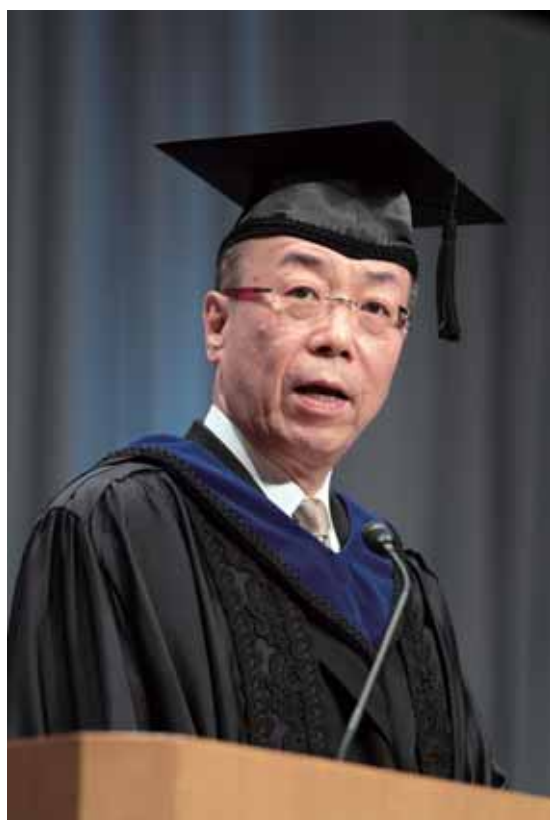
開式後、学部入学生 3,555 名を代表して、薬学部の南園真哉さんが、大学院入学生 2,972 名を代表して、大学院工学研究科の北 卓人さんが本学で過ごす学生生活への期待や決意、心構えを交えてそれぞれ宣誓を行いました。

続いて、鷺田清一総長から、「大学ではじぶんの関心、じぶんの専門領域とは異なる領域の人と交わり、この世界、この社会、そしてじぶん自身を見るたしかな眼を育ててもらいたい、そして「あいつは頼れる、信用できる」と言われるような、ほんとうのプロへと育てていってもらいたい。」と告辞があり、副学長、部局長の紹介の後、入学を記念し本学混声合唱団が「大阪大学学生歌」を、男声合唱団がシュトゥンツ作曲「フライエ・クンスト」をそれぞれ合唱し、閉式となりました。

引き続いて、学部入学生を対象にオリエンテーションが行われ、学生生活全般についての説明の後、本学応援団による新入生歓迎エールがあり、日程を終了しました。

入学式での総長告辞は次ページのとおりでです。

（総務企画部総務課）



平成23年度大阪大学入学式総長告辞

まず、本日ここに集われた3555名の学部生、2972名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。



入学あるいは進学の準備をするなかで、みなさんも、そしてみなさんを迎えるわたしたちも、ともに東北の地を襲った途方もなく大きな災害に直面しました。桜はいつもの春のように美しく、のびやかに花を開いていますが、わたしたちの心は、被害のさらなる拡大に、まだ固く緊張したままです。

被災地では、家族の安否が未だ確認できていない方々がおられます。深い喪失感のなかで、それでも家族や仲間とともに生き延びるために、温かい食べ物と移動のための燃料と、最低限のあたりまえの生活ができる空間とを緊急に必要としている人たちがいます。その支援のために、昼夜身を砕いている人たちがいます。原子力発電所のある地域では、被害をこれ以上拡大しないために、すでに長い期間、きわめて危険な作業にあたりつづけている方々がおられます。そのほかにも、先が見えないまま、まずは身を支えるため、他の人たちを支えるために奮闘している無数の方々がおられます。

被災地から遠く離れた地域では、被災地から届けられる情報に、ときにうろたえもしながら、固唾を呑んで耳をそばだてるという状態が続いています。遠隔地から物資を、義援金を現地へ送るだけでなく、一時も早く、どんなことでもいい、被災地へこのじぶんにできることをしに行きたいと、じりじりしている若者がたくさんいます。復興への道は途方もなく長いです。そのために、復興をどのような方針のなかで進めるべきかについて、被災された方々の身になって、あるいはここまで被害を大きくしてしまったこの国のあり方について、根本のところから考えなおそうと、

動きだしている人もいます。

そしてなにより、ここに集われたみなさんのなかには、彼の地にあって被災し、いまもご家族が同朋の救援や復旧の作業にあたっておられ、故郷のことがおそらくは一時も頭を離れないまま、ひとり遠く離れたこの西の地で新しい生活を始められた人がいます。またこのなかには、これを機に、かつて幼児のときに体験した阪神・淡路大地震での被災の悲しい記憶が断続的に蘇り、それがやがて度を増し、辛い思いをしている人もきっとおられるでしょう。それぞれの場所で、それぞれの人が、つらい春、きびしい春を迎えています。

そういうつらい時、きびしい時に、みなさんは大学に入ってきました。さらに遡って言うならば、みなさんは、明治期以降120年ほど経って、この国ではじめて、右肩上がりの経済ベクトルが折れ曲がり、長期的な不況の時期に入った時代に生まれ、育たれました。「明日はきっと今日よりよくなる」という経験を一度もしたことがない世代の出現です。就職難という実情、あるいは将来の福祉社会のあり方などに思いを巡らせ、むしろ「明日は今日よりもっとひどくなるかもしれない」という潜在的な予感をこそ共有しているといっても過言ではありません。そういう社会感覚をもちながら、これまでの社会を牽引してきたいわゆる「成長」という物語、大量生産・大量消費による「豊かな社会」の構築というのとは別の物語を紡ぎだしつつ、それに沿って来るべき社会のあり方を構想していかなければならない、そういう世代としてあなたがたはいます。



このたびの震災以前からも、少なからぬ人たちが、わたしたちの社会のそういう課題に立ち向かい始めていました。東日本におけるこのたびの震災は、その復興過程で、いま求められているこうした社会の変化に一気に棹さすことになるでしょう。日々の生存の奥底に溜まっている社会感覚についていえば、これまで社会を牽引してきた人たちとこれからそれを牽引していくであろう人たちとのあいだにはおそらく想像以上に大きな落差があるでしょうが、ともに抱えている課題はおなじです。あらゆる世代が力を合わせてこの変化に確実に対応しなければなりません。



「幸福な生活」とは何か。だれもがいきいきと暮らせ、だれもが満ち足りた思いのなかで穏やかに死んでいける社会とは、いったいどのようなものか。社会のグラウンドデザインを描きかえるにあたっては、この問いが根底になければなりません。これを基礎として、あるべき社会を構想しなければなりません。なぜでしょうか？

人間の行為はみな幸福をめざしているという点については、だれにも異論はないと思います。が、いざこの幸福が何であるかということになると、意見はばらばらに分かれます。快楽だ、名誉だ、富だ、というふうなんです。けれども、快楽や名誉や富、さらにはそれらを手に入れるための知恵や技能は、幸福になるためには望ましいものですが、その逆はありえません。つまり、快楽や名誉や富、知恵や技能を手に入れるために幸福になるということはありません。そういう意味で、アリストテレスは幸福を「自足した善」と呼びました。「いかなる場合にもけっして他のもののために追及されることのないもの」、「つねにそれ自体として望ましく、けっして他のもののゆえに望ましくあることのないようなもの」、それが幸福であるとなりました。

「幸福とは何か？」この問いは、逆説的にも、失ったものの大きさに比例して深まっていきます。あるいは、他者が失ったものへの想像力の密度に比例して、深まっていきます。

そういう意味で、みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは、この《他者への想像力》です。明治期の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と、本山さんは人びとに語りかけました。《他者への想像力》とは、ふつう思いやりと言われますが、要するに他者を他者のほうから理解しようということです。その意味では、想像力とは、じぶんが抱いているイメージをさらに拡げることではなく、じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。



そのように考えると、他者への思いやりは、みなさんがこれから取り組むことになる学問や科学のいとなみと、じつは底を通じていることがわかります。

大学において真理の探究という仕事に就くことと、一市民として他の苦しんでいる人びとを思いやるということとは、想像力のいとなみであるという点で、異なる二つのことではないのです。想像力とは、いまここにはないもの、不在のものへと向かう心の動きのことです。まず、思いやりとは、じぶんでは体験しようのない他人のこのころの内を想像するいとなみです。次に、科学研究とは、目の前で起きている出来事がどんな見えない規則や構造によってどのように起きているかを論理的に突きつめる作業のことです。そして宗教もまた、この世をここではなく、向こう側（あの世という〈外〉）から捉えなおそうとするいとなみであると言えるでしょう。それに、見えないけれど大事なものをキャッチし、形を与える芸術、さらには空想やファンタジーまで含めると、想像力とはわたしたちの文化をかたちづくるもっとも基礎的な力であることが見えてきます。

自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている見えない構造のほうから突きとめようという科学研究の姿勢と、じぶんでは体験しようのない他人のこのころの内を思いやろうとする対人関係の態度とは、このように、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他者の側に置くという意味では、じつはおなじ性質のものなのです。そしてその意味で、ほんとうの科学は思いやりのあるものであるはずなのです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、じぶんの立っているこの場所からしか見られないという限界がまずあります。次に、じぶんが教わってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、じぶんがなんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を紡ぎだしてゆくためには、この小さな世界の襞をもっと大きく広げていかなければなりません。想像力に

よって、です。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるというのは、すでに知っている知識を量的に拡大することではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。そうして、じぶんがいま立っている状況、じぶんが封じ込められているように感じている状況を、じぶんから離れたところから客観的に見つめ、それを的確に理解する力をしっかり養うということなのです。

みなさんにはこれから、このような科学の精神をこそ身につけ、人びとから「厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となっていきたいと、わたしは強く願っています。



さて、大阪大学はことし、創立 80 周年の記念すべき年を迎えます。この創立記念行事の精神を、わたしたちは「原点へ、未来へ」と名づけました。大阪大学の原点、それは何かと言いますと、18 世紀、19 世紀の江戸期に大坂の町に開かれた民間の二つの私塾、懐徳堂と適塾のことです。大阪大学は 1931 年に医学部と理学部からなる国内で第 6 番目の帝国大学として創立されました。が、京都という近くにすでに帝国大学が設置されていたので、国はさらなる設置に積極的ではなく、大阪の自治体や民間人が強く設置の嘆願をし、さらに創立の準備金や当座の運営資金を民間でもつということで設置が認められました。これが、大阪大学が国立大学としてはめずらしく（各藩の）藩校ではなく、民間の私塾を源流としている理由です。

懐徳堂は、1724 年、享保 9 年に、大坂の 5 人の商人によって設立された学問所です。民間人のセルフ・ラーニングのための学校で、いったん学舎に入れば武士も番頭も丁稚も同列の扱いがなされました。授業料は年五回、銀一匁もしくは二匁、金がなければ筆一对、紙一折でもよいというふうに、町人の懐事情に応じて設定されていました。ここで町人たちが学んだのは、けっして日頃の仕事に役立つ経営学のようなものではなく、もっとも基礎的な科学であり、中国の古典に依拠した道徳の基本というものでした。商業の基本は「信用」にあり、「信用」の根拠をしっかり掴む



ために、ものの道理とひとの倫理を学ぼうとしたのです。

適塾は、1838 年、天保 9 年に、ひとりの医学者、緒方洪庵によって開かれました。幕府教学の総本山ともいべき昌平黉とそれに連なる藩校とはまったく異なる私塾としてです。この適塾は、明治の言論人、福澤諭吉や、日本近代の軍隊制度を確立した大村益次郎、日本赤十字を創設した佐野常民、そのほか日本の殖産興業を牽引した大島圭介ら、明治期の日本のリーダーたちを数多く輩出しました。緒方洪庵自身も、のちに江戸幕府奥医師ならびに西洋学問所頭取を務め、その地で亡くなりましたが、明治に入り、これを基盤に東京大学医学部の前身である東京医学校が設立されました。また、適塾の塾頭であった福澤諭吉が江戸に開いた洋学塾が、のちに慶應義塾に発展します。そして大阪大学医学部は、適塾を基盤として創設された府立大阪医学校の流れを汲んでいます。その意味で、適塾は、わが国において制度化された近代的な大学と医学部の源流でもあったのです。

福澤諭吉が描いている適塾の生活の一端を紹介すると、福澤の描く適塾生の気概とは、次のようなものでした。

〔われらが適塾生は〕 前途自分の身体はどうなるであろうかと考えたこともなければ、名を求める気もない。……ただ昼夜苦しんでむづかしい原書を読んで面白がっているようなもので、実の訳のわからぬ身の有様とは申しながら、一歩進めて当時の書生の心の底を叩いてみれば、おのずから楽しみがある。これを一言すれば——西洋日進の書を読むことは日本国中の人にできないことだ、自分たちの仲間に限ってこんなことができる、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、知力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただむづかしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であったと思われる。（中略）とにかく当時緒方の書生は、十中の七、八、目的なしに苦学した者であるが、その目的のなかったのが却って仕合わせで、江戸の書生よりも能く勉強ができたのであろう。それから考えてみると、今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我が身の行く先ばかり考えているよう

では、修業はできなからうと思う。

(『福翁自伝』より)

「目的なしに苦学する」ということ、ここに誇りがあり、また適塾の教育の固有性があります。明日のニーズに応えるための学問ではなく、「我が身の行く先ばかり考える」勉学でもなく、明後日の未だ見えぬ社会を建設するためにいま力をたっぷり蓄えておく、そんな大きな気概が適塾の若者たちには満ちていました。そんな塾生は、もちろん地方に帰って医学者、医療従事者になった者も数多くいましたが、それ以上に数多くが、明治期日本社会のリーダーに育っていきました。適塾ではオランダ語と医学の二科目しか教えませんでした。一見今日、明日に必要なことを教



えるかに見えるこの二科目をつうじて、なぜこれらの優れた人材を生み出すことができたのか、その教育のあり方に大阪大学はいまも多くを学ぼうとしています。その秘密は、直近のニーズに振り回されることなく、この世界を、いま立っているのとは別の場所から見ることのできる、そのような眼を養うところにあり、そのことをつうじてじぶん自身をおおらかに、のびやかに開いてゆくことにあったと考えています。

かつて旧制高校には、将来、医者になったり、法律家になったり、エンジニアになったり、外国文学者になったりする人たちが机を並べ、起居を共にして、同じような書物を読み、共通の論題について議論を交わすというシステムがありました。ある年配の経済人は、このネットワークが大事で、じっさい《「この仕事はあいつに頼もう」「これについてはあいつが詳しい」というネットワークがしぶとく生きていて、「だれに頼めばいいかを知っていた」。これはきわめて精度の高い情報だった》と、わたしに語ってくださったことがあります。みなさんの眼は、こうした関心を異にする友人たちとの交友のなかでも磨かれるのです。

大学ではじぶんの関心、じぶんの専門領域とは異なる領域の人と交わり、この世界、この社会、そしてじぶん自身を見るたしかな眼を育ててもらいたいと思います。そして「あいつは頼れる、信用できる」と言われるような、ほんとうのプロへと育ってってもらいたいと思います。このことを強く念じて、わたくしからの告辞とさせていただきます。



研究者のアウトリーチ活動、社会との連携活動を支える大阪大学21世紀懐徳堂 「国民との科学・技術対話」大学窓口としての取り組みをスタート

■21世紀懐徳堂は「国民との科学・技術対話」の大阪大学の窓口になりました

平成22年6月に内閣府から「国民との科学・技術対話」を推進する基本的取組方針が出されました。1件あたり年間3千万円以上の公的研究費の配分を受けている研究者に対し、「研究活動の内容や成果を社会・国民に対して分かりやすく説明する、未来への希望を抱かせる心の通った双方向コミュニケーション活動」である「国民との科学・技術対話」（以下、「対話」）への取り組みを推進するもので、「最先端研究開発支援プログラム」「最先端・次世代研究開発支援プログラム」等の中心研究者には既に先行して、こうした「対話」活動の実施が義務付けられています。

「国民との科学・技術対話」は対話を重視しており、「アウトリーチ活動」（日本の科学技術の分野では、「研究者や研究機関が研究成果を国民に周知する活動」という意味で用いられることが多い）と「科学・技術コミュニケーション」（科学について、科学者ではない市民と科学者が対話すること）の両方にまたがる定義付けになっています。

もともと、文部科学省 平成19年版「科学技術白書」では「アウトリーチ活動」を「分かりやすく親しみやすい形で人々に科学技術を伝え、対話を深めて人々の要望や不安をくみ取って、自らの科学技術活動に反映させていく活動」と定義しており、近年の日本の科学技術分野では対話を重視した意味で「アウトリーチ」という言葉が用いられることも多くなっています。

研究費の金額に関わらず、国税を使った研究が国民に広く還元されるべきなのは当然のことと考えられ、社会学連携活動、地域貢献を大切にしている大阪大学では、社会に開かれた「対話」活動を推進していきたいと考えています。

そこで、大阪大学では、本学の社会学連携活動の拠点でもある「大阪大学21世紀懐徳堂」に大学の「国民との科学・技術対話」支援窓口を置きました。

支援窓口では、大阪大学のさまざまな実践活動を把握・情報を集約するとともに、総合学術博物館、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）などの「対話」活動の実績がある学内部局との連携・協力を得ながら、研究者、研究プロジェクトの皆さんが「対話」活動を円滑に実施出来るよう支援体制を整えていきたいと思っています。

■対象研究者にアンケートを実施 大阪大学の「対話」活動の実施状況は？

まずは、平成21年度に年間3千万円以上の公的研究費を受けた大阪大学の研究者にアンケートを実施し、大阪大学の「対話」活動の実施状況を把握するところから始めました。

●対象者の学部別内訳と回答割合

平成22年12月、平成21年度において年間3千万円以上の公的研究費を受けた学内の研究者121名を対象としてアンケートを依頼し、101名から回答をいただきました（回収率83.5%）。

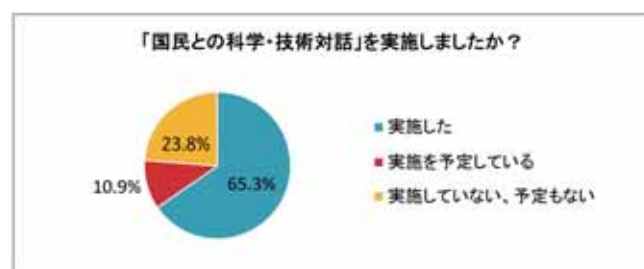
学部別に見ると「医学系研究科、工学研究科、生命機能研究科、基礎工学研究科、産業科学研究所、微生物病研究所」の順に多く、理系学部集中しています。

●実施状況と具体的な実施形態

「国民との科学・技術対話」の実施状況については「既に実施した」（65.3%）、「今後実施を予定している」（10.9%）の回答を合わせると76.2%を占めており（グラフ1）、多くの方は既に何らかの「対話」活動を行っています。また、「既に実施した」と回答した方の53.0%は主な活動として挙げた具体例以外にも実施したと答えていて、複数の活動を行っている割合が高いことがわかりました。

「これまでに実施していないし、実施予定もない」と答えたのは全体の23.8%で、「対話」活動を全くしていないのは少数派です。

グラフ1 「国民との科学・技術対話」を実施しましたか？（単位：％）



（回答者101名／対象者121名）

既に実施された方の実施形態を具体的に見ていくと（グラフ2）、「公開講座」（16件）、「シンポジウム」（15件）が最も多く、次いで「WEBでの発信」（9件）が上位を占めています。一方、本学では毎年、各部署で「出前講義」や「研究室公開」「サイエンスカフェ」などの双方向の活動が多数行われており、今回のアンケートでも事例として挙げられていました。

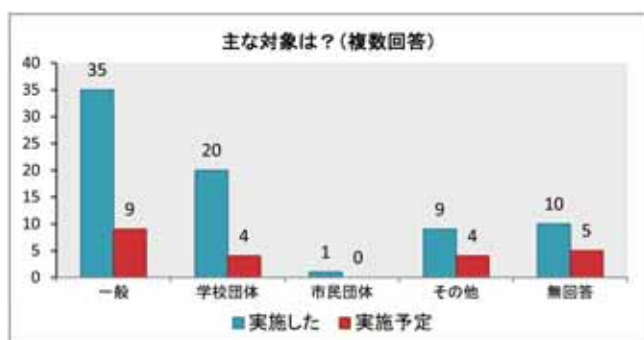
主な対象は（グラフ3）「一般」が多く（実施33件／予定9件）、出前講義や研究室公開など「学校団体」を対象にした活動も多く（実施20件／予定4件）挙げられていました。一方、「その他」や「無回答」の中には、一般公開しているものの、主な対象は専門分野の研究者という活動も見られました。

グラフ2 活動の具体的な実施形態は？（複数回答）（単位：件数）



（実施した 66 名／実施予定 * 21 名）

グラフ3 主な対象は？（複数回答）（単位：件数）



（実施した 66 名／実施予定 21 名）

会場は中之島センターを含めた大阪大学キャンパス内施設の利用が最も多く、また、公開講座やシンポジウムの中には他大学や研究機関、学会との共催や省庁主催による大規模な展示会やイベントに参加する形で行われたものもあり、首都圏や他大学を会場にしている例も見られました（グラフ4）。

グラフ4 対話活動の会場の分類（単位：件数）



（実施した 55 件／実施予定 18 件 の集計）

●必要な支援についてこのような声が寄せられました

21 世紀懐徳堂や関連部局に望む支援としては以下のような声が寄せられました。

<21 世紀懐徳堂や関連部局に望む支援>

◎全学的な取り組み

- ・大阪大学としての「対話」企画を考えていけたらよい。
- ・学内の会場管理の一元化
- ・大学全体としてサポート（広報、実施運用等）を行ってくれる部署があれば助かる。
- ・阪大内部署（21 世紀懐徳堂、博物館、CSCD 等）の利用の仕方をマニュアル化してほしい。
- ・大阪大学 YouTube、iTunes U 公式チャンネルの開設

◎企画・運営の支援

- ・出前講義は大学の宣伝にもなり、小中高生の科学離れ対策にもなるので積極的に取り組みたい。そのための支援を。
- ・活動を広く世に紹介することはやぶさかでない。関係部局のご理解をお願いしたい。
- ・経験が少ないので、企画の支援をお願いしたい。
- ・きっかけがあればいくらかでも話すが、きっかけがないと自ら進んで行くのは難しい。そのフォローが必要。
- ・対話の場を設けて頂けるのでしたらいつでも講演します。
- ・公開講座などの場の提供
- ・科学技術コミュニケーション技術の支援
- ・シンポジウム運営の補助
- ・会場確保（同意見 他に 4 件）
- ・(CSCD、先端科学イノベーションセンター（現：産学連携本部）、21 世紀懐徳堂に対し）これまでの活動でもサポートしてもらったので今後もお願いします。

◎広報活動のサポート（広報支援希望 他に 8 件）

- ・一般市民への広報の方法がよくわからないので支援を。
- ・まちなか祭の研究室公開の際に大学での広報支援を。
- ・ポスターや WEB のデザイン作成のサポート
- ・イベント開催時のマスコミへのリリース

◎経費の支援

- ・予算の援助
- ・シンポジウム開催費、外部講師の招へい旅費の支援

●今後について

シンポジウムや出前授業は実施していても、どのような活動が「国民との科学・技術対話」にあたるのか戸惑う方も少なくありません。

平成 23 年度以降、個々の研究者が「国民との科学・技術対話」を実施していくにあたって、大学としての支援体制の整備が必要です。

■【阪大ならではのアウトリーチ活動】のかたちをさぐるFDワークショップ —スタートアップ編— を開催

そのような状況を受けて、ラボカフェなどの社会学連携活動を実施してきた CSCD と 21 世紀懐徳堂の主催で 3 月 8 日(火)【阪大ならではのアウトリーチ活動】のかたちをさぐる FD ワークショップ—スタートアップ編—を開催しました。

はじめに CSCD の平川秀幸准教授から趣旨説明があり、その後、

大型教育研究プロジェクト支援室の審良静男プロジェクト「免疫ダイナミズムの総合的理解免疫制御法の確立」が取り組んだサイエンスカフェ、CSCD の対話プログラム「知デリ」、高大連携活動等、これまでのアウトリーチ活動の実践例の紹介と 21 世紀懐徳堂の利用法についてのガイダンスが行われました。

午後からは、「ワールドカフェ」という形態を用いたワークショップにより、アウトリーチ活動の課題について議論しました。

参加者が題材としたい話題を集約した結果、「そもそも、なぜアウトリーチが必要なのか」、「アウトリーチの方法について」に議題が絞られ、これらの課題について話し合いました。

年度末で 1 日がかりにも関わらず 40 名の参加者があり、今回のスタートアップを発端に、ノウハウやデータベース、課題の共有、情報交換につなげるネットワークを立ち上げるなどの取り組みをしていくことになりました。

アウトリーチFDワークショップ プログラム

10:00-10:10 趣旨説明 (平川秀幸、CSCD)

10:10-10:20 参加者の自己紹介

10:20-12:00 アウトリーチ経験者からの報告と問題提起
審良静男プロジェクト「免疫ダイナミズムの統合的理解と免疫制御法の確立」の実践例：

- ・岩崎琢哉、片桐良実 (大型教育研究プロジェクト支援室)
- コミュニケーションデザイン・センターの実践例：
- ・木ノ下智恵子、本間直樹、桃木至朗 (CSCD)
- ・後藤敦史 (文学研究科)



12:00-13:00 昼休み～ 21 世紀懐徳堂のガイダンス

13:00-17:25 ミニ・ワークショップ

(進行：神戸まちづくりワークショップ研究会)

13:00 ～ 趣旨説明と、改めての自己紹介

13:30 ～ 午前中のふりかえり

14:30 ～ ワールドカフェ (3セッション実施)

16:35 ～ 意図開き・質疑応答

17:05 ～ 今日の振り返り

■大阪大学の支援体制

「対話」活動に取り組むにあたっては、21 世紀懐徳堂、CSCD の他にも、大阪大学には、社会学連携活動に取り組む組織 (部局)、活動の場 (会場)、活動の機会 (チャンス) が色々あります。これらを上手く活用すれば、多様なタイプの「対話」活動の実践が可能になるはずです。

21 世紀懐徳堂では、担当窓口として、大阪大学で行われている「対話」活動の実施状況やノウハウなどの情報を集約・把握して全学で共有・提供していきたいと考えております。

実際に「対話」活動を実施した方から経験や情報もお寄せいただき、全学で共有できるようなネットワーク作りを目指していきます。

「このような対話活動をやってみたい」「どのような対話活動をしたらよいか相談したい」など、21 世紀懐徳堂の窓口担当にお気軽にご相談下さい。



「国民との科学・技術対話」活動実施のための大阪大学の体制

◎組織 (部署)

- ・21 世紀懐徳堂 (窓口)
- ・コミュニケーションデザイン・センター
- ・総合学術博物館
- ・産学連携本部
- ・大学教育実践センター
- ・研究推進部 (大型教育プロジェクト支援事務室→実践/ノウハウあり)
- ・学生部入試課 (→出前講義)
- ・広報ネットワーク (→情報の集約、情報の周知)
- ・各学部、研究科、研究室

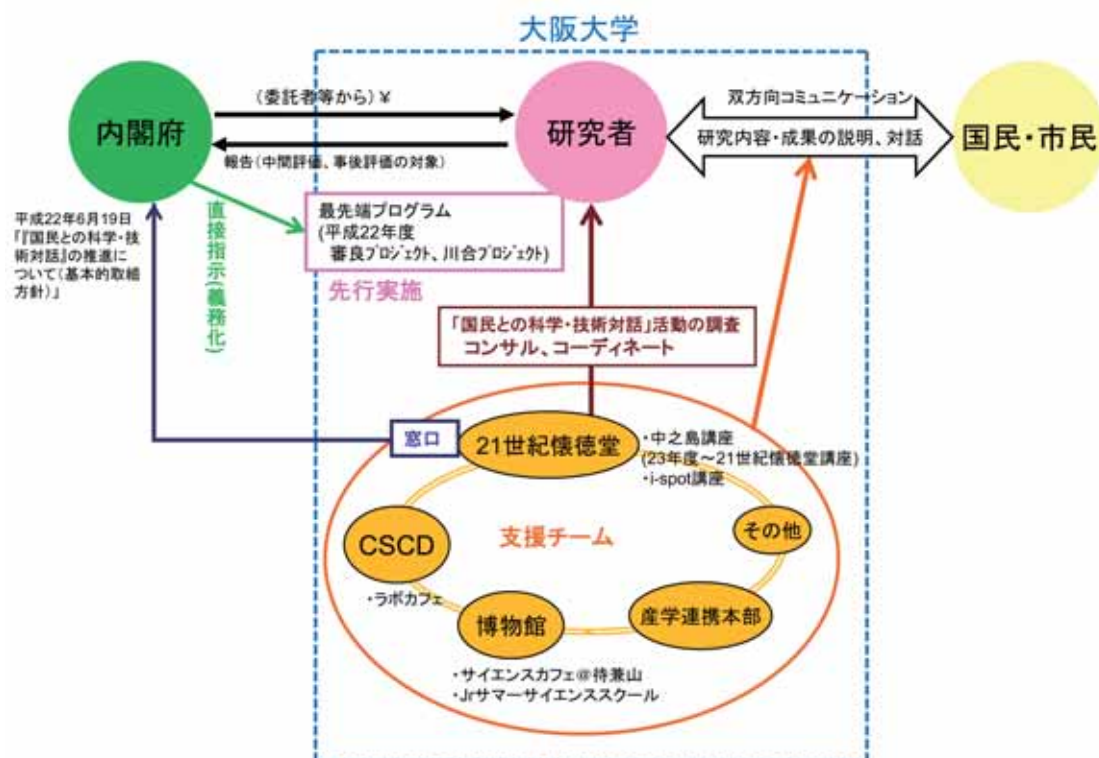
◎場所 (会場、施設)

- ・大阪大学会館 (ギャラリー、スタジオ、講堂、アセンブリホール)
- ・大阪大学中之島センター
- ・アートエリア B1
- ・アイ・スポット
- ・その他学内施設

◎活動メニュー (事例)

- ・公開講座 (大阪大学 21 世紀懐徳堂講座、Handai-Asahi 中之島塾、大阪大学 21 世紀懐徳堂、i-spot 講座) アカデミックキングなど)
- ・ラボカフェ
- ・サイエンスカフェ@待兼山
- ・FM ラジオ番組 (箕面 FM、FM 京都)
- ・出前授業 (高大連携など)
- ・研究室公開、オープンラボ、体験教室 (SAP ～ Saturday Afternoon Physics、夏の小学生科学体験教室、自然体験学習会、大学祭など)

「国民との科学・技術対話」スキーム



■21 世紀懐徳堂でお手伝い出来ること

＜ご相談下さい＞

- ・社学連携事業を広く学内外に広報します。「21 世紀懐徳堂だより」やホームページに掲載、21 世紀懐徳堂の広報ネットワーク（メールマガジン、チラシ配布場所等）を活用します。
- ・学生アルバイト謝金等、社学連携事業の経費を一部補助します。（上限金額あり）
- ・社学連携事業のための場所（21 世紀懐徳堂スタジオ、ギャラリー）や機材（プロジェクタ、ビデオカメラ等）をお貸しします。
- ・その他、企画相談等お手伝いします。

＜連絡下さい、情報をお待ちしています＞

- ・対話活動を実施予定の方、実施予定の活動があれば 21 世紀懐徳堂のホームページでも広報いたします。概要をお知らせ下さい。

- ・対話活動を実施した方、学内でノウハウや情報を共有するために、「こんなところがうまくいった」「こんな準備をした」「これは失敗、こうすればよかった」など感想や反省、課題があれば教えて下さい。
- ・「研究室公開」「出前授業」を実施予定の方、21 世紀懐徳堂にもご一報下さい。
- ・「対話」活動を実施された方、実践例をストックしていきますので、「広報チラシ」「パンフレット」「ポスター」「参加者アンケート用紙」を一部ご提供下さい。
- ・研究費の配分機関から「公募要領、計画調書」「評価報告書」に「国民との科学・技術対話」の推進についての指示があった場合、情報をお寄せ下さい。
- ・配分機関や他機関などから、「国民との科学・技術対話」の推進についての意見（アンケート調査等）を求められた、回答した場合、ご一報下さい。

窓口はこちらです。お気軽にご連絡下さい。

広報・社学連携オフィス／広報・社学連携事務室

大阪大学 21 世紀懐徳堂 ホームページ <http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/>

TEL.06-6850-6443（代）（〒560-0043 豊中市待兼山町 1-13 /大阪大学豊中キャンパス 大阪大学会館 1 階）

TEL.06-6850-5339（「国民との科学・技術対話」窓口担当）E-mail: office@21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp

役員室だより

2011.4 Vol.41

大学の動き

経営協議会を開催

今年度第4回経営協議会を3月18日(金)に、中之島センターで開催しました。学外委員10名、学内委員14名が出席し、1時間半にわたり審議、意見交換が行われました。

各委員から、総合大学における基礎研究の重要性、学生の海外留学の必要性、長期的視野に立ったキャンパス整備や施策の決定など大学運営全般に対する様々な意見が出されました。

また、平成23年度経営協議会の開催日程は下記のとおりです。

◎開催日程

- 第1回 平成23年6月15日(水)
- 第2回 平成23年9月14日(水)
- 第3回 平成23年11月25日(金)
- 第4回 平成24年3月16日(金)

2011年の主な取組事項(「大阪大学活動方針2011」から)

- 外国語学部を持つ国立総合大学としての大阪大学だけに可能な、個性ある言語教育と国際教育の実現を図る。
- 大学院高度副プログラムを充実し、新たに副専攻制度を開始することにより、学際的知識、複眼的視野、グローバルな視点を重視する教育を拡大する。
- 大阪大学独自の教養教育と高度教養教育を学部生に対して展開するとともに、大学院生を対象とする高度教養教育を推進する。
- 新設のインターナショナルカレッジの活動を本格化し、グローバル30学部コースの〈化学・生物学複合メジャーコース〉と〈人間科学コース〉を確実に運営するとともに、大学院コースの充実を図る。
- 外国人・留学生のためのサポートオフィスの継続的運営を進めるとともに、短期学生受入・派遣プログラムの充実化に全学的に取り組む。
- 科学研究費補助金、大型プロジェクト研究費等の獲得をめざした企画強化と全学的な支援体制の確立、および研究力のさらなる向上に資する支援組織の強化を図る。
- 若手研究者が「ときめき」をもって研究を実施できるよう研究活動の支援を強化する。
- テクノアライアンス棟を最大限に活用し、産学連携活動を強化する。とくに産学連携活動の組織体制の一層の強化を図ると同時に、「共同研究講座」制度を更に発展させた協働研究所・協働ユニット等の新たな企画を推進する。
- 中之島センターにおいて大阪大学21世紀懐徳堂を窓口とする社会学連携事業を推進するとともに、「21世紀の懐徳堂プロジェクト」事業をセンターに誘致するなど連携を図る。
- 再構築した大学広報ネットワークを活用し、情報ネットワーク、情報マネジメントの強化を図り、外部に対し積極的な広報を行うとともに、構成員に対する広報を強化する。
- 学校教育法施行規則等の一部を改正する省令の施行に伴う大学の教育情報の公表の促進を図る。
- 海外教育研究センターをハブとした重点的交流推進校のネットワーク構築に努め、それに基づく学生・教職員交流の促進を図る。
- 財務基盤の安定化のため、平成21年度に創設した「大阪大学未来基金(大学)」の拡充を図るとともに、教育支援などの基金による事業を行い、大阪大学に自らの寄附金により後進を育てるという文化を定着させる。
- 事務組織のスリム化を図るため、本部事務機構の管理職ポストを削減するとともに、学内組織について事務組織の共通化を推進する。
- キャリア形成支援等による女性研究者の活躍促進、および障害者雇用推進のための職域拡大等に努め、より

一層多様な人材の活用を推進する。

- 「大阪大学職員像」に基づき職員の育成を図るため、階層別研修の体系化などにより研修の充実を図るとともに、適切な助言者を養成することなどによりオン・ザ・ジョブ・トレーニング（OJT）の充実を図る。
- 全学統一の新任教員研修を実施し、大学を支える優れた人材育成の一助とする。
- 標準化・IT化・一元化をベースに定型業務の効率化を図ることにより、部局および本部において重要施策や企画業務に投入しうる人的・財政的余力を生み出し、大阪大学の教育・研究・社会貢献活動の格段のレベルアップを可能にする事務体制と業務手法を確立する。
- 老朽化建物の耐震改修・リニューアルを進めるとともに、テクノアライアンス棟、免疫学フロンティア研究センター棟などの施設整備を通じて、大阪大学の教育・研究・社会貢献の活動のさらなる強化をめざす。
- 温室効果ガスの削減に向けて、学内における推進体制を整備し、実効性と継続性のある低炭素化対策のための取組みを進める。
- 教職員・学生の保育支援を充実させるため、吹田地区保育園の定員を増やすとともに、豊中地区に新たに保育園を整備する。
- 教育研究活動等の更なる充実・活性化を図るため、全部局を対象として、評価室と部局との達成状況評価等に係る意見交換を行う。
- 本学において二度と研究費の不正使用が生じないよう、教職員の不正使用防止に向け誠実に行動する意識の一層の向上を図るとともに、監査体制の強化や納品検収体制の充実など、再発防止に万全を図る。
- 講習会、講演会等の普及啓発活動を通じて学生、教職員の危機管理意識の高揚を図り、学内の安全管理に関する責任体制を確立する。
- 最新の情報通信技術の活用により、先進的な情報システムを整備するとともに、より高度の情報セキュリティを確保する。

4月からの新体制

総長補佐 7名

大 竹 文 雄 (社・教授) 木 下 タロウ (免・教授) 杉 本 孝 司 (言・教授) 長 谷 俊 治 (蛋・教授)
馬 場 章 夫 (工・教授) 東 島 清 (理・教授) 福 澤 正 洋 (医・教授)

総合計画室 10名

○西 田 正 吾 (理事・副学長) 中 村 春 木 (蛋・教授)
岡 成 文 (文・教授) 三 成 賢 次 (法・教授)
近 藤 忠 (理・教授) 松 本 紀 文 (総務企画部次長)
井 上 克 郎 (情・教授) 猿 渡 政 範 (財務部長)
天 野 敦 雄 (歯・教授) 山 崎 雅 男 (施設部長)

教育・情報室 12名

○小 泉 潤 二 (理事・副学長) 竹 村 治 雄 (サ・教授)
三 原 健 一 (言・教授) 平 沢 安 政 (人・教授)
藤 田 喜久雄 (工・教授) 菊 野 亨 (情・教授)
宮 崎 純 一 (医・教授) 渡 洋 二 (情報推進部長)
小 林 傳 司 (CSCD・教授) 藤 藤 幸 (学生部長)
工 藤 真由美 (文・教授) 石 井 道 悦 (図・事務部長)

研究・産学連携室 10名

○西 尾 章治郎 (理事・副学長) 高 木 淳 一 (蛋・教授)
大 坊 郁 夫 (人・教授) 堂 目 卓 生 (経・教授)
池 道 彦 (工・教授) 正 城 敏 博 (産連・教授)
北 岡 良 雄 (基・教授) 笹 川 光 (研究推進部長)
萩 行 正 憲 (レ・教授) 林 正 一 郎 (不正使用防止
計画推進室長)

評価室 10名

○土 井 健 史 (理事・副学長) 村 上 伸 也 (歯・教授)
川 端 亮 (人・教授) 東 野 輝 夫 (情・教授)
水 谷 規 男 (司法・教授) 八 木 康 史 (産・教授)
青 島 貞 人 (理・教授) 松 本 紀 文 (総務企画部次長)
上 西 啓 介 (工・教授) 高 田 則 明 (評価課長)

財務室 9名

○門 田 守 人 (理事・副学長) 吉 川 秀 樹 (医・教授)
高 崎 信 二 (経・教授) 狩 野 裕 (基・教授)
尾 雅 則 (工・教授) 鈴 聡 (世・教授)
松 浦 善 治 (微・教授) 猿 渡 政 範 (財務部長)
中 谷 和 彦 (産・教授)

人事労務室 10名

○尾 山 真之助 (理事・副学長) 小 川 一 夫 (社・教授)
大 屋 幸 輔 (経・教授) 南 埜 俊 工 (工・教授)
棟 居 快 行 (司法・教授) 大 野 信 一 (総務企画部長)
岡 村 康 行 (基・教授) 中 村 信 一 (総務企画部長)
金 倉 謙 (医・教授) 綿 谷 茂 一 (人事課長)

広報・社会学連携室 9名

○高 杉 英 一 (理事・副学長) 永 田 靖 (文・教授)
青 江 秀 史 (司法・教授) 望 尾 正 幸 (工・教授)
小 川 哲 生 (理・教授) 尾 藤 幸 三 (学生部長)
宇 野 公 之 (薬・教授) 巽 三 郎 (広報・社会学
連携事務室長)
橋 爪 節 也 (博・教授)

国際交流室 7名

○辻 毅 一郎 (理事・副学長) 仁 平 卓 也 (生物・教授)
山 内 直 人 (国・教授) 鈴 野 陸 (言・教授)
河 原 太 (基・教授) 菊 野 亨 (情・教授)
近 藤 滋 (生・教授)

○印は室長

各室の検討状況

総合計画室

平成23年度計画

平成23年度の本学年度計画については、各部局の年度計画を踏まえて、総合計画室の下に設置した平成23年度計画作成検討ワーキングが中心となつてと

りまとめ、3月末に文部科学省へ提出しました（大阪大学ホームページに掲載 <http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/nendo.html>）。

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、2月及び3月の役員会で次の事項が承認されました。

- 先端科学イノベーションセンターの廃止（平成23年3月31日）
- 適塾記念センターの設置（平成23年4月1日）
 - ・3部門（適塾運営部門、大阪学研究部門、オランダ学研究部門）
- 生命機能研究科生命機能専攻の定量発生生物学連携分野の設置（平成23年4月1日）
 - ・連携機関名 独立行政法人理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター

大学留保ポストの活用による若手教員・女性教員等の支援について

大学留保ポストの活用による若手教員・女性教員等の支援について、3月の役員会で次の事項が承認されました。

- 特に優秀な若手教員の教授昇任の支援について
本学の特に優秀な若手教員を教授に昇任させ、世界の第一線での一層の活躍を支援するため、全学的な観点から大学留保人件費を活用
- 学外からの教授招聘に係る大学留保ポストの活用について

学外より本学の将来を担う人材を教授として招聘し、世界の第一線での一層の活躍を支援するため、全学的な観点から大学留保ポストを活用

- 女性教員の採用・昇任（教授・准教授）に係る大学留保ポストの活用について

学外より本学で活躍が期待できる女性教員を積極的に教授や准教授に採用するとともに、本学の有能な女性教員を積極的に教授または准教授に昇任させ、本学の教育研究の充実及び社会貢献を支援するため、全学的な観点から大学留保ポストを活用（関連記事を人事労務室26ページにも掲載）

テニュアトラック制度の支援について—全学的なテニュアトラック制度の推進—

本学において、ポストク以降の若手研究者が自立して研究できる環境を整備し、優秀な若手研究者の採用と育成を行うため、多様な人材活用推進本部に

「若手研究者育成ステーション」を設置し、テニュアトラック制度を全学的に推進していくことを3月の役員会で決定しました。

大阪大学緑のフレームワークプランの策定

大阪大学では、キャンパス空間の全体像のあるべき姿や方向性を示す「大阪大学キャンパスマスタープラン」及び「大阪大学箕面キャンパスマスタープラン」、並びにこれらの下位にあたる指針として、「大阪大学バリアフリーとサインのフレームワークプラン」を策定しています。

この度、大阪大学キャンパスマスタープラン等の新たな下位指針として、緑地、広場及び街路等の緑



の整備と維持管理の方針をまとめた「大阪大学緑のフレームワークプラン」を策定しました。

今後、本指針に基づき、キャンパス全体の緑地等を一体的及び統一的な考えのもとに、より美しく快適に、かつ継続的に整備・維持管理することを目指します。

大阪大学緑のフレームワークプランの全文については、今後、本学ホームページに掲載する予定です。



省エネ推進会議の開催

大阪大学では、エネルギー量を削減するために、各部局の電力使用量の把握・分析を行うとともに、使用者の省エネルギー意識の向上を図るためポスターを作製・配布して省エネ意識の啓発に努めています。しかし、この夏の猛暑により4月から9月までのエネルギーの需要が昨年に比べ増加したことなどから、省エネルギーへの更なる徹底を実施するため、6月に開催した省エネ推進会議を1月にも追加開催いたしました。

会議では、吹田・豊中・箕面各地区の平成22年度上半期エネルギー使用状況、及び各部局省エネ活動の報告、並びに部局でも実施可能な空調室外機の省エネルギー対策の説明など、省エネ活動への情報交

換を行い、限られた予算・時間の中で大きな効果を上げていくためには、効率的な省エネへの取り組みが必要であることを確認しました。



施設整備等に係る各部局キャラバンの実施

顔の見える対応により、サービスの向上と迅速化・効率化を図るため、また施設整備・営繕工事の計画的・効率的な実施のため、施設部長を隊長とする各部局キャラバンを平成22年9月16日から12月21日にかけて実施しました。

各部局からは老朽対策、安全対策、防水対策などのご要望があり、本結果は施設マネジメント委員会に報告するとともに、営繕工事のプライオリティを決定するための資料とするなど、今後の施設整備に大いに役立てることとしておりますので、各部局におかれましては今後ともご協力いただきますようお願いいたします。



施設整備とキャンパス環境の改善

以下の施設整備とキャンパス環境の改善工事が完了しました。

大阪大学テクノアライアンス棟



構 造：鉄骨造
規 模：地上9階
延べ面積：12,330 m²
着工年月：平成22年1月
完成年月：平成23年3月

本学と社会との連携による産業・人材の創出拠点として、学内外の研究者その他の者の共同利用に供することを目的とする大阪大学テクノアライアンス棟の整備が完了しました。建物のフロア構成は、1階は成果発表などの展示やシンポジウムが開催できるアライアンスホールを配した交流エリア、2階は1フロアに機能的に集約化した事務・会議室エリア、3～9階は研究・実験内容に合わせてフレキシブルに間仕切りを設置できる研究・実験エリアとなっています。

免疫学フロンティア研究センター棟



構 造：鉄筋
コンクリート造
規 模：地上8階
延べ面積：6,585 m²
着工年月：平成22年1月
完成年月：平成23年3月

世界トップレベル国際研究拠点プログラムの拠点となる免疫学フロンティア研究センター棟の整備が完了しました。建物の外観は、隣棟の融合型生命科学総合研究棟のスカイライン、壁面線、基壇のある構成を踏襲し、統一感に配慮しつつも低層部に一部壁面緑化を採用するなど新たなデザイン要素を採用しました。建物デザインの検討時には、これまでにない取り組みとして新しい授業形態であるインターンシップの学生の参加がありました。

フォトニクスセンター棟



構 造：鉄筋
コンクリート造
規 模：地上5階
延べ面積：5,019 m²
着工年月：平成22年3月
完成年月：平成23年1月

本施設では、建物全体を用いた大規模な光エコライフ技術の実証・実験を行います。一環として、省エネ性能に優れた高効率なLED照明を全館に導入しています。建物の外観は、西側バルコニーに設置される設備スペースの目隠しにガラススクリーンを用い、内部に5,000個を超えるLED照明を採用することで、本施設の研究テーマである光科学を象徴したシンボリックなデザインとしました。

工学E6棟（増築）



構 造：鉄筋
コンクリート造
規 模：地上6階
延べ面積：2,446 m²
着工年月：平成22年1月
完成年月：平成23年3月

E6棟の増築工事を実施しました。建物の外観は、既存部分とあわせて完全に一棟のデザインとなるよう工夫をこらしました。外壁面には断熱材を施し、省エネルギー対策を実施するとともに、開口部には複層ガラスを採用し、空調負荷の低減を図りました。また、バリアフリー対策として、福祉対応エレベーターやオストメイト対応の多目的トイレを新設し、施設利用者の利便性に配慮しました。

工学E2棟・工学E5棟（耐震改修）



工学E2棟

工学E5棟

構 造：鉄筋コンクリート造
規 模：工学E2棟 地上4階
工学E5棟 地上3階
延べ面積：工学E2棟 2,799 m²
工学E5棟 1,149 m²
着工年月：平成22年1月
完成年月：平成23年3月

工学E2棟・工学E5棟の建物外周部に鉄骨ブレースを設けるとともに、耐震壁を設け、耐震補強を実施しました。建物の外観は、景観に配慮して配管を隠す目隠しルーバーを設置するなど、工学部エリア全体としての統一性に配慮しました。また、内外装改修・建具改修などを合わせて実施し、建物の機能改善も実施しました。

バリアフリー対策など



保健学科
多目的トイレ・
自動扉の設置

(吹田)グランド
防球ネットの設置

附属図書館本館
トイレ改修

平成22年度においては、約4億5千万円の老朽化に伴う営繕工事予算が措置され、バリアフリー対策として多目的トイレ・自動扉の設置、安心・安全に関するものとして防球ネットの設置、学生サービスの向上に関するものとして老朽化したトイレ改修などを実施いたしました。

教育・情報室

室員の変更

藤井勝博情報推進部長及び細戸康治総合図書館事務部長の退職に伴い、4月1日付けで渡洋二情報推進部長及び石井道悦総合図書館事務部長が教育・情報室員に加わりました。この他に室員の変更はありません。

附属図書館副館長の変更

4月1日付で、理工学図書館担当の副館長が平尾俊一教授（工学研究科）から田中和夫教授（工学研究科）に交代しました。これにより附属図書館の運営は以下のような体制になります。

館長	小泉潤二（理事・副学長）	
副館長	総合図書館担当	阿部武司（経済学研究科教授）
副館長	生命科学図書館担当	仲野 徹（医学系研究科教授）
副館長	理工学図書館担当	田中和夫（工学研究科教授）
副館長	外国学図書館担当	仁田義雄（言語文化研究科教授）

東日本大震災への対応

東日本大震災で被災した学生や入学予定者のために、学生部と教育・情報室ではさまざまな措置を進めています。入学手続き等の弾力化、授業料や入学料の免除、日本学生支援機構による緊急・応急の奨学金採用、大阪大学独自の奨学金の検討、修学についての弾力的な対応、被災者の学生寮入寮希望への対応、

被災地支援のためのボランティア活動への対応や活動に参加する学生のための特別措置、被災地の大学の学生の受入れなどです。詳しくは以下のページをご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/info/earthquake/earthquake>

入学試験

平成23年2月25日－26日に前期日程試験、3月12日－14日に後期日程試験が実施され、3月8日(火)と22日(火)に合格者が発表されました。大阪大学全体での志願者は13,910名で、今年も全国立大学の中

で最多となりました。本年は、東日本大震災のため、後期日程試験の追試験も実施されました。入試関係の多大な業務に従事された教職員の皆様に感謝します。

卒業式と入学式の実施

平成23年3月25日(金)に、平成22年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式が、大阪府中央区の大坂城ホールで執り行われました。また4月6日(水)には、平成23年度入学式が、同じく大坂城ホールで開催されました。

卒業式・大学院学位記授与式では学部生3,507名が卒業し、修士学位が2,063名、法務博士（専門職）が87名、博士学位が482名に授与されました。240名の大学院高度副プログラム修了者に対しては、その意欲と積極性をたたえて拍手が送られました。本

学名誉教授で文化勲章受章者・日本学士院会員の豊島久真男先生に記念講話をいただきました。

入学式では、学部3,555名、大学院2,972名の入学生を迎えました。入学式に続いて学部入学生を対象とするオリエンテーションが行われました。

卒業式・入学式の当日は、学生の家族を含めて、それぞれ1万人近くが一堂に会することになりました。詳細については、本誌の2ページ、45ページに掲載されています。

言語教育と全学教育の抜本的革新

大阪大学の言語教育と全学教育の改革案概要が、教育基盤整備本部会議と役員連絡会で了承され、部局長懇談会に報告されました。

この改革は、大阪外国語大学と大阪大学の統合によるメリットを最大限に生かし、大阪大学だけに可能な、独自の個性ある教育を展開することを目的としています。英語教育を抜本的に刷新し、学生が優れた英語力を獲得すること、また英語以外の言語について大阪大学のリソースによる多様性あるプログラムを提供することを目指しています。

また全学教育については、役員会と教育・情報室の下に「全学教育推進機構（仮称）」を新設し、そこに「学部共通教育部門」「大学院共通教育部門」「言語教育部門」「海外教育部門」「教育学習支援部門」の5部門を設ける予定です。上記の外国語教育は言語教育部門が統括します。大学院の共通教育や海外滞在型教育の充実、また学生に対する学習支援や教員に対する教育支援の強化と多様化が計画されています。

高度教養プログラムの開始

教育・情報室の「高度教養教育準備ワーキング」（主査 小林傳司教育・情報室員）での検討の結果、平成23年度から開始する「高度教養プログラム：知のジムナスティックス」の説明パンフレットが完成しました。

高度教養教育は、「一定の専門知識を身につけ、（職業人あるいは研究者として）社会にまもなく出て行く学生に対して、専門教育以外に必要なとされる知識や能力を与える教育」として定義されています。このプログラムは、“社会人”として必要な“つよさ・しなやかさ・バランス感覚”を兼ね備えた知性の涵養を目的としており、本学の3年次以上の学部学生、及び大学院生が選択して履修することができます。学生が自らの専門とは異なる知の領域に触れること、また研究科・学部の異なる学生の協働による学びを経験することを重視しています。

本年度は、学部高年次のために46科目、大学院生のために175科目提供されます。これらは大阪大学で開講されている科目から、高度教養教育にふさわしい科目を精選したもので、すべての学部や研究科

の学生が受講できます。それぞれの科目にはその特徴に応じて、「世界を舞台に活動する」「異分野の融合を社会に演出する」「成熟した市民社会を創る」「タフな知性で社会を輝かせる」という4種類のキーワードが付され、わかりやすく分類されています。



「世界」／世界を舞台に活動する
 「異分野」／異分野の融合を社会に演出する
 「成熟」／成熟した市民社会を創る
 「タフ」／タフな知性で社会を輝かせる

大学院副専攻プログラムの開始と大学院等高度副プログラムの拡大

「大学院副専攻プログラム」と「大学院等高度副プログラム」の、平成23年度のパンフレットが完成し配布されています。本誌の前号でもお知らせしたように、本年度は高度副プログラムが35に増加して開かれるほか、新しい制度として、3つの副専攻プログラムが開始します。

なお、4月13日(水)に吹田、15日(金)に豊中で、受講希望者のための全学合同のガイダンスが実施されました。



ティーチングアシスタント制度についてのシンポジウムを開催

阪大NOW12月号（2010／No. 121, 11ページ）でお知らせしたように、2月18日（金）に銀杏会館で、教育・情報室の主催によるシンポジウム「ティーチングアシスタント制度とキャリア教育への展開」が開催されました。本学の藤田喜久雄教授、愛媛大学の庭崎隆准教授、北海道大学の細川敏幸教授、筑波大学の小笠原正明特任教授、東北大学の羽田貴史教授による報告が行われました。本学の服部憲児准教授と小林傳司教授が司会を務め、小泉潤二理事・副学長が開会・閉会の挨拶を担当しました。本学の部長、副研究科長、教務委員長ほか多くの教員の参加がありました。

各大学のTA制度の状況や取り組み、また制度改革やそれぞれの課題について詳細な報告があり、充実した討議が行われました。TA制度をキャリア形成教育の視点から検討すべきこと、PFF（Preparing for Future Faculty）の必要性の増大、教員のFDと

TAとの関わり、TAという「教える」ことを通じた「学び」の意味、教育の「アクティブラーニング化」の拡大とTA制度の重要性、大学全体としての組織的な取り組みの必要性、激変する世界の大学とTAなどの問題が、教育の本質に関わる重要な課題として検討されるべきであることが明らかになりました。



シニア・ティーチング・アシスタント（STA）制度の試行的実施

「TA・RAのあり方検討ワーキング」（主査 藤田喜久雄教育・情報室員）での検討結果に基づき、TA制度の改革に向けて、シニア・ティーチング・アシスタント（STA）の受入れを数部局で試行的に実施します。STAは、教員の指導のもとで教育補助業務を行うだけでなく、補助的な教育業務の内容を自ら

計画して支援することを主たる業務内容とします。授業時間と、（授業準備時間を含む）関連の業務時間について、従来よりも高い単価で報酬が支払われます。大学院の博士後期課程（博士課程）の学生のうち、とくに認められた者がSTAの業務に従事し、証明書の発行についても検討される予定です。

学生支援ステーション進路相談ユニット担当教員の配置

教育・情報室のもとの学生支援ステーションは、学生生活に関する相談や修学支援の全学的な対応を行っています。「学生支援ステーション」には、学生生活相談ユニット、進路相談ユニット、障害学生支援ユニットの3ユニットがあります。

これまで、学生生活全般を担当する准教授と、障害学生支援のための助教を置いていましたが、このたび全学の留保ポストにより、キャリア形成支援と

進路相談のための准教授を配置することになりました。教育・情報室の「キャリア形成教育検討WG」での議論の進行と併せて、全学のキャリア形成支援が強化されることになります。

なお、4月から学生部の学生支援課とキャリア支援課が統合され、「学生・キャリア支援課」ととなりました。

新しい学務情報システムを平成23年10月に導入

現在のKOANが更新され、次期学務情報システムが導入されます。平成21年6月から「次期学務情報システム導入プロジェクト」を組織し、現行システムの評価、学務関係業務のあるべき姿の検討や、ア

ンケート、さまざまな調査などを実施してきました。現在は仕様の策定と入札を終え、本年10月の新システム導入に向けて準備を進めています。

附属図書館についてのアンケート調査結果

附属図書館では平成22年10月に、学部生・大学院生・教員を対象としてアンケート調査を実施しました。これはLibQUAL+®(ライプカル)という、米国研究図書館協会が開発した測定調査ツールにより、大阪大学附属図書館を評価したものです。この調査では22の評価項目について「最低限必要であると思われるサービスのレベル」「期待するサービスのレベル」「現在の図書館サービスのレベル」という3つの指標を評価し、その結果により図書館サービスの

全体像を把握します。

調査の結果として、「蔵書」「電子情報」「学習・研究環境」の充実に対する利用者の期待が強いことが明らかになりました。また、ラーニング・コモンズの新設や開館時間の延長が評価されていることがうかがえます。

調査報告の詳細については、本誌の63ページ、また総合図書館のウェブページ(<http://www.library.osaka-u.ac.jp/>)をご覧ください。

キャンパスメンバーズの拡大

——万博記念公園内の施設、および大阪市立の美術館・博物館・科学館

これまで大阪大学は、右の5施設にキャンパスメンバーズとして加入していました。平成23年4月から、大阪大学吹田キャンパスに隣接する万博記念公園内の3施設も利用可能となりました。

◎美術館 ◎博物館 ◎科学館 ◎公園・庭園

現在利用可能な5施設

国立民族学博物館(吹田市)
国立国際美術館(大阪市)
京都国立博物館(京都市)
京都国立近代美術館(京都市)
奈良国立博物館(奈良市)

吹田キャンパスに隣接する万博記念公園内の3施設を追加(4月より)

自然文化園
日本庭園
大阪日本民芸館

※奈良国立博物館と京都国立博物館では、教職員は原則として対象外です。

大阪大学
(吹田キャンパス)

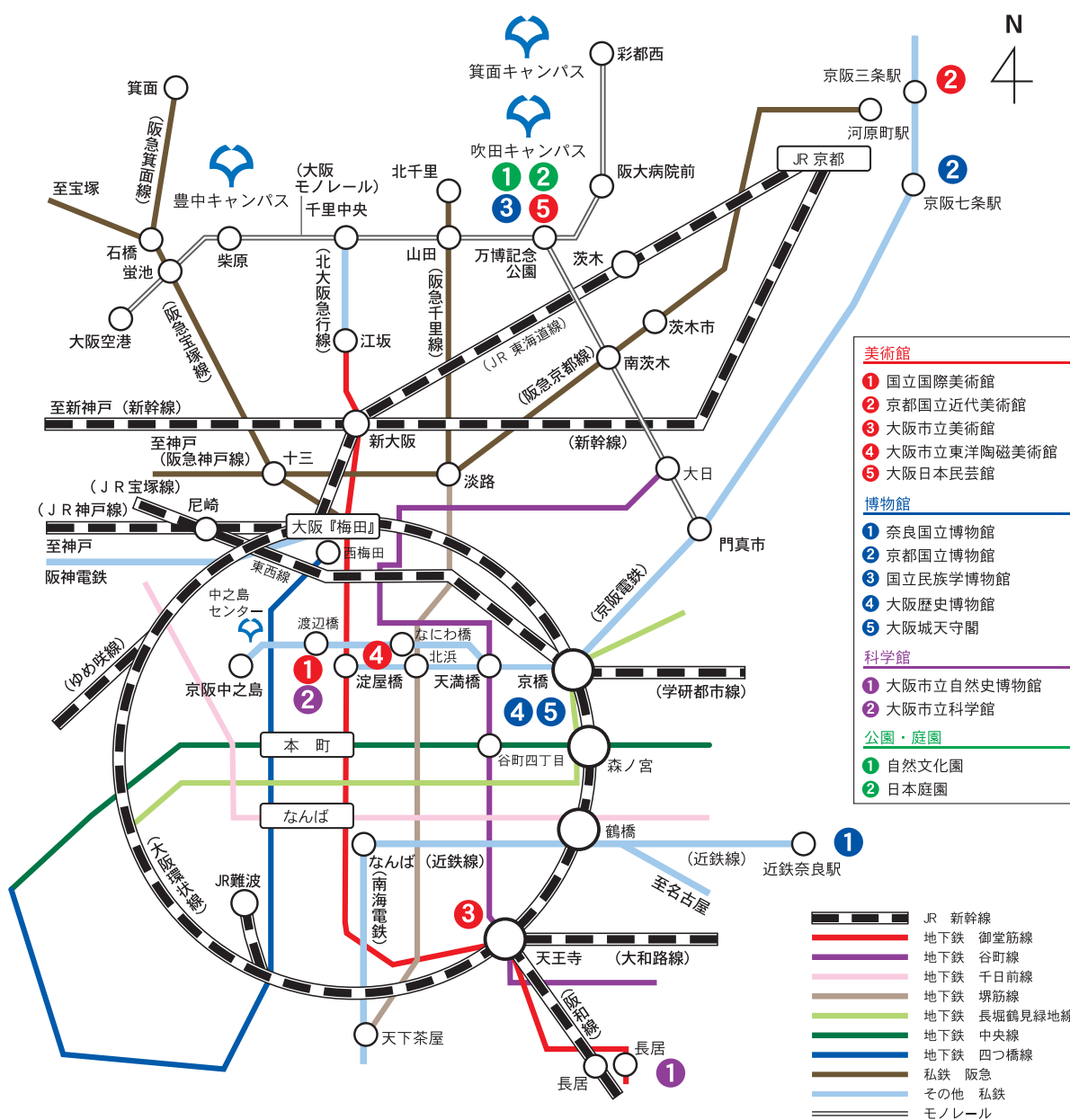


また、平成23年5月からは、大阪市立の美術館、博物館、科学館のキャンパスメンバーズに新たに参加します。これにより本学の学生と教職員は、学生証または教職員証の提示により、市立の6施設に無料入館できることになりました。

大阪大学の全学生は、あたかもキャンパスに多くの美術館や博物館があるかのように、これら14の施設をいつでも利用することができます。「教養」を最も重要な教育理念とする本学の学生が、このような「キャンパス外のキャンパス」を積極的に利用し、直接触れることではじめて可能となる貴重な経験を通じて、多様な文化や芸術、歴史や科学を知ることが望めます。

大阪市立の6施設を追加 (5月より)

大阪市立美術館
大阪市立東洋陶磁美術館
大阪歴史博物館
大阪城天守閣
大阪市立自然史博物館
大阪市立科学館



研究・産学連携室

研究推進に関する将来構想等ヒアリングについて

将来構想等ヒアリングについては、阪大NOW2月号(2011/No.123)において、研究推進に関する本学の将来構想等の検討を戦略的に実施していくための取り組みであることをお知らせしましたが、この度、第2回目として、新たな4名の先生に対してヒアリングを実施しました。

研究・産学連携室においては、前回のヒアリング

を含めた10名の先生方からの貴重なご意見を精査し、研究推進に関する本学の将来構想等の取り纏めを行うこととしています。

今後の研究・産学連携室における活動につきましては、引き続きご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

科学技術振興機構（JST）北澤理事長との懇談会を開催

3月8日(火)に大阪大学中之島センターにおいてJST北澤宏一理事長との懇談会を開催いたしました。

大阪大学からは、西尾理事・副学長をはじめ、研究・産学連携室から大坊室員、米田室員、萩行室員、正城室員と、馬場工学研究科長・総長補佐、池田大型教育研究プロジェクト支援室統括マネージャーが参加しました。

本懇談会では、今後の大阪大学の研究推進方針の検討にあたり、我が国の科学技術振興のために緊急になすべきこと、推進すべきテーマ、政策・改革の

方向性および大阪大学とJSTが互いに協力できることは何か等について、様々な研究費の役割や国際的な研究動向、研究者志望者の育成、具体的な研究事例等も交えて議論されました。

本懇談会を通じて、JSTが求める研究のあり方や、大学が取り組むべき今後の課題が明確となり、コミュニケーションの必要性が相互に確認されました。活発な意見交換が行われ、大変有意義なものとなりました。



JST 北澤宏一理事長



懇談会風景

最先端・次世代研究開発支援プログラムの採択決定について

将来、世界をリードすることが期待される潜在的可能性を持った若手研究者に対する研究支援を目的とした「最先端・次世代研究開発支援プログラム」(内

閣府、独立行政法人日本学術振興会)について、採択課題が決定し、本学から下記のとおり25名が採択されました。

最先端・次世代研究開発支援プログラム採択者一覧(25名)

(平成23年2月10日(採択日)現在)

研究者名	所属部局名	役職	研究課題名
伊達(大久保)規子	法学研究科	教授	持続可能な社会づくりのための協働イノベーションー日本におけるオーフス3原則の実現策
藤本ゆかり	理学研究科	准教授	免疫機構を制御する微生物由来化合物の化学合成と機能解析および新規制御分子の創製
高島 成二	医学系研究科	准教授	臓器特性を利用した心血管疾患治療標的の探索と臨床応用
橋本 均	薬学研究科	教授	精神疾患の成因に関わる遺伝子×環境相互作用ダイナミクスの解析系の構築
木田 敏之	工学研究科	准教授	オイル中の有害物質を効率的に完全除去・回収できる革新的植物性吸着剤の開発
杉本 宜昭 ^{※1}	工学研究科	特任講師	走査型磁気共鳴顕微鏡を用いた単原子の元素同定法の開発
関 修平	工学研究科	教授	全有機分子サイリスタ・ソレノイドのデザインと実証
中野 貴由	工学研究科	教授	骨微細構造から学ぶ骨生体材料学の構築と骨配向化制御
藤田 克昌	工学研究科	准教授	生体機能可視化のための超解像分子イメージング技術の開発
松崎 典弥	工学研究科	助教	1細胞レベルで3次元構造を制御した革新的ヒト正常・疾患組織モデルの創製
馬越 大	基礎工学研究科	准教授	Membranomeに基づく革新的バイオテクノロジーの創成
福井 賢一	基礎工学研究科	教授	エネルギー変換場としての界面電気二重層の分子論的描像の解明とその応用展開
荻 博次	基礎工学研究科	准教授	診断・創薬イノベーションを実現する超高感度振動子バイオセンサーの創成
館野 高	基礎工学研究科	准教授	聴覚中枢神経マイクロ・インプラントにおけるシステム・インテグレーションの基盤形成
熊ノ郷 淳 ^{※2}	微生物病研究所	教授	セマフォリンによる細胞移動及び小胞輸送ナビゲーション機構の解明
藤永由佳子	微生物病研究所	特任准教授	ボツリヌス毒素複合体の体内侵入機構の解明と経粘膜ワクチンデリバリーとしての応用
安藤 陽一	産業科学研究所	教授	トポロジカル絶縁体による革新的デバイスの創出
柳田 剛	産業科学研究所	准教授	自己組織化酸化ナノワイヤを用いた極微デバイスによるグリーン・イノベーション
能木 雅也	産業科学研究所	助教	プリント技術によるバイオナノファイバーを用いた低環境負荷・低温エレクトロニクス製造技術の開発
向川 康博	産業科学研究所	准教授	コンピュータシミュレーションによる安全な人体内部3次元構造の可視化
西野 邦彦	産業科学研究所	准教授	薬剤排出ポンプによる細菌多剤耐性化・病原性発現制御機構の解明と新規治療法開発
栗栖 源嗣	蛋白質研究所	教授	水から水素発生するラン藻モデル細胞創成に必要な光合成レドックス代謝ネットワークの完全理解
篠原 美紀	蛋白質研究所	准教授	流産リスク管理に向けた配偶子異数体形成過程の基礎的研究
三木 裕明	蛋白質研究所	教授	細胞内Mg ²⁺ 制御の分子実体解明とがん悪性化シグナル
清水 克哉	極限量子科学研究センター	教授	全元素の超伝導化

※1 4月1日より准教授 ※2 4月1日より医学系研究科

評価室

大阪大学業績集 2007－2009 の作成

基礎データ収集システムによるデータをはじめとする各種データに基づき、第1期中期目標期間前半の3年間の教育・研究・社会貢献の活動状況並びに業務運営の状況を取りまとめた「大阪大学業績集 2004-2006」に引き続き、このたび、第1期中期目標期間後半の3年間の活動を取りまとめた「大阪大学業績集 2007-2009」を作成し、本学のホームページに

掲載しました（HP アドレス http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/feature/files/gyousekisyu2007_2009.pdf）。

第1期中期目標期間における本学の様々な活動について、データ及び図表等を用いて分かりやすく説明していますので、「大阪大学業績集 2004-2006」とあわせてご活用ください。



第1期中期目標期間における評価総括書の作成

第1期中期目標期間における本学の活動成果・実績を示すとともに、本学の評価制度や各種評価結果の概要、各部局独自の自己点検・評価、外部評価の実施状況等について総括した「第1期中期目標期間における評価総括書」を作成し、本学のホームページに掲載しました（HP アドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/feature/files/soukatusho2004-2009.pdf>）。

第1期中期目標期間における本学の活動を俯瞰する際に、また、第2期中期目標期間における自己点検・評価の実施に向けてご活用ください。

第1期中期目標期間における本学の活動を俯瞰する際に、また、第2期中期目標期間における自己点検・評価の実施に向けてご活用ください。



財務室

平成22年度予算補正（第3次）

財務室において策定した平成22年度予算補正（第3次）案が、2月21日の役員会で承認されました。
その概要は、補正予算第2次の収入見込額に比して、

約1.7億円の増収となることなどに対して、補正を行ったものです。

平成23年度予算について

第二期中期目標期間における学内予算の基本方針である、国立大学法人大阪大学予算編成方針に基づ

き策定しました、平成23年度収入支出予算案が、2月21日の役員会で承認されました。

平成23年度収入支出予算

（単位：千円）

区 分	予 算 額	備 考
収 入		
運営費交付金	50,455,119	
一般運営費交付金	39,423,022	
特別運営費交付金	3,882,496	
特殊要因運営費交付金	4,259,263	
附属病院運営費交付金	1,985,673	
業務達成基準対象事業等運営費交付金	904,665	前年度からの退職手当111,000を含む
授業料、入学料及び検定料収入	13,174,934	
附属病院収入	31,249,009	
雑収入	1,188,384	
計	96,067,446	
寄附金収入	4,450,144	
産学連携等研究収入	28,685,390	
著作権及特許権等収入	114,308	
計	33,249,842	
施設整備費補助金	3,289,512	
国立大学財務・経営センター施設費交付金	148,000	
長期借入金	861,616	
設備整備費補助金	222,959	
計	4,522,087	
合 計	133,839,375	
支 出		
人件費	46,602,579	
役員人件費	186,372	
教員人件費	27,432,366	
職員人件費	15,082,802	
退職手当	3,901,039	
物件費	51,918,843	
管理運営経費	8,122,313	
教育研究基盤経費	6,872,712	
診療経費	20,209,110	
事項指定経費	531,572	
個別収入対応経費	829,085	
概算要求事項経費	4,661,229	
債務償還経費	5,588,126	
戦略的経費等	4,311,031	
業務達成基準対象事業費等	793,665	
計	98,521,422	
寄附金支出	4,420,034	
産学連携等研究費	26,261,524	
著作権及特許権等経費	114,308	
計	30,795,866	
施設整備関係経費	4,057,432	
病院特別医療機械整備費	241,696	
大型特別機械整備費	0	
設備整備関係経費	222,959	
計	4,522,087	
合 計	133,839,375	

平成22年度教育研究等重点推進経費の執行計画について

「教育研究等重点推進経費」の第6次執行計画（案）が承認されました。採択事業は以下のとおりです。

第6次執行計画

部 局 等 名	事 項 名	経費区分
医学系研究科(保健学専攻)	検査技術科学実習機器の整備	運営費交付金
工学研究科	学生実習工場の機械設備の導入	
附属図書館	シラバス掲載図書コーナーの設置	間接経費
蛋白質研究所	蛋白質研究共同利用・共同研究拠点の蛋白質一次構造解析システムの整備	
接合科学研究所	試料水平型多目的X線回折装置	
ラジオアイソトープ総合センター	RI画像解析システムの更新	
太陽エネルギー化学研究センター	ドラフトチャンバー設備の更新	
執行計画額	合計 58.620 千円	

人事労務室

大阪大学平成22年度第2回男女共同参画セミナーの開催について

多様な人材活用推進本部・男女共同参画推進オフィスは、平成22年度第2回男女共同参画セミナー「若手女性研究者・女子学生と男女共同参画」を去る3月10日(木)に開催しました。

同セミナーには、本学からは多様な人材活用推進本部員、男女共同参画推進オフィス室員が参加したほか、学外を含めた多数の教職員や学生が参加しました。

当日は、国立大学の中でも男女共同参画の推進について先進的な取組を実施している京都大学から、犬塚典子女性研究者支援センター特任教授をお招きし、「男女共同参画施策の動向と京都大学における取組」と題して、具体的な大学の取組状況についてご講演いただきました。

また、本学藤原康文工学研究科教授からも「工学部における男女共同参画の取組について」と題して講演が行われるとともに、男女共同参画推進オフィ

ス等における取組について、頼本維樹男女共同参画推進オフィス室長からの報告がありました。

その後、全体討論が行われ、女性研究者の採用の促進や研究者を目指す女子中高生に対する活動、若手女性研究者の支援などについて、活発な意見交換や質疑応答が行われました。



犬塚典子特任教授による講演

女性教員の採用・昇任（教授・准教授）に係る大学留保ポストの活用について

多様な人材の活用、男女共同参画の積極的な推進を通じて、教育・研究の質を高め、大学全体の活性化を図ることは、大学としての重要な課題となっております。しかしながら、現状においては、本学の女性教員の比率は国全体における女性研究者比率を下回っております。このことから、特に上位職の女性教員比率を上げる必要があると考えています。

このたび、多様な人材活用推進本部では、総合計

画室の協力を得て、女性教員の採用・昇任（教授・准教授）について、大学留保ポスト等を活用することとし、3月の役員会で承認されました。

具体的には、女性の教授・准教授を採用や昇任させる場合に、最長3年間、大学から大学留保ポスト等を措置するもので、これにより上位職の女性教員比率上昇に資することが期待されます。（制度の詳細については、夏頃を目途に学内に周知する予定です。）

大学としては、このように様々な施策を通じ、多様な人材の活用、男女共同参画の積極的な推進を進める所存ですので、引き続きご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

広報・社会学連携室

広報・社会学連携オフィス

4月1日から本部事務機構に、広報・社会学連携担当理事・副学長をオフィス長として広報・社会学連携オフィスが新しく設置されました。

オフィス制を取ることにより、これまでの事務組織の枠にとらわれることなく、スピーディーな業務対応と人員配置を可能とし、様々な事象に対し、よ

り効率的で迅速な対応を目指します。

また、広報・社会学連携事務室は、21世紀懐徳堂を通じた社会学連携活動、「広報ネットワーク」を活用した広報活動の活性化をさらに推進してまいりますので、引き続き学内関係部署のご協力をお願いいたします。

研究者のアウトリーチ活動の支援について

平成22年6月に内閣府から「国民との科学・技術対話」を推進する基本的取組方針が出されました。大阪大学では、研究費の金額に関わらず、研究者のアウトリーチ活動や社会に開かれた活動を推進していきたいと考え、本学の社会学連携活動の拠点でもある「大阪大学21世紀懐徳堂」に大学の「国民との科学・技術対話」支援窓口を置きました。

窓口として、大阪大学のさまざまな実践を把握・情報集約するとともに、アウトリーチ活動の実績がある関係部局との連携・協力を得ながら、研究者、研究プロジェクトの皆さんがアウトリーチ活動を円滑に実施出来るよう支援体制を整えていきます。

詳しくは8ページのクロズアップをご覧ください。

適塾記念センターについて

大阪大学の精神的源流である「適塾」建物の維持管理運営と緒方洪庵と適塾関係者の業績の顕彰事業を継続発展させ、さらに、新たに大阪大学とオランダ学に関する研究活動を加えて、適塾関連の諸活動の一層の活発化を期することを目的として、平成23年4月1日に適塾記念センターが大阪大学会館4階に設置されました。

広報ネットワークについて

大阪大学の広報活動を活性化するために、「広報ネットワーク」を活用しています。活動のひとつとして各部局から選出いただいたネットワーク責任者の方々に、本学が発信した情報リリースの一覧をメールにて送付することにより情報の共有化を進めています。

教育情報の公表について

学校教育法施行規則の一部を改正する省令が、平成22年6月15日に公布され、平成23年4月1日から施行されました。

大学等が公的な教育施設として、社会に対する説明責任を果たすとともに、その教育の質を向上させる観点から、公表すべき情報を法令上明確にし、教育情報の一層の公表を促進することを目的としています。

大阪大学におきましても、本学HPにページを設け、積極的な教育情報の公表に取り組んでいます。

ホームページアドレス

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/announcement>

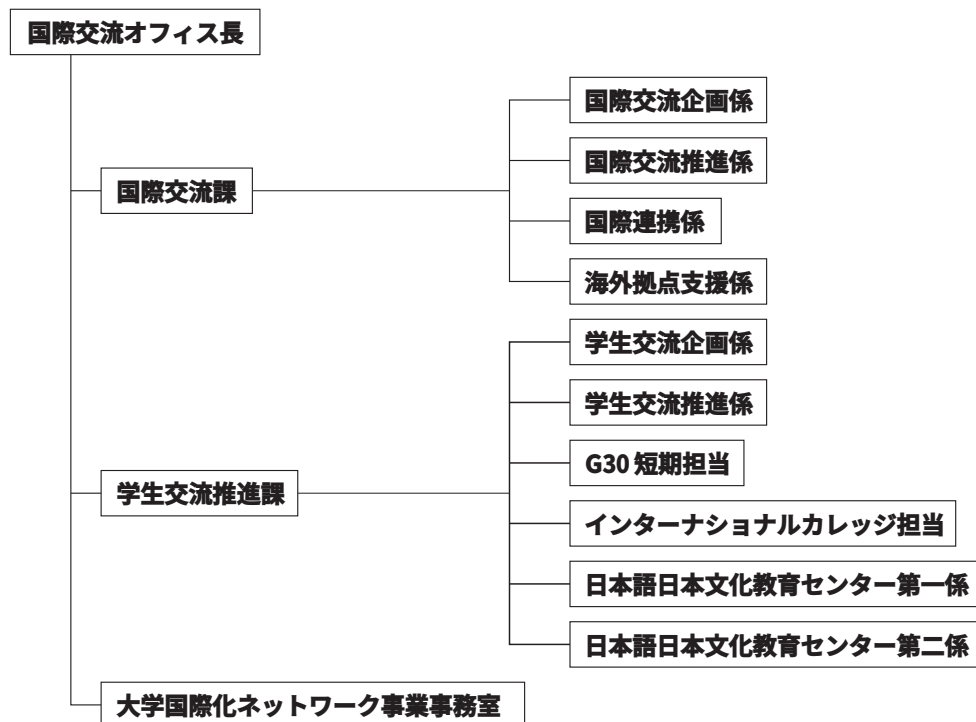


国際交流室

国際部から国際交流オフィスへ

この度国際部が改組され4月1日から国際交流オフィスとして新たに生まれ変わりました。従来の国際連携課を国際交流課に統合し、国際交流課と学生交流推進課の2課体制となりました。さらに大学国

際化ネットワーク事業事務室を設置し、同事業の事務担当体制を強化しました。新しい組織は以下の通りです。



国際交流オフィス構成図

東日本大震災への対応

未曾有の災害のため、とくに原子力発電所被災に起因する放射線の影響に対する懸念のため、多くの留学生が帰国、来日の延期、入学の辞退さらには留学先の変更など不測の意思決定を迫られているであろうと考えられます。大阪大学は現在のところ直接的な影響は受けておらず、全て平常通りで新学期が開始されており、受入プログラム等も何ら支障なく実施されていますが、留学生から何らかの申し出があれば、その意向を尊重いたします。

その一方で、他大学からの要請により追加の留学生の受入を行う可能性があります。もしこのような要請があった場合、とくに短期受入プログラム OUSSEP の Independent Study、同じく FrontierLab @OsakaU は、先生方の一層のご協力が必要となりますので、よろしくお願いいたします。また留学生に関して震災関係で個別に要請のあった場合は学生交流推進課までご相談下さるようお願いします。

G30 における近隣の大学との連携について

国際化拠点整備事業（通称グローバル30）は、組み立て直しにより事業名が「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」に変更されました。大変に長い名称なので、略称としてこれまでのG30を使用することも可としています。2月末に補助金申請を行い、本学は昨年より250万円ほど増額の約2億500万円が措置される見通しです。本年度の事業には、組み立て直しに対応した幾つかの事業が加わることになります。一つは近隣の神戸大学、関西大学、関西学院大学との連携、もう一つは関西経済連合会、関西経済同友会との連携で、後者については関西経済連合会が設置を進めているアジア太平洋研究所との連携も視野に入れています。

神戸大学とはすでに海外拠点での連携活動を開始しており、去る3月4日に行われた神戸大学ブリュ

ッセルオフィスの開所式には本学から辻副学長・弘津グローニンゲンセンター長が参加し、ラウンドテーブルディスカッションでは本学と欧州の教育交流について紹介する機会がありました。今後、幾つかのイベントを通して連携が深められてゆくことを期待しています。

また、前号でも紹介しましたが、大学の世界展開力強化事業（「キャンパス・アジア」中核拠点支援、米国大学等との協働教育創成支援）、学生の双方向交流の推進（新たに3ヶ月未満の派遣7000名、受入7000人を支援対象に追加）の2つについても、予算措置がされています。申請についてすでに学内で一度計画の有無に関する照会を行っていますが、実施を予定される場合は、応募を検討されるようお勧めします。



創立 80 周年記念事業



原点へ 未来へ

大阪大学は 2011 年に創立 80 周年を迎えます



大阪大学創立 80 周年記念式典、記念祝賀会、記念公演（文楽上演）の中止について

本誌でも度々ご紹介しました、5月1日(日)に開催を予定しておりました創立 80 周年記念式典、記念祝賀会及び記念公演（文楽上演）ですが、この度の「東日本大震災」による甚大な被害状況を鑑み、被災に対する救援及び国を挙げての復興に全力を尽くすことを最優先とするため、中止することといたしました。

記念式典等へのご参加を予定されていた皆さま、関係者の皆さまには、多大なご迷惑をお掛けいたしますことを深くお詫びいたします。

なお、創立 80 周年記念事業、各種関連事業の一部

につきましても、下記のとおり中止、延期または内容を変更させていただきます。

詳細は、大阪大学 HP (<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/80thAnniversary/overview>) にて随時お知らせいたしますので、何卒ご理解のほどよろしくお願いいたします。

最後に、今後とも創立 80 周年記念事業に対し、皆さまのご支援とご協力を賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

■変更内容がほぼ確定している創立 80 周年記念事業（平成 23 年 4 月 13 日現在）

当初予定日	事業名	変更内容	開催場所
3～5月	学生企画による創立80周年記念広報事業創立80周年イルミネーション	延期（秋頃）	中之島センター
4～6月	大阪大学創立80周年記念展 「阪大生・手塚治虫－医師か？マンガ家か？」	実施 (4月28日～6月30日)	総合学術博物館
4～8月(予定)	学生企画による創立80周年記念広報事業創立80周年記念ペイント	実施予定	各キャンパス間の スクールバス運行経路
4月30日	国際交流懇談会	中止	リーガロイヤルホテル
5月1日	創立80周年記念式典・記念祝賀会記念公演 (文楽上演)	中止	大阪国際会議場
5月1日	産業界との連携のあゆみ（パネル展示）	延期（5月2日）	大阪国際会議場→大阪大学会館
5月1日	学生支援に対する感謝状贈呈式	延期（5月2日）	大阪国際会議場→大阪大学会館
5月1日	司馬遼太郎記念学術講演会	延期（7月3日）	大阪国際会議場 →サンケイホールブリーゼ
5月1日	大阪大学プレジデント・サミット	延期（秋頃）	リーガロイヤルホテル(予定)
5月1日, 2日	International Symposium on Innovative Nano-biodevices	中止	大阪国際会議場
5月1日, 2日	第16回 大阪大学－上海交通大学 学術交流セミナー	中止	大阪国際会議場, 中之島センター
5月2日	大阪大学会館竣工記念式典・祝賀会 →大阪大学会館完成式	プログラム内容変更	大阪大学会館
5月2日	創立80周年課外研究奨励費（成果発表会）	実施予定	豊中キャンパス
5月2日	中之島ウォークラリー大会	実施予定	中之島界限
5月2日	「コトバと国家の1世紀」	実施	大阪国際会議場
5月2日	世界に広がる大阪大学同窓会ネットワーク	延期（秋頃）	大阪国際会議場
5月2日, 3日	"Dynamism of Immune Reactions & Regulation" - Symposium to celebrate the 80th anniversary of Osaka University -	中止	大阪国際会議場
5月2日～4日	21世紀懷徳堂講座	延期（秋頃）	未定
5月3日	ホームカミングデイ	延期（秋頃）	大阪大学会館

当初予定日	事業名	変更内容	開催場所
5月2日, 3日	創立80周年記念大学祭シリーズ『いちよう祭』		大豊中キャンパス
5月3日	学生による高校生のための大学紹介	実施	阪大学会館
5月3日	O+PUS (オーパス) 映像コンテスト (授賞式)	実施	大阪大学総合図書館
5月3日～5日	ロボカップジャパンオープン2011大阪	実施	インテックス大阪
5月5日	ロボットシンポジウム (仮称)	中止	サンケイホールブリーゼ
5月5日	あしたへの夢—小中高生の未来予想のコンテスト— (展示・表彰式)	延期	未定
5月5日など	創立80周年課外活動奨励費による学生イベント	実施 (一部検討中)	大阪市中央公会堂
6月 (予定)	Bioinspired Materials and Functionality	延期 (6月21日～22日)	ハンプシャーホテル・プラザ (オランダ王国)
6月 (予定)	接合科学研究所産学連携シンポジウム	実施	大阪大学荒田記念館
6月上旬	適塾特別展	実施予定	適塾
7月9日	創立80周年記念大学祭シリーズ『夏まつり』	実施予定	箕面キャンパス
7月25日	天神祭船渡御「阪大船」	実施予定	大阪市大川周辺
9月末頃	日蘭学生会議 (第二回)	実施	グローニンゲン大学 (オランダ) (予定)
10月 (予定)	産業科学研究所記念事業産研テクノサロン・スペシャル	実施	産業科学研究所
10月～12月	創立80周年協賛事業：2011年度博物館秋季企画展 「脳と情報—このあやふやなもの？」 (総合学術博物館・協賛事業)	実施予定	総合学術博物館
10月15日	大阪大学バンコク公開講演会 感染症から私たちの身を守る」ほか	実施	バンコク市内 (タイ)
11月 (予定)	The 4th Global COE International Symposium on Physiome and Systems Biology (仮)	実施 (11月21日～23日)	千里ライフサイエンス センター
11月 (予定)	The 4th International Symposium on Atomically Controlled Fabrication Technology (仮)	実施予定 (10月31日～11月2日)	中之島センター
11月	適塾記念講演会	実施予定	中之島センター
11月又は12月	大阪大学卒業生の集い	実施予定	東京都内
11月4日～6日	創立80周年記念大学祭シリーズ『まちなか祭』	実施予定	豊中キャンパス
11月20日	創立80周年記念大学祭シリーズ『中之島祭』	実施予定	吹田キャンパス
11月23日	歯学部創立60周年記念講演会	実施	リーガロイヤルホテル
11月28日 ～30日	International Symposium on Materials Science and Innovation for Sustainable Society - Eco-materials and Eco-innovation for Global Sustainability- ECO-MATES 2011	実施	ホテル千里阪急エキスポパーク
11月下旬	産業科学研究所第67回学術講演会	実施	産業科学研究所
未定	21世紀懐徳堂シンポジウム	実施予定	未定

■検討中の創立80周年記念事業 (平成23年4月13日現在)

当初予定日	事業名	開催場所
5月13日	The 4th Symposium on Cognitive Neuroscience Robotics	吹田又は豊中キャンパス
7月11日～13日	International Symposium on the Dynamics of Biosystems and Large Scale Information Systems	医学部銀杏会館、情報科学研究科、 生命機能研究科など
8月8日	グローバルCOE コンフリクトの人文学講演会	中之島公会堂
9月頃	Osaka University Photonics Center International Symposium : Advanced Nano Photonics in Asia (仮)	伊勢志摩 (三重県) 予定 →京都市 (予定)
9月2日(予定)	オープンイノベーション・フォーラム in 大阪 (仮称)	未定
9月4日～9日	International Conference on Martensitic Transformations	千里阪急ホテル
12月8日～9日 (予定)	EDIS2011 (The 3rd Global COE International Symposium on Electronic Devices Innovation) (仮)	医学部銀杏会館
12月15日 ～17日(予定)	グローバルCOE生命環境化学国際会議 (仮)	医学部銀杏会館

保健センター 最新情報

■ 豊中本室がリニューアルしました

保健センター豊中本室は、1年余の改修期間を経て平成22年10月に新装オープンしました。豊中本室は昭和46年に建築され、これまで多くの学生・教職員に利用されてきましたが、時代とともに学生数・職員数が増加し、大規模な健康診断を実施するにはきわめて不便な状況になっていました。特に最近では、前の駐車場にテントを設営し、受付・尿検査を外で実施するとともに、廊下でもさまざまな測定を実施するといった状態でした。今回の増築・改修工事により、健康診断の実施状況は大幅に改善され、日常診療における快適性も向上しました。また、増築部分の1階はウッドテラスを併設したフリースペースとして、教職員の皆様にご利用いただけるようになりました。

保健センタースタッフ一同、学生・教職員の健康を支え



るため、また多くの新たなニーズに応えるため一層努力してまいります。

健康上の気になることや困っていることについての健康相談も実施していますので、どうぞ気軽にお立ち寄りください。

■ 学生、教職員の健康を支援しています

保健センターでは、保健管理に関する専門的業務や調査、研究を行い、学生および職員の健康維持・増進を図るとともに、各種講習会や授業を通して健康教育を実施しています。さらには、豊中地区、吹田地区、箕面地区、医病・歯病事業所の4カ所で、それぞれに所属する職員の労働安全衛生管理に関わる産業医活動を行っています。

現在、内科医7名、精神科医5名、整形外科医1名、カウンセラー2名により、日々の診療業務および健康相談を実施しています。その他にも、職員健康診断や特殊業務従事者健康診断の判定とともに、事後措置として生活習慣病予防のための健康指導も実施しています。必要に応じて近くの医療機関や、より専門的な医療機関への紹介も行っています。けがの応急処置や症状に応じた診療科のご案内など、看護師との相談も可能です。詳しくはホームページをご覧ください。[\(http://www.healthcarecenter.osaka-u.ac.jp/\)](http://www.healthcarecenter.osaka-u.ac.jp/)





■ 健康診断は必ず受けましょう

保健センターでは毎年、学生・教職員を対象に下の健康診断を実施しています。学生および職員は健康診断を受検する義務がありますので、該当する健康診断を忘れずに受けましょう。

【平成22年度 各種健康診断実施状況】

健 診 名	受 検 数 (%)
学生定期健康診断	18,853 (74%)
職員定期健康診断	6,665 (75%)
特殊業務従事者健診（採血）	4,108
特殊業務従事者健診（問診）	12,475
有機特化則健康診断	600
雇入れ時健康診断	1,321
海外派遣前、派遣後健康診断	26
胃部健康診断	391

■ 禁煙のサポートをしています

大阪大学では平成17年より受動喫煙防止指針が施行され、建物内での喫煙および歩行喫煙が禁止されています。保健センターでは、学生の講義に「喫煙と健康」を取り入れ、禁煙希望者には積極的にサポートを行い、また職員を対象とした春季・秋季安全衛生集中講習会においても「喫煙による健康障害」について啓発活動を行ってきました。これらの活動の成果として、男子学生の喫煙率が平成16年度12.1%であったものが、平成21年度には7.2%まで低下しました。さらに平成23年4月からは、医学部附属病院での病院敷地内禁煙が実施されることになりました。

■ 女子学生／女性教職員のための相談日があります

保健センターでは、女性医師や女性カウンセラーが女子学生／女性教職員のための専門の外来を開設しています。身体の症状や病気ではないけれど心配なこと、研究や仕事の悩みなど、多くの方の相談を受けてきました。これからも、気軽に相談に来て下さい。希望があれば、専門の診療科や病院にも紹介しています。

■ 何があっても相談室、何があなくても相談室（学生相談室）

学生相談室は、豊中、吹田、箕面地区にそれぞれあり、学生（学部生、院生、研究生）のどのような悩みも受付けています。保護者からの相談にも対応しています。現在、専任カウンセラーとして、男性1名／女性2名が親身になって話を聞き、悩みの解決に協力しています。また、各学部のなんでも相談室とも積極的に連携を図り、より多くの学生の相談窓口となっています。

豊中地区相談室の入口は、今回の増築・改修により保健センター南東の角に変わりました。階段で2階に上がれば明るく快適な相談室があり、ゆっくり相談できます。一人で迷ったり、悩んだりするより、一度学生相談室に来てみてください。



■ ハラスメント相談室 …ハラスメントのない大学を目指して

保健センター内に、今回新たにセクシュアル・ハラスメント相談室とアカデミック・パワー等ハラスメント相談室が設置されました。それぞれ、専門の相談員が真摯にお話をお聴きし、良好な職場環境、研究環境を維持できるよう、問題解決のための調整を行います。保健センター南東の角の階段を上った2階に入口があります。「これもハラスメント？」と思ったら遠慮しないでハラスメント相談室にご相談ください。秘密は厳守します。

「科学研究費補助金実務担当者向け説明会」に約80名が参加

科学研究費補助金に係る事務手続きや執行上の注意点などの実践的な内容について説明を行い、科研費業務についての知識・スキルを向上させ、業務効率化を図ることを目的に、実務担当職員を対象とした科研費実務担当者向け説明会を1月18日(火)に吹田キャンパスにおいて開催し、約80名の実務担当者が参加しました。

説明会は、研究推進課学術研究推進係の各業務担当者より、科研費制度の概要や応募・申請手続きと書類作成における注意点、繰越制度、特別研究員奨励費、分担金取扱の注意点、財務会計システム登録等について詳細な説明を行いました。また、不正使用防止計画推進室から科学研究費補助金の不正使用にかかる説明があり、不正使用防止に対する意識向上を図りました。



説明会後のアンケートでは、「申請書等の間違いやすい記載ポイントや過去の修正事例が明示されていてわかりやすかった」、「執行についてのよくある質問や実例などの紹介を加えて、来年も開催してほしい」などの声が寄せられました。

研究推進課では、今後、説明会の実施にあたってはアンケート結果をもとに、より効果的・有意義なものとし、また、部局と研究推進課で積極的に情報共有を行うことにより、共にスキルアップしつつ大阪大学における研究推進を支え、さらには学内全体の業務効率化へとつなげていければと思っています。

(研究推進部研究推進課)

平成23年度 「大阪大学安全衛生年間標語最優秀賞」受賞

安全衛生管理部では、安全で快適なキャンパスづくりを呼びかける、分かりやすく、親しみやすい平成23年度大阪大学安全衛生年間標語を募集しました。

募集期間は平成22年12月20日(月)～平成23年1月20日(木)で、応募数は35点(23名)でした。慎重に審査した結果、工学研究科マテリアル生産科学専攻博士前期課程2年の飯尾裕太郎君(産業科学研究所・中嶋研究室)の次の作品が最優秀作品賞に選ばれました。



「みんなでつくろう
安心・安全・心地よいキャンパス」



右から3番目が飯尾裕太郎君

平成23年3月4日(金)大学本部3階来賓室にて表彰式を執り行い、西田正吾安全衛生管理部長(理事・副学長)から表彰状及び副賞(防災用品一式)が贈呈されました。なお、最優秀作品については、今後安全衛生に関する啓発活動等において幅広く活用していきます。

(安全衛生管理部)

理学研究科・理学部が『第12回理学懇話会』を開催

大阪大学大学院理学研究科・理学部では、1月20日(木)午後1時から、千里阪急ホテルにおいて「理学部の原点から見渡す未来像」をテーマに「第12回理学懇話会」を開催しました。

この理学懇話会は、企業の幹部等で活躍している理学研究科・理学部の同窓生である学外委員をお招きし、理学研究科長・理学部長から理学研究科・理学部の現況を報告した上で、理学研究科・理学部の教育・研究等について意見交換等を行っていたものです。

また、2年前の開催から、学外委員以外の同窓生にも案内し、広く理学研究科・理学部の教育研究活動を知ってもらうため、60余りある研究室の研究紹介として、ポスターセッションも行っています。さらに今回は、同窓生が活躍する企業の人事担当者にも案内しました。

当日は、学外委員、企業等で活躍している同窓生、企業の人事担当者、理学研究科・理学部に所属する教授、ポスターセッションを行う大学院学生等、総勢170名余りの参加を得て開催されました。

本会では、この会の実行委員長である篠原 厚理学研究科副研究科長の開会挨拶に始まり、続いて東島 清理学研究科長・理学部長からの理学研究科・理学部の現状について報告が行われた後、「大阪大学理学研究科の原点について」



理学懇話会委員による意見交換会



大学院生によるポスター発表



東島研究科長・学部長による理学研究科現状報告



金森名誉教授による講演

と題して、大阪大学元総長・元理学部長である金森順次郎名誉教授の講演があり、また、「理学研究科の将来展望について」と題し、篠原 厚、原田 明、滝澤温彦、小川哲生各副研究科長から、それぞれが担当する教育、研究、国際交流、社会貢献の4つのカテゴリーについてプレゼンテーションが行われました。

その後、隣接したポスター発表会場において、貼り出された約60件のポスターをもとに、各研究室で行っている最新の研究について、ポスター発表者である大学院生等と企業等学外出席者との間で、通常の学会等とは異なった視点から活発な質疑応答が行われました。

また、ポスター発表と平行して開催された意見交換会では、川村 光教授の司会のもと、学外委員、理学研究科内出席者の双方から、理学研究科・理学部の教育・研究に対する助言・要望等、活発な意見交換が行われ、今後の理学研究科・理学部の発展のために大変有意義なものとなりました。

引き続き行われた懇親会でも、和やかな雰囲気のもと活発な意見交換が行われ、いつまでも話が尽きない様子でした。

(理学研究科・理学部)

第7回 共通教育フォーラム開催

1月28日(金)の15:00から、第7回共通教育フォーラムを大学教育実践センター6階・大会議室において開催しました。立命館大学の木野茂先生に「学生とともに作る授業—双方向型授業への誘い」という題でご講演を頂きました。出席者は41名でした。

まず最初に、背景的な事柄として、高等教育の変化と大学の授業のパラダイムシフトについて説明があり、従来の知識伝授型授業から学生自身の自主的能動的な学びを引き



出す双方向型授業への転換の必要性が述べられました。また、データに基づいて、双方向型授業は学生の主体的な参画ではじめて効果を発揮することなどが示されました。

続いて、これらを踏まえて、コースツールの活用、ディベート授業、グループ研究、創作討論劇などの様々なタイプの多人数双方向型授業の実践が紹介されました。授業評価アンケートの分析にみるこれら授業の成果、ならびにその特徴と工夫が示されました。さらに、学生とともにつくる授業から、学生とともに進めるFDへの展開が紹介され、同種の活動を行っている阪大の「バンキョー革命」への応援メッセージもいただきました。

講演に引き続いて行われた質疑応答では、授業の具体的な進め方、学生参加型FDの進め方などについて、限られた時間ではありましたが、非常に活発なやり取りがなされ、定刻を若干過ぎて閉会しました。

今回のフォーラムは、共通教育の重要課題である多人数授業の改善ならびに双方向型の授業推進に有益な示唆を与えるものとなりました。

(大学教育実践センター)

「大阪大学留学生教育・支援協議会」兼「平成22年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会」開催

国際教育交流センター及び国際部学生交流推進課が協力して毎年実施している「大阪大学留学生教育・支援協議会」兼「平成22年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会」が、去る2月4日(金)吹田キャンパス銀杏会館で開催されました。今年度は大学における留学生のキャリア支援を主題とし、学外から61名、学内から33名の計94名の参加がありました。まず辻毅一郎・副学長・国際交流担当理事よりご挨拶があり、続いて文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室氷見谷直紀室長より平成23年度留学生関係予算についてお話を頂きました。続いて名古屋大学留学生センター松浦まち子教授と株式会社 Keisei 張敬清氏、一橋大学国際教育センター西谷まり准教授、信州大学学生支援課金子功課長が、各大学での先駆的取組を紹介し、企業側からソニー株式会社グローバル人材開発部門採用部シニアリクリーティングマネジャー犬塚忠暁氏が大学へ期待することを述べられ、活発な質疑応答が行われました。休憩後はグループでの討議及び全体討議が行われました。菊



野亨・国際教育交流センター長の閉会の挨拶の後、懇談会が開催され43名の参加があり、全国国立大学からの参加者間で有意義な交流の機会が持たれました。

(国際教育交流センター)

インターナショナルカレッジの竣工披露式が行われました

グローバル30により設置された学部英語コースにおいて、関係部局と連携して円滑な運営を行うことにより、教育の国際化の推進に資することを目的として設置された、インターナショナルカレッジの竣工披露式が2月10日(木)に行われました。

場所は、サイバーメディアセンターから豊中データステーションの2階部分を借用し、教員室、会議室、事務室及



左から、深瀬教授、辻理事・副学長、小泉理事・副学長



び学生用ラウンジに供するために整備、改修したものです。

式には、小泉潤二インターナショナルカレッジ長（教育・情報担当理事）、深瀬浩一同副カレッジ長（理学研究科教授）、辻毅一郎理事（国際交流担当）のほか、化学・生物学複合メジャーコース及び人間科学コースの特任教員などグローバル30関係者の方々が出席し、竣工を祝いました。

（国際交流オフィス学生交流推進課）

「若者のための社会とワタシの関係学」開催

大阪大学・箕面市連携協定事業「若者のための社会とワタシの関係学」（みのお市民活動センター主催、学生支援



ワークショップの様子

ステーション・学生部キャリア支援課後援、21世紀懐徳堂協力）が、2月21日(月)に大学教育実践センター開放型セミナー室で開催されました。

当日は、NPO法人シチズンシップ共育企画代表川中大輔氏をファシリテーターとしてお招きし、学内外から学生・NPO職員・高校教員・会社員等20名の参加のもと、社会との関わり方を考えるワークショップと講演が実施されました。ワークショップでは自ら内にある社会への問題意識を振り返り、活発な意見交換を行うとともに、「学び、活動的に暮らし、働く」社会参加の意義と、より多くのつながりの中で自己が位置付けられることの豊かさについて、参加者による共有がなされました。今回の実施を踏まえて、今後の開催についてもキャリア支援等の視点から検討していく予定です。

（教育・情報室 学生支援ステーション、学生部学生・キャリア支援課）

「学術セミナー:英文による論文発表のための実践的ガイドライン」の開催

2月22日(火)人間科学研究科国際交流室と国際企画推進本部との共催で「学術セミナー:英文による論文発表のための実践的ガイドライン」を実施しました。

このセミナーは、主に人文科学系の研究において英語での論文投稿・出版の際に必要な実践的なガイドラインについて学術出版に携わる編集者の立場から学ぶというものです。主な受講者は、人間科学研究科・文学研究科の教員及び大学院生で、講師には国立シンガポール大学出版のマネージング・ディレクターであるポール・クラトスカ氏をお招きし、約2時間半にわたり行われました。参加者からは「英文の論文投稿を考えていたが、今回、実際に編集に携わっている専門家から論文作成や査読システムといった実践的手続きを学べたのは良かった」というような感想が多数寄せられ、質疑内容も含めて充実した内容の濃いものとなりました。

また、次回開催を望む声も多く、現在、人間科学研究



学術セミナーの様子

科を中心に夏季のライティングセミナーの企画も進行中です。

(人間科学研究科国際交流室／国際企画推進本部)

動物慰霊祭を開催

歯学研究科・歯学部では、2月23日(水)に動物慰霊祭を開催しました。

動物慰霊祭は、本研究科及び本学部の教育・研究のための実験に供され、尊い生命を捧げた幾多の動物の御霊に対し、その御霊を慰め、感謝の意を表するために毎年行われ



ています。

当日は、小雨の降る中、関係教職員及び学生等100名以上が同研究科動物慰霊碑前に参列し、川端動物実験委員会委員長の慰霊の詞の後、参列者が献花とともに感謝と哀悼の意を表しました。



(歯学研究科・歯学部)

タイ王国大使館学生部公使参事官の表敬訪問について

1月20日(木)Alinee Thanawatsuggasari タイ王国大使館学生部公使参事官が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。本学からは、真嶋潤子世界言語研究センター教授、宮本マラシー同センター教授、亀岡雄前国際部長が同席し、タイ王国と本学の学生交流について意見交換および亀岡国際部長による本学の国際交流についての説明が行われました。
(国際交流オフィス国際交流課)



前列左：Alinee Thanawatsuggasari タイ王国大使館学生部公使参事官
右：鷲田清一総長

インドネシア・バンドン工科大学の表敬訪問について

2月18日(金)バンドン工科大学 Akhmaloka 学長、Hasanuddin Z. Abidin 副学長が、鷲田清一総長を表敬訪問されました。本学からは、笠井秀明工学研究科教授、原真由子世界言語研究センター准教授、亀岡雄前国際部長、江

藤靖弘前国際交流課長が同席し、両大学間の学術交流協定の更新覚書の調印式が行われた後、これまでの交流状況や今後の両大学間の更なる交流について意見交換が行われました。



写真左：バンドン工科大学 Akhmaloka 学長
右：鷲田清一総長



写真前列左：バンドン工科大学 Akhmaloka 学長
右：鷲田清一総長

(国際交流オフィス国際交流課)

大阪大学教育研究推進事業による事務職員の短期語学研修レポート

教育研究支援推進事業（海外研修事業：短期語学研修）は、大阪大学における教育研究の高度化、活性化及び組織運営の円滑化に資することを目的として、事務職員を本学との大学間学術交流協定校等へ派遣し、語学研修等を行い、本学における国際化の進展に対応できる人材の養成を図るものです。

■ University College Cork (アイルランド・コーク) 附属語学センターでの短期語学研修

外国語学部事務部庶務係 末竹 一恵

(4月1日から総務企画部総務秘書室プロジェクトマネジメントチーム)

昨年の9月17日から12月21日までの3ヶ月間、University College Cork (アイルランド・コーク) 附属の語学センターで短期語学研修に参加する機会をいただきました。

コークはアイルランド南部に位置し、一応首都のダブリンに次ぐアイルランド第二の都市ですが、人口は12万人、街自体もそう大きくなく、小ぢんまりとした街です。周辺に多くの観光地や遺跡があり、また毎年ジャズ・フェスティバルや国際的な映画祭・音楽祭が開催され、多くの観光客が訪れています。

UCCは1845年に創設されたアイルランドでも最も古い大学の1つです。また4校あるアイルランド国立大学の1つとして、国内トップレベルの教育・研究を行っています。4つのカレッジからなり、正規生だけで2万人近い学生が大学、大学院で学んでいます。私が通った語学センターはUCCに附属する施設で、短期間の集中コースを始め、進学者向けの試験対策コースや、教員向けのトレーニングコースなど幅広い語学教育を行っています。私はここで週20時間の集中コースを1学期13週間受講しました。

センターでは初日のテストをもとにレベル別にクラス分けされ、私は中級クラスでサウジアラビア、スペイン、イタリア、スロバキアからの学生14名と一緒に学びました。授業は午前中の4時間で、テキストを中心に読む・聞く・書く・話すの四要素がバランス良く取り入れられたものでした。テーマは日常的な出来事から政治・経済まで幅広く、日本についての質問に十分に答えることができず、知識不足を感じることも何度かありました。授業中は学生と講師の間で常に会話が絶えず、和気藹々とした雰囲気でした。



コーク大学附属語学センター



地元の柔道クラブの様子 前列左から3番目 末竹職員

最初の内は他の学生、特にサウジアラビアの男子学生の積極性に気後れしてあまり話すことができずにいましたが、徐々に慣れ、後半はだいぶ積極的に発言できるようになりました。週に1回プレゼンテーションの時間があり、私は日本の文字（ひらがな・カタカナ・漢字）について説明したり、折り紙の講習をしたりと、日本文化の紹介を中心に発表しました。休憩時間や放課後のクラスメイトとの交流は、会話の練習になったのはもちろん、多様な文化や習慣、価値観に触れるよい機会になりました。クラスメイトの3分の2がサウジアラビア人だったこともあり、特にサウジアラビアの社会・文化について話を聞く機会が多かったのですが、日本の文化との違いには度々驚かされました。滞在中にイスラム教のイードという祝日があり、その祝日にまつわる習慣を巡って授業中に議論になったこともありました。これまであまり国際交流の経験の無かった私には、まさにカルチャーショックの連続でした。

また地元の柔道クラブの練習に参加したことも、良い思い出になりました。週に2回地元の人達と一緒に練習し、柔道を通じて交流することができました。英語の練習になるからと技の説明をさせてくれたり、練習後にはアパートまで車で送ってくれたり、とても親切にしてもらいました。滞在中に地元紙がクラブの取材に訪れ、私も名前入りで写真を掲載してもらおうという貴重な経験もできました。

今回5歳と1歳の子供を残しての研修でしたので、会う人皆から「寂しいでしょう？」と聞かれましたが、寂しさを感じる間もないほどあっという間の3ヶ月でした。語学学習だけでなく、友人や経験を通じて得た事は多く、非常に有意義な研修となりました。

■ イースト・アングリア大学附属語学学校 (INTO University of East Anglia) での短期語学研修

大学院基礎工学研究科 大学院係 和田 賢一
(4月1日から国際交流オフィス国際交流課国際交流推進係)

平成22年9月27日(月)から12月17日(金)にかけて、イギリスのイースト・アングリア大学附属語学学校 (INTO University of East Anglia) にて短期語学研修を受講しましたのでご報告いたします。

イースト・アングリア大学は、ノーフォーク州の州都ノーリッジという中規模の都市にある大学で、日本人にとっては耳慣れない大学であると思います。しかし、世界的に有名な作家であるカズオ・イシグロ氏の母校ということでイギリスでは人気のある大学です。英語の発祥国で言語を学び、また美しい自然とのんびりとした環境の中で英語を学びたいと思いましたので、この大学で研修を受けることに決めました。

キャンパスはとても広く、湖・広々とした草原・木立といった美しい自然に囲まれている一方で、学生の宿舍群が数多く建ち並び、また郵便局・本屋・設備の充実したスポーツパークもあるなど、環境に恵まれかつ生活上の利便性も兼ね備えていました。

私のクラスはコロンビア・韓国・イタリア・ロシア、そして日本などの国々から約15名の学生が集まっていました。私はリスニングが得意ではないうえに、彼らの話す英語もどこか母国語の音を残していましたので、相手の言うことを理解できないことが非常によくありました。しかしそれも徐々に慣れていき、帰国前にはクラスメイトに大阪弁のレクチャーをするまでになっていました。大阪人であることは、人々と仲良くなるときに強みになるかもしれません。



イースト・アングリア大学の広大なキャンパス



クリスマスパーティーの様子 前列右から2番目 和田職員

授業は、文法、リーディング、IELTS レベルのリスニングの練習、簡単なディスカッションなど、基本的知識から発展的内容まで多岐にわたりました。私はリスニングがあまり得意ではないことを意識しておりましたので、特にその部分に注力するように心がけていました。

イギリスの人々は、非常にフレンドリーで話をすることが好きのように思われます。履いている靴を褒められたり、電車待ちのときに隣のおじさんと身の上話をしたり、道に迷っていると向こうから話しかけてくれるなど、とても優しい人々でした。あまり私は話し上手ではないので、会話をうまく続けることが出来なかったことが残念に思います。

滞在中はエディンバラ、ケンブリッジ、ロンドン、パリなどに出かけ、美術館や大聖堂などさまざまな場所を訪れました。長旅は楽しかったのですが、交通機関の工事・スト・遅延などが非常に多く、計画どおりにいかないことがたびたびありました。滞在中最大のトラブルとしては、年末の欧州の大寒波により帰国の航空便が二度キャンセルになったことです。このときが私の滞在中でもっとも英語を実用的に話す機会になったように思います。今となってはこれもよい経験だと思いますが、イギリスに行くのであれば可能な限り夏季がよいと思います。

私にとって今回の研修は、初めての海外渡航であると同時に、日ごろ学生に関わる業務であることから一学生の視点から大学の仕事というものを見つめなおすよい機会にもなり、非常に有意義な研修となりました。

第19回 「大阪大学・地域団体ボランティア留学生支援連絡協議会」開催

国際教育交流センター主催の「第19回大阪大学・地域団体ボランティア留学生支援連絡協議会」が、2月9日(水)、吹田キャンパスのコンベンションセンターMOホールにおいて開催しました。当日は学外・学内から198名のみなさまにご参加いただきました。はじめに辻毅一郎・副学長・国際交流担当理事より開催の挨拶があり、常日頃地域で留学生を支援していただいているみなさまへのお礼の言葉が述べられました。協議会第1部では大阪大学国際教育交流センター主催「留学生日本語スピーチコンテスト」入賞者による『私の異文化体験』と題したスピーチが行われた。特別賞の尹正彬さん(韓国出身、「韓国と日本の割り勘文



化)」、優秀賞のHorvath Alizさん(ハンガリー出身、「Soと塩ーハンガリーから見る日本ー」)、最優秀賞の趙冬林さん(中国出身、「自然を感謝する気持ち」)の順でスピーチと質疑応答が行われました。第2部では劇作家・演出家の平田オリザコミュニケーションデザイン・センター教授より「対話の時代の国際交流」と題した講演が行われた。亀岡雄国際部長による閉会の挨拶後の懇談会は168名の方々のご参加をいただき、ボランティアや国際交流団体等の中で活発な情報交換や交流が行われました。

(国際教育交流センター)

日本語日本文化教育センター 平成22年度留学生修了式挙行

日本語日本文化教育センターでは、3月16日(水)に本センター多目的ホールにおいて、平成22年度留学生修了式を挙行了しました。

本センターでは、日本の大学の学部進学を目指す日本政府奨学金留学生(国費学部留学生)に対し、学部入学前準備教育として1年間、日本の大学の学部進学に必要な日本語やその他専門科目の教育を行っていますが、この度、国費学部留学生54名が本学準備教育課程を無事修了しました。修了式では、奥西峻介センター長から修了生一人ずつに修了証書が渡された後、辻毅一郎理事・副学長からの式辞、奥西センター長からのお祝いの挨拶に引き続き、文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室の氷見谷室長からの祝辞の代読があり、各留学生の表情には準備教育修了の喜びとこれから4年間の学部教育への期待がひしひしと感じられました。

また、修了生を代表して3名の方々からスピーチがなされた後、在学を代表して日本語・日本文化研修留学生から心温まる送辞をいただき閉式となりました。



辻理事・副学長による式辞

箕面福利会館において開催されたお別れ会では、修了生が、指導教員や地域ボランティアの方々、友人同士で語り合い、記念撮影を行うなど別れを惜しんでいました。

(日本語日本文化教育センター)

平成22年度工学研究科 「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成プログラム・博士前期課程修了式を挙行

経済産業省・文部科学省による平成22年度「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成事業である上記プログラム第二期生修了式が、3月25日(金)に大阪大学理工学図書館3階ホールにおいて挙行されました。

式は、小泉潤二理事・副学長、馬場章夫工学研究科長を始め、留学生所属指導教員並びに来賓として経済産業省近畿経済産業局から国吉浩部長、内海美保課長、菅原慎一郎係長、更に、コンソーシアム企業関係者列席の下、座古勝特任教授(副プロジェクトリーダー)の司会により進められました。最初に、小泉副学長及び馬場工学研究科長から留学生へ修了の祝辞が、また、国吉部長からアジア地域と我が国の産業発展を支える人材として今後の活躍への期待が述べられました。その後、座古特任教授よりプログラム修了認定者の氏名発表があり、修了証書の授与式が執り行われました。本プログラム在校生を代表して、博士前期課程1年生のシワテウィントラ ウィパウィーさんによる送辞



の後、修了留学生10名(中国7名、タイ3名)を代表して、ビジネスエンジニアリング専攻のウドムシースク ウィプーシットさんより文部科学省、経済産業省をはじめプログラム関係各位に対する謝辞と「アジア諸国と日本を支える人材」になるように今後とも精進したいとの決意表明があり、修了式を閉会しました。

(工学研究科・工学部)

東日本大震災への支援活動を実施中です

本学では、東日本大震災復興支援対策会議(議長:鷺田総長)を設置し、本学被災学生への支援をはじめ、関係各所からの要請への迅速な対応や地震で被災された皆様への支援など、本学としてできる限りのあらゆる復興支援を行っています。

3月28日には、国大協からの要請を受け、岩手大学にトイレットペーパー、電池、ストーブ等の支援物資を発送し



学生ボランティアを激励される鷺田総長

ました。物資は各部局からご提供いただいたもので、その整理作業には多くの学生ボランティアにご協力いただきました。吹田地区体育館での作業中、鷺田総長が視察に来られ、学生ボランティアその他関係者に感謝と激励のお言葉を述べられました。

今後とも皆様のご理解、ご協力をお願いします。



支援物資の整理作業の様子

大阪大学公式ホームページ(東日本大震災について)

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/info/earthquake/earthquake>

学生ボランティアの募集について

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2011/03/20110307_5

(復興支援対策会議)

平成23年度 個別学力検査等（一般入試）実施

平成23年度個別学力検査等（一般入試）は、吹田キャンパス及び豊中キャンパスで実施し、各学部等関係者の方々のご協力により、無事終了しました。

志願者数及び志願倍率は、前期日程7,446名（2.9倍）、後期日程6,464名（9.7倍）で両日程合わせると13,910名（昨

年度13,994名）でした。

前期日程試験は、2月25日（金）及び26日（土）に行われ、7,144名が受験し欠席率は全体で4.1%（昨年度7.1%）でした。合格者発表は3月8日（火）に行われ、合格者数は2,725名（昨年度2,739名）でした。

平成23年度 大阪大学入学者選抜試験（前期日程）合格者数等調

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文 学 部	人文学科	125	399	3.2倍	395	136
人間科学部	人間科学科	100	285	2.9倍	283	107
外国語学部	(中国語専攻)	30	107	3.6倍	89	32
	(朝鮮語専攻)	13	48	3.7倍	39	14
	(モンゴル語専攻)	13	52	4.0倍	39	14
	(インドネシア語専攻)	7	23	3.3倍	21	8
	(フィリピン語専攻)	9	37	4.1倍	26	10
	(タイ語専攻)	11	37	3.4倍	33	12
	(ベトナム語専攻)	11	57	5.2倍	33	12
	(ビルマ語専攻)	13	54	4.2倍	37	14
	(ヒンディー語専攻)	13	37	2.8倍	37	14
	(ウルドゥー語専攻)	13	46	3.5倍	40	14
	(アラビア語専攻)	19	58	3.1倍	57	21
	(ペルシア語専攻)	13	53	4.1倍	38	14
	(トルコ語専攻)	13	44	3.4倍	39	14
	(スワヒリ語専攻)	13	33	2.5倍	33	14
	(ロシア語専攻)	19	57	3.0倍	56	21
	(ハンガリー語専攻)	11	31	2.8倍	31	12
	(デンマーク語専攻)	13	40	3.1倍	39	14
	(スウェーデン語専攻)	13	36	2.8倍	36	14
	(ドイツ語専攻)	26	89	3.4倍	74	28
	(英語専攻)	45	150	3.3倍	133	48
	(フランス語専攻)	19	51	2.7倍	49	21
	(イタリア語専攻)	13	36	2.8倍	33	13
	(スペイン語専攻)	26	69	2.7倍	67	27
	(ポルトガル語専攻)	23	67	2.9倍	67	25
	(日本語専攻)	22	58	2.6倍	57	22
	外国語学部 計	421	1,370	3.3倍	1,203	452
法 学 部	法学科	145	417	2.9倍	415	152
	国際公共政策学科	68	162	2.4倍	160	73
	法学部 計	213	579	2.7倍	575	225
経 済 学 部	経済・経営学科	185	735	4.0倍	719	205
理 学 部	数学科	38	102	2.7倍	98	42
	物理学科	58	198	3.4倍	192	64
	化学科	60	179	3.0倍	178	65
	生物科学科 (生物科学コース)	25	100	4.0倍	95	28
	(生命理学コース)	10	31	3.1倍	31	11
	理学部 計	191	610	3.2倍	594	210
医 学 部	医学科	85	268	3.2倍	252	85
	保健学科 看護学専攻	68	137	2.0倍	134	76
	放射線技術科学専攻	35	88	2.5倍	83	39
	検査技術科学専攻	30	60	2.0倍	59	38
	医学部 計	218	553	2.5倍	528	238
歯 学 部	歯学科	48	119	2.5倍	112	48
薬 学 部	薬学科	20	88	4.4倍	81	20
	薬科学科	50	115	2.3倍	113	54
	薬学部 計	70	203	2.9倍	194	74
工 学 部	応用自然科学科	173	467	2.7倍	460	189
	応用理工学科	198	494	2.5倍	487	208
	電子情報工学科	129	250	1.9倍	247	135
	環境・エネルギー工学科	60	142	2.4倍	138	64
	地球総合工学科	94	198	2.1倍	196	100
	工学部 計	654	1,551	2.4倍	1,528	696
基礎工学部	電子物理科学科	74	296	4.0倍	289	76
	化学応用科学科	63	165	2.6倍	158	65
	システム科学科	127	392	3.1倍	383	130
	情報科学科	62	189	3.0倍	183	63
	基礎工学部 計	326	1,042	3.2倍	1,013	334
合 計		2,551	7,446	2.9倍	7,144	2,725

注① 理学部、工学部、基礎工学部は、第1志望学科の志願者数である。

注② 複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

続いて、後期日程試験は、3月12日(土)、13日(日)及び14日(月)に行われました。

また、3月11日(金)に発生した東北地方太平洋沖地震の影響により、3月12日(土)の後期日程試験において遅刻した者には試験開始時刻の繰り下げ措置を行い、受験出来なかった者には3月17日(木)に追試験を実施しました。追

試験を含め3,007名が受験し欠席率は全体で53.5%（昨年度54.9%）でした。合格者発表は追試験受験者を含めて予定どおり3月22日(火)に行われ、合格者数は743名（昨年度751名）でした。

なお、両日程合わせた合格者数は3,468名でした。

平成23年度 大阪大学入学選抜試験（後期日程）合格者数等調

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文 学 部	人文学科	40	371	9.3倍	204	42
人間科学部	人間科学科	30	242	8.1倍	139	31
外国語学部	(中国語専攻)	10	100	10.0倍	42	12
	(朝鮮語専攻)	5	38	7.6倍	22	8
	(モンゴル語専攻)	5	38	7.6倍	22	7
	(インドネシア語専攻)	3	21	7.0倍	7	4
	(フィリピン語専攻)	3	23	7.7倍	16	5
	(タイ語専攻)	4	49	12.3倍	18	5
	(ベトナム語専攻)	4	53	13.3倍	17	5
	(ビルマ語専攻)	5	58	11.6倍	21	7
	(ヒンディー語専攻)	5	51	10.2倍	22	6
	(ウルドゥー語専攻)	5	39	7.8倍	22	6
	(アラビア語専攻)	6	58	9.7倍	19	9
	(ペルシア語専攻)	5	39	7.8倍	24	6
	(トルコ語専攻)	5	38	7.6倍	21	7
	(スワヒリ語専攻)	5	39	7.8倍	17	7
	(ロシア語専攻)	6	44	7.3倍	21	7
	(ハンガリー語専攻)	4	41	10.3倍	17	5
	(デンマーク語専攻)	5	33	6.6倍	18	6
	(スウェーデン語専攻)	5	39	7.8倍	18	7
	(ドイツ語専攻)	9	61	6.8倍	31	11
	(英語専攻)	15	149	9.9倍	50	18
	(フランス語専攻)	6	53	8.8倍	25	9
	(イタリア語専攻)	5	27	5.4倍	15	6
	(スペイン語専攻)	9	51	5.7倍	26	11
	(ポルトガル語専攻)	7	63	9.0倍	35	8
	(日本語専攻)	8	53	6.6倍	34	9
	外国語学部 計	149	1,258	8.4倍	580	191
法 学 部	法学科	25	433	17.3倍	199	26
	国際公共政策学科	12	95	7.9倍	46	13
	法学部 計	37	528	14.3倍	245	39
経 済 学 部	経済・経営学科	35	467	13.3倍	192	38
理 学 部	数学科	9	114	12.7倍	41	10
	物理学科	18	251	13.9倍	119	19
	化学科	17	195	11.5倍	102	20
	生物科学科 (生物科学コース)	—	—	—	—	—
	生物科学科 (生命理学コース)	20	115	5.8倍	68	20
	理学部 計	64	675	10.5倍	330	69
医 学 部	医学科	15	251	16.7倍	31	16
	保健看護学専攻	10	119	11.9倍	48	10
	専門高校卒業生選抜(看護学専攻)	2	0	0.0倍	—	—
	放射線技術科学専攻	5	54	10.8倍	29	5
	検査技術科学専攻	10	56	5.6倍	25	10
	医学部 計	42	480	11.4倍	133	41
歯 学 部	歯学科	5	48	9.6倍	22	8
薬 学 部	薬学科	5	61	12.2倍	32	5
	薬科学科	5	48	9.6倍	19	8
	薬学部 計	10	109	10.9倍	51	13
工 学 部	応用自然科学科	44	476	10.8倍	242	44
	応用理工学科	50	619	12.4倍	311	56
	電子情報工学科	33	354	10.7倍	168	33
	環境・エネルギー工学科	15	127	8.5倍	65	18
	地球総合工学科	24	192	8.0倍	103	24
	工学部 計	166	1,768	10.7倍	889	175
基礎工学部	電子物理科学科	20	103	5.2倍	42	21
	化学応用科学科	17	130	7.6倍	52	19
	システム科学科	34	174	5.1倍	73	37
	情報科学科	17	111	6.5倍	55	19
	基礎工学部 計	88	518	5.9倍	222	96
合 計		666	6,464	9.7倍	3,007	743

注① 理学部、工学部、基礎工学部は、第1志望学科の志願者数である。

注② 複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

注③ 受験者数及び合格者数には、追試験受験者を含めている。

日本語日本文化教育センター 教育講演会開催

日本語日本文化教育センターでは、3月17日(木)に本センター多目的ホールにおいて、FD研修の一環として「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）と日本語教育」と題す



真嶋教授

る教育講演会を開催しました。

「ヨーロッパ言語共通参照枠」とは Common European Framework of Reference for Languages（CEFR）の訳語で、「ヨーロッパで共通の外国語学習の到達度を記述するのに使用するガイドライン」のことです。近年 EU 諸国での CEFR 普及は目覚ましいものがあり、わが国の日本語教育の現場でも、その存在は無視できないものとなっています。同講演会では、本センター学務委員長、加藤均教授の開式挨拶の後、CEFR の日本語適用に造詣の深い真嶋潤子教授（世界言語研究センター）から、その理念・理論並びに使用実態について、ヨーロッパでの最新の状況を踏まえた講演をしていただきました。

会場に 50 名を超える日本語教育関係者が集まり、活発な質疑応答が行われ、講演会は盛況のもとに終了しました。

（日本語日本文化教育センター）

南部陽一郎名誉博士（招へい教授）へ大阪大学特別栄誉教授称号を授与しました

大阪大学は、この度、南部陽一郎博士（シカゴ大学名誉教授、本学招へい教授）に特別栄誉教授の称号を授与することを決定し、3月29日(火)、総長室において授与式を執り行いました。

特別栄誉教授の称号は、学術文化や社会の発展に特に顕著な貢献が認められ、本学の教育研究の発展に対する功績が特に顕著な方に授与されるものです。

平成 20 年にノーベル物理学賞を受賞された南部先生は、平成 5 年以来、外国人研究員として理学研究科・理学部において研究に従事され、平成 8 年に本学第 1 号の名誉博士の学位を授与されています。平成 18 年からは大阪大学招

へい教授として本学に来訪の際には学生、研究員、教員に気軽にご自信の経験や研究に対する姿勢などを語りかけていただき、先生の高い専門性に基づく広い知見と今なお衰えない研究に対する情熱などは本学の学生・教職員への多大なる影響を与え続けておられます。この長年の貢献をたたえ、本学第 1 号の特別栄誉教授の称号を付与するものです。

授与式後には、特別に在学生へのメッセージをお話いただきました。この様子は後日、学内多目的ディスプレイ O+PUS において放映予定ですので、ご期待ください。



（総務企画部人事課）

平成22年度 退職時永年勤続者表彰式挙行

平成22年度退職時永年勤続者表彰式が、3月29日(火)午前11時からコンベンションセンターにおいて、表彰された58名のうち50名の出席のもとに挙行されました。

式は、鷲田清一総長から出席者一人ひとりに表彰状が授与された後、祝辞が述べられ、続いて、出席者を代表して細戸康治附属図書館事務部長が謝辞を述べ閉式しました。

今年度表彰された方は、次のとおりです。

猿 渡 勝 次 (本部)	比 嘉 健 一 (理)	林 悟 (医病)	村 尾 常 夫 (工)
藤 井 勝 博 (本部)	阪 本 吉 輝 (医)	川 越 康 充 (医病)	畑 中 信 (基)
多 田 貞 夫 (本部)	上 村 満 子 (医保)	釣 谷 廣 (医病)	谷 口 康 昭 (基)
奥 田 諭 一 (本部)	田 中 洋 子 (医病)	田 中 忠 美 (医病)	白 杵 一 郎 (基)
津 島 保 (本部)	足 立 康比古 (医病)	田 中 和 男 (医病)	吉 屋 敏 昭 (基)
樽 井 康 員 (本部)	池 永 順 子 (医病)	中 村 和 子 (医病)	高須賀 清 (情)
細 戸 康 治 (図)	柿 添 真由美 (医病)	木 下 明 生 (医病)	大 島 滋 (微)
井 口 雅 芳 (図)	犬 東 政 江 (医病)	羽 田 友 昭 (歯)	大 深 井 誠 (微)
原 田 多 子 (図)	辻 孝 子 (医病)	千 原 容 子 (薬)	馬 場 久美子 (産)
伊 藤 彰 (図)	有 馬 美緒子 (医病)	中 島 誠 二 (工)	東 村 和 幸 (蛋)
南 しをり (法)	竹 下 千 里 (医病)	岩 崎 信 三 (工)	西 山 雅 祥 (リノ)
小 梶 俊 二 (経)	高 石 安 子 (医病)	一 宮 孝 信 (工)	柳 本 和 良 (世)
長 井 純 (経)	矢 野 幸 子 (医病)	宮 本 丈 二 (工)	永 山 啓 一 (核)
市 原 敏 雄 (理)	富 田 裕 子 (医病)	牧 山 博 美 (工)	
坂 本 道 夫 (理)	押 田 真知子 (医病)	北 田 政 恵 (工)	

(総務企画部人事課)

平成22年度 卒業式・大学院学位記授与式挙行

平成22年度卒業式・大学院学位記授与式が、3月25日(金)に大阪城ホールで挙行され、3,507名に学士の学位、2,063名に修士の学位、87名に法務博士(専門職)の学位、482名に博士の学位が授与されました。今年度は、東北沖地震により甚大な被害を被られている方々がおられ、また、我が国全体が直面する危機に対処している最中であることから、予定を一部変更し挙行しました。

開式に先立ち東北地方太平洋沖地震により犠牲となられた方々へ弔意を表すため、黙祷が行われました。



開式後は、受領代表者への学士学位記授与に始まり、次に、楠本長三郎第2代総長の退官を記念して創立された楠本奨学会から各学部・学科の優秀な卒業生に贈られる「楠本賞」が22名に授与され、引き続き、修士、法務博士(専門職)及び博士の学位記が受領代表者に授与されました。



豊島名誉教授

続いて総長からの式辞の後、大阪大学OBの方による「記念講話」として、今年度は、本学名誉教授であり、文化勲章受章者である豊島 久真男先生(昭和29年医学部卒業)を講師にお招きしてご講話をお願いし、「専門性と教養を両立した新しい思考と、若さに溢れた力が世界に向けて強く発信し、日本の存在価値を高めることを期待する。」と激励のお言葉をいただきました。

卒業式・大学院学位記授与式での総長式辞は次ページのとおりです。

(総務企画部総務課)

2010年度卒業式総長式辞

本日ここに集われた3507名の学部卒業生のみなさん、2063名の大学院修了生のみなさん、そして博士の学位を授与された569名のみなさん。この卒業と修了の式にあたり、これまでみなさんが尽くされた努力と研鑽とを、大阪大学を代表して心から讃えたいと思います。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてくれたご家族の方々に対しても、ここに深く敬意を表したく存じます。

みなさんには真っ先にはなむけの言葉を贈らねばならないところですが、今日はなんとしてもこのたびの震災のここから始めないではいられません。



途方もない災害が起ってしまった。

きょう卒業式を迎えられたみなさんのなかには、家族を、あるいは家を失い、不安に押しつぶされそうになっておられる親族、友人、知人がおられ、その人たちのことが片時も頭から離れない方がきつとおられるでしょう。また、ここに集われたみなさんの半数近くは、16年前のあの阪神淡路大震災を身をもって体験しておられるはずです。学部の人なら小学校に入られたころ、大学院の人なら小学校の高学年くらいだったでしょう。そのときの恐怖やその後の苦難をまだ体の記憶として残したまま、今回の震災の報にふれ、あらためて慄然とされたことでしょう。その一人であるわたしも、深夜に電気を消すのが不安で、寝るときはいつも蛍光灯をつけたままにしています。ですから、このたびの地震から2週間経ったいまも、電源を落とした避難所、あるいは孤立した民家で異様なほどに静かな漆黒の夜を迎えておられる人たち、暗闇のなかで「命がけ」の冷却活動にあたっておられる作業員たち、自身も被災しながら夜を徹して救援活動や医療活動にあたっておられる方々、その人たちの心持ちを察すると、いまわたしたちがこうした照明の下でみなさんの卒業と修了とをともに讃えあえることが申し訳なく思えてきます。

被災地のひとたちと、被災の全貌を知ることができずに

遠くから案じるだけのわたしたちのあいだには、どうしようもない隔たりがあります。被災の現場に行って被災者の方々にインタビューする放送記者の人たちと被災者のあいだには、おそらくもっと大きな隔たりがあるかもしれません。それはちょうど、介護施設でスタッフが食事のお世話をしながら「おいしい？」と訊ねることと、ユニットケアの施設でスタッフが入所者の人たちと同じ食べ物をともに口にしながら「おいしいね」と囁きあうこととのあいだの落差のようなものだと思うのです。

別の言い方をするなら、被災地にあっても、被災地から遠く離れていても、いま、「生き残った」という思いに浸されている人は決して少なくないでしょう。「生き延びた」ではなく「生き残った」というこの感覚にはどこか、被災しなかったこと、あるいはそれがごく少なかったことへの申し訳のなさのようなもの、罪悪感のようなものがつきまといまいます。こういう隔たりはだれもすぐには埋められません。すぐには超えられません。

そうしたなかで、いま遠くにいるこのわたしたちのなしうことは限られています。物資や義援金を送ること。移送の道を、避難の道を塞がないこと。買いだめせずに、いつもより消費を控えることでできるだけ多くの物資が被災地に回るよう心がけることなどです。復興には相当な時間がかかるでしょうが、被災者の受け入れから現地での支援活動まで、遠くにいるわたしたちにもできることがいづれ見えてきます。その準備にあたるのが、いまわたしたちにできる精一杯のことです。

こうした〈隔たり〉について、もう少し考えてみようと思います。

いまわたしは、控えめの生活をするのが、被災に遭わずにすんだ者にできる精一杯のことだと言いましたが、逆に、余所では普段どおりの生活をしているということが復興に向けての「希望」になる、あるいは経済的支援になると考える人もいるはずで。被災地でも同様のことはあるでしょう。上空を旋回する報道のヘリコプターの轟音に、救出を求める人の声が聞こえないと憤る人もいれば、「だれかが見守ってくれている」と感じる人もいるでしょう。人の思いというものはこのように、立っている場所ですぐにふん異なります。同じ被災地のなかでも〈隔たり〉はあるのです。

阪神淡路大震災のときに、わたしは当時神戸大学の附属病院に勤務しておられた精神科医の中井久夫先生から一つの言葉を教わりました。copresenceという言葉です。中井先生はこの言葉を「いてくれること」と訳し、他人のcopresenceが被災の現場でいかに重い意味をもつかを説かれました。被災直後、中井先生は地方の医師たちに救援の要請をなさいました。全国から多くの医師が駆けつけたのですが、中井先生はじめ神戸大学のスタッフが患者さんにかかりっきりで、応援団になかなか交替のチャンスが、回ってこない。そのうちあまりに長い待機時間に小さな不満



が上がりはじめたとき、中井先生はその医師たちに集ってもらい、「予備軍がいてくれるからこそ、われわれは余力を残さず、使いきることができる」と語りはじめました。そして、「その場にいてくれる」という、ただそれだけのことが自分たちのチームにとってどれほどポジティブな意味をもつかを訴えられたのです。じっと見守ってくれている人がいるということが、人をいかに勇気づけるかということは、被災の現場だけでなく、たとえば子どもがはじめて幼稚園に行ったときの情景にも見られることです。子どもがはじめて幼稚園に行ったとき、母親から離れてひとり集団のなかへ入ってゆくときの不安は、だれもが一度は経験したはずです。ちらちら母親のほうをふり返り、自分のほうを見るその顔を何度も確認しながら、恐る恐るやがて仲間となるはずの見知らぬ他者たちの輪のなかへ入ってゆく……。人にはこのように、だれかから見守られているということを意識することによってはじめて、底意者から離れ、自分の行動をなしうることがあるのです。そしていま、わたしたちが被災者の方々に対してできることは、この見守りつづけること、心を届けるということです。

さて、みなさんは、大阪大学におけるさまざまな専門の勉学と研究とを今日を一区切りとして終え、これから社会のさまざまな現場に出てゆかれます。そしてそのなかでさらに、何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆかれることでしょう。

けれどもここで心を留めていただきたいのは、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の知識だけではどうにもならないということです。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。一つのアイデアを制度として定着させようとするとき、一つの発見を医療の現場で活かそうとするとき、さらには一人の画家の仕事をまとめ展覧会を開こうとするとき、法律や経理、調達や広報といった別のプロフェッショナルたちとしっかり組まなくてはなりません。

別の領域のプロフェッショナルと同じ一つの課題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見につ

いて、別の専門家（つまりそれについてのまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門についてイメージ豊かに説明することがまずは必要です。彼らにその気にならせないといけないからです。そしてさらにそのためには、異なる分野のプロフェッショナルたちのこだわりをよく理解し、また深く刺激するような訴えかけをしなければなりません。別のプロの、自分とは異なった視線、異なった関心をそれとして理解しようとせず、自分の専門領域の、内輪の符丁で相手を抑え込もうとする人は、そもそも専門家として失格なのです。ここでもあの、〈隔たり〉をしっかりと見つめるということが大切です。同じことは医療スタッフについても言えます。プロとしての自分たちの思いとはうんと隔たったところでものを感じている患者さんやその家族の思いに、十分な想像力をはたらかせられない医療スタッフは、プロとして失格なのです。

みなさんは学業において優秀な成績をおさめられ、社会に出てさまざまな場所でこれまた優れたリーダーたることをめざしておられるかもしれませんが、もちろんそれは間違いではありません。けれども忘れてはならないのは、だれもがリーダーになりたがるような社会はすぐに壊れるということです。一つの事業を成し遂げるには、リーダーとともに、脇役や黒子やコマが要ります。昨今、リーダー論の本が書店には溢れていますが、そしてちょっとひねくれた言い方になるかもしれませんが、そもそもリーダー論に素直に従うような人はリーダーになれないということもあります。リーダーたる人は前例を踏襲せずに、みずから道を開いてゆく人であるはずだからです。

リーダーシップについて論じ、なんとも深い味わいがあるなあと感心した言葉があります。それは、パナソニックの創業者、松下幸之助さんが自社の管理職員の前で話した言葉です。松下幸之助さんは「成功する人が備えていなければならないもの」として、「愛嬌」と「運が強そうなこと」と「後ろ姿」という、意外な三つを挙げました。理由はあえて説明せずに、です。この三つの条件について、わたしはこんなふうに解釈しています。

「愛嬌」のある人にはスキがあります。無鉄砲に突っ走って転んだり、情にほだされていっしょに落ち込んでしまったりする。だからまわりをはらはらさせる。わたしがしっかり見守っていないと、という思いにさせるわけです。

次に、「運が強そうな」ひとのそばにいと、何でもうまくいきそうな気になるものです。その澁刺とした晴れやかな空気に乗せられて、一丁こんなこともやってみるかと思案的なことにも挑戦できます。

次に、だれかの「後ろ姿」が眼に焼きつくときには、見ているほうの心に静かな波紋が起ります。寡黙な言葉の背後に秘められたある思いに想像力が膨らむのです。あの人は何をやろうとしているのか、何にこだわっているのか、ついそのことを考えてしまいます。



そう、見る人を受け身ではなく、能動的にするのです。無防備なところ、緩んだところ、それに余韻があって、それが他人の関心を引き寄せてしまうからです。

軸がぶれない、統率力がある、聴く耳をもっているなどといった心得も、たしかに大事でしょう。が、この隙間、この緩み、この翳りこそ、人の関心を誘いだすものなのです。組織とは言うまでもなく人の集団です。そして、一人一人が受け身で指示を待つのではなく、それぞれにそれぞれの能力を全開して動くそのときに、組織はもっとも活力と緊張感に溢れます。上司の命を待つのではなく、一人一人が自分の頭で考え、へこたれずに行動できる組織がいちばん活力があるのです。getting things done by others. そういう意味では、リーダーがいなくていい組織を作れるのが真のリーダーだと言えるかもしれません。

みなさんに卒業後求められるのは、専門家としての技を磨くことであるとともに、「成熟した市民」「賢い市民」になることです。市民社会、その公共的な生活においては、リーダーは固定していません。市民それぞれが社会のそれぞれの持ち場で全力投球しているのですから、だれもいつもリーダー役を引き受けられるとはかぎりません。だとすれば、それぞれが日頃の本務を果たしつつ、public affairsについては、あるときは「いま仕事が手を抜けへんで代わりにちょっと頼むわ」、あるときは「本業のこと、ほんとは心配なんやろ、しばらくはおれがやとくわ」というふうに、それぞれが前面に出たり背後に退いたりしながら、しかしいつも全体に目配りしている……そういうメンバーからなる集団こそ、真に強い集団だということになるでしょう。いいかえると、日々それぞれの持ち場でおのれの務めを果たしながら、公共的な課題が持ち上がれば、だれもがときにリーダーに推され、ときにメンバーの一員、そうワン・オブ・ゼムになって行動する、そういう主役交代のすぐにできる、しなりのある集団です。その意味では、リーダーシップとおなじくらい、優れたフォロワーシップというものが重要になってきます。自分たちが選んだリーダーの指示に従うが、みずからもつねに全体を見やりながら、リーダーが見逃していること、見落としていることがない

かというふうにリーダーをケアしつつ付き従ってゆく、そういうフォロワーシップです。

良きフォロワー、リーダーを真にケアできる人物であるためには、フォロワー自身のまなざしが確かな「価値の遠近法」を備えていなければなりません。「価値の遠近法」とは、どんな状況にあっても、次の四つ、つまり絶対なくしてはならないもの、見失ってはならぬものと、あってもいいけどなくてもいいものと、端的になくていいものと、絶対にあってはならないものを見分けられる眼力のことです。映画監督の河瀬直美さんの言葉を借りていいかえると、「忘れていいことと、忘れたらあかんことと、それから忘れなあかんこと」とをきちんと仕分けることのできる判断力のことです。こういう力を人はこれまで「教養」と呼んできました。

昨年亡くなられた文化人類学者の梅棹忠夫さんは、亡くなられる直前のインタビューにおいて、いつも全体を気遣いながら、自分にできるところで責任を担う、そういう教養のあるフォロワーシップについて語っておられました。そしてその話をこんな言葉で結ばれました。——「請われれば一差し舞える人物になれ」。

もしリーダーに推されたとき、いつでも「一差し舞える」よう、日頃からきちんと用意をしておけ、というのです。わたしはみなさんに、将来、周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあの人がいたらなあ」と言ってもらえる人になっていただきたいと心から願っています。そう、真に教養のあるプロになっていただきたいのです。そのために大学に求むるものがあれば、いつでも大学に戻ってきてください。大阪大学はそうした学びの場をいつでも開いておきます。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。

3 / 25 挙行卒業式・大学院学位記授与式学士学位記受領代表者

学部名	学科名	氏 名
文 学 部	人 文 学 科	菊 田 祐 衣
人間科学部	人間科学科	山 田 愛 子
外国語学部	地域文化学科	村 上 絢 美
法 学 部	法 学 科	藤 原 美由季
経 済 学 部	経済・経営学科	小 西 邦 彦
理 学 部	化 学 科	磯 貝 和 生
医 学 部	医 学 科	富 永 佑 児
歯 学 部	歯 学 科	早 坂 優
薬 学 部	薬 学 科	眞 下 雅 貴
工 学 部	環境・エネルギー工学科	三 宅 佐 和
基礎工学部	電子物理科学科	岡 本 祥 吾

3 / 25 挙行卒業式・大学院学位記授与式 修士学位記受領代表者

研究科名	専攻名	氏 名
文学研究科	文化表現論専攻	金 岡 直 子
人間科学研究科	人間科学専攻	DYLAN SOUTHARD
法学研究科	博士前期課程法学・政治学専攻	浅 羽 明 子
経済学研究科	経済学専攻	舩 田 武 仁
理学研究科	高分子科学専攻	吉 田 章 吾
医学系研究科	医学科専攻	宮 城 妙 子
薬学研究科	応用医療薬科学専攻	畑 山 英
工学研究科	地球総合工学専攻	梶 木 仁 美
基礎工学研究科	機能創成専攻	鶴 田 真 裕
言語文化研究科	言語文化専攻	前 田 正 利
言語社会研究科	国際言語社会専攻	香 月 裕 介
国際公共政策研究科	国際公共政策専攻	越 智 萌
情報科学研究科	情報数理学専攻	福 嶋 悠 大
生命機能研究科	生命機能専攻	藤 田 宏 明

法務博士（専門職）学位記受領代表者

研究科名	氏 名
高等司法研究科	渡 部 孝 彦

3 / 25 挙行卒業式・大学院学位記授与式 博士学位記受領代表者

研究科名	専攻名	氏 名
文学研究科	文化形態論専攻	中久保 辰 夫
人間科学研究科	人間科学専攻	良 原 誠 崇
法学研究科	学位記授与対象者なし	
経済学研究科	経済学専攻	森 田 忠 士
理学研究科	数 学 専 攻	筒 井 容 平
医学系研究科	保健学専攻	秋 山 明 子
歯学研究科	統合機能口腔科学専攻	Md. Tahsinul Haque
薬学研究科	応用医療薬科学専攻	池 田 和 哉
工学研究科	ビジネスエンジニアリング専攻	平 山 悠 介
基礎工学研究科	物質創成専攻	中 西 章 尊
言語文化研究科	言語社会専攻	コーサティアンウォンサーヤン
言語社会研究科	言語社会専攻	福 原 香 織
国際公共政策研究科	比較公共政策専攻	奥 山 尚 子
情報科学研究科	バイオ情報工学専攻	堀之内 貴 明
生命機能研究科	生命機能専攻	河 野 省 悟

楠 本 賞 受 賞 者

部局名	学科名	氏 名
文 学 部	人 文 学 科	宮 希 望
人間科学部	人間科学科	勝 野 吏 子
外国語学部	国際文化学科	廣 谷 真 実
	地域文化学科	奥 野 真 美 子
法 学 部	法 学 科	川 上 明 季
経 済 学 部	経済・経営学科	伊 藤 沙 織
理 学 部	数 学 科	浮 田 卓 也
	物 理 学 科	日 野 祐 子
	化 学 科	磯 貝 和 生
	生物科学科	飯 尾 洋 太
医 学 部	医 学 科	大 平 亮 介
	保 健 学 科	山 本 瀬 奈
歯 学 部	歯 学 科	住 岡 龍 一
薬 学 部	薬 学 科	植 野 志 穂
工 学 部	応用自然科学科	氷見山 幹 基
	応用理工学科	北 卓 人
	電子情報工学科	PENG HAN YEE
	環境・エネルギー工学科	山 田 佳 祐
	地球総合工学科	阪 本 浩 章
基礎工学部	電子物理科学科	岡 本 祥 吾
	化学応用科学科	藤 田 昌 志
	システム科学科	櫻 井 優 太
	情報科学科	藤 田 敦

Money and Capital: We're Not in Kansas Anymore

大学院国際公共政策研究科教授 高 阪 章

私の米国留学の契機となった McKinnon, *Money and Capital* (1973) は、タイトルが当時の必読書 *Value and Capital* (1946) のパロディであるだけではなく、貯蓄動員（余剰購買力を資本形成につなぐ）という、貨幣（金融）の経済成長を促進する機能に注目した挑戦的な論考である。それまで貨幣は、物価に影響するが、実物経済には影響を与えないと考えられていたからだ。その後、金融市場のグローバル化とともに銀行危機が頻発するのに伴い、貯蓄動員に代わって金融のリスク管理機能が注目されることとなった。なかでも、銀行に代わる「証券化」はリスク投資を拡大することで成長を促進するものと考えられた。だが、世界金融危機はリスク投資が暴走して起こった。

19世紀末米国を舞台にしたミュージカル『オズの魔法使い』では、カンサスの少女ドロシーが竜巻で見知らぬ土地に運ばれて “We're not in Kansas Anymore!” と知り、帰りを求めてオズの魔法使いを訪ねる。背景には金本位制下のドル高に抵抗するカンサス等農業州と支持派の工業州間の対立があった。オズは金の象徴であり（オンス Oz は金の計量単位）、結果は、金本位制が資本取引を活発化し、米国は輸出工業化に成功した。同じように、金融のリスク管理機能に問題はあっても、資本移動の拡大が新たなリスク投資機会をもたらした以上、われわれももう元の世界（カンサス）には戻れないのである。



こうさか・あきら

プロフィール

略歴：専門分野は国際経済学・経済発展論・アジア太平洋経済。1972年京都大学経済学部卒業、同大学院経済学研究科を経て、1984年スタンフォード大学大学院修了（Ph.D.（経済学））。1975年アジア経済研究所研究員、1988年京都大学東南アジア研究センター・助教授、1994年大阪大学大学院国際公共政策研究科・教授、2011年より関西学院大学国際学部教授。そのほか、1992年よりCoordinator, Pacific Economic Outlook (PEO) / Structure Project、1994年よりSteering Committee member, Pacific Trade and Development Conference (PAFTAD)、1995～96年経済審議会特別委員、2001～06年Editor, *Asian Economic Journal*、2001年よりVice President, East Asian Economic Association、2002～04年大学評価委員会専門委員（大学評価・学位授与機構）、2003～07年独法評価委員会臨時委員（経産省）、2004～07年大阪大学大学院国際公共政策研究科・科長、2005～09年独法評価委員会臨時委員（財務省）、2008～09年科学研究費委員会専門委員（日本学術振興会）、など。最近の著作：ed., *External Adjustments under Economic Integration in the Pacific Region*, Japan Committee for Pacific Economic Outlook, Osaka, Japan, May 2009. “Global Shocks and the Japanese Economy: Structural Changes in the 1990s,” OSIPP Discussion Paper: DP-2009-E-008, Osaka University, December, 2009. “Financial Linkages and Business Cycles of Japan: An Analysis Using Financial Conditions Index,” OSIPP Discussion Paper: DP-2010-E-008, October 14, 2010.

光と緩和と揺らぎ

大学院生命機能研究科教授 木 下 修 一

物理学科助手として大阪大学に赴任してきてから、光を使って気の向くまま研究を行ってきた。生きた細胞を調べたこともあるし、気体、半導体、液体、色素分子、非平衡現象、さらには、昆虫の色など、取りとめもなく実験してきた。しかし、振り返ってみると自分の心の中では常に、物理的な実体とは何かという問題を問い続けてきたような気がする。

光が原子に当たると、光の電場により分極が生じ、振動する分極からは光が発生する。このスキームで光の散乱はうまく説明される。しかしすぐに、光はいつ吸収されるのかという問題に突き当たる。光が吸収されて励起状態にいくためには、光との相互作用を断ち切る必要がある。その役割を果たすものが、熱浴と相互作用することで起きる緩和である。しかし、その熱浴を量子的な準位の集まりと考えると困ったことが起きる。原子が熱浴と接触すると、分極が持つ振動のコヒーレンスは、緩和しても熱浴の個々の準位に保たれたままになるからである。このことをストークス・反ストークス散乱の強度比から確かめた。もし保たれているのであれば、強度比はボルツマン因子に等しくなるが、そうでなければずれが見られるはずである。実験してみると、マクロな揺らぎを与える系についてずれが見られたのである。つまり、量子的なコヒーレンスがマクロな系では保たれないことを意味している。通常、コヒーレンスは観測の際に壊されると考えられているが、マクロな系ではそれ自身コヒーレンスを壊す仕組みがあり、それが物理的な実体を与えているのではないだろうか。赴任して33年半、私にこのような大きな問題を考える機会と場所を与えてくれた大阪大学に深く感謝したい。



きのした・しゅういち

プロフィール

略歴：昭和47年3月東京大学理学部化学科卒。昭和52年3月博士課程修了。理学博士（東京大学）。同10月大阪大学理学部物理学科助手、その後、平成元年12月北海道大学応用電子研究所助教授を経て、平成5年4月大阪大学理学部助教授、平成7年6月理学研究科教授、平成14年大学院生命機能研究科教授、平成23年3月退職。専門はレーザー分光、光物理学、非平衡物理学。

堀江真行さん「第1回(平成22年度)日本学術振興会育志賞」受賞

医学系研究科予防環境医学専攻博士課程4年(受賞時)の堀江真行さんが、第1回(平成22年度)日本学術振興会育志賞を受賞しました。この賞は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、陛下から御下賜金を賜り創設された賞です。大学院博士後期課程の学生を対象に人社系、理工系、生物系の各領域から合計17名に授与され、堀江さんは【生物系】領域で受賞しました。受賞対象となった研究課題は「哺乳動物ゲノムに内在する非レトロウイルス型RNAウイルスエレメント」です。

今回の受賞について堀江さんは「日本学術振興会育志賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。式典では、天皇皇后両陛下から直接励ましのお言葉をいただき、今後の大きな励みになりました。指導教員である生田先生、朝長先生や研究室の皆様には感謝の気持ちで一杯です」と



堀江真行さん(左)日本学士院での授賞式にて
の言葉を寄せています。

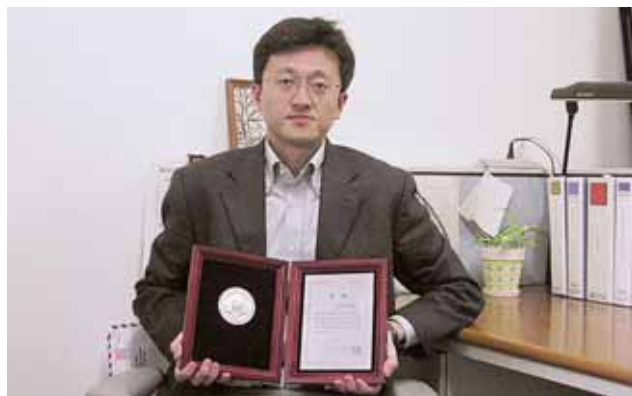
なお、授賞式は天皇皇后両陛下ご臨席のもと、2月1日(火)東京・上野の日本学士院において執り行われました。

(研究推進部研究推進課)

木村剛教授、渡部平司教授「第7回(平成22年度)日本学術振興会賞」受賞 渡部平司教授「第7回(平成22年度)日本学士院学術奨励賞」受賞

基礎工学研究科の木村剛教授と工学研究科の渡部平司教授が、第7回(平成22年度)日本学術振興会賞を受賞しました。この賞は人文・社会科学及び自然科学の全分野において、45歳未満で博士又は博士と同等以上の学術研究能力を有する者のうち、論文等の研究業績により学術上特に優れた成果をあげている研究者に対して、今年度は25名に授与されました。

木村教授の受賞対象となった研究課題は「電気磁気効果に関連する物質および現象の研究」です。低電力消費・高密度記録など次世代に向けた新規電子デバイス原理の構築へとつながる基礎技術学理の創成を目指し、未来型材料の



基礎工学研究科 木村剛教授



工学研究科 渡部平司教授

創製につながるものが評価されました。

渡部教授の受賞対象となった研究課題は「半導体表面・界面科学を基軸とした次世代エレクトロニクスの創成」です。超薄絶縁膜形成に於ける独自技術を開発し、その優位性をデバイスレベルで実証しており、半導体技術に多大な貢献を果たしていることが評価されました。

また、渡部教授は日本学術振興会賞受賞者の中から6名選ばれる、第7回(平成22年度)日本学士院学術奨励賞も受賞しました。大阪大学からは初の受賞となります。

(研究推進部研究推進課)

新部長紹介

米 田 悦 啓 (よねだ よしひろ)

大学院医学系研究科長・医学部長



【略歴】

- 昭56. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 60. 3 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
- 60. 3 医学博士 (大阪大学)
- 60. 4 大阪大学細胞工学センター研究生
- 61. 1 大阪大学助手細胞工学センター
- 平 3. 9 大阪大学助教授細胞工学センター
- 4. 4 大阪大学助教授医学部
- 4. 4 大阪大学助教授細胞生体工学センター
- 4.12 大阪大学教授細胞生体工学センター
- 5. 2 大阪大学教授医学部
- 11. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 14. 4 大阪大学教授大学院生命機能研究科
- 17. 4 大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター長 (平19.3まで)
- 20. 4 大阪大学研究・産学連携室員 (平23.3まで)
- 23. 4 大阪大学大学院医学系研究科長・医学部長 (平25.3まで)

脇 坂 聡 (わきさか さとし)

大学院歯学研究科長・歯学部長



【略歴】

- 昭57. 3 大阪大学歯学部歯学科卒業
- 57. 4 大阪大学助手歯学部
- 62. 6 歯学博士 (大阪大学)
- 平 2. 4 大阪大学助教授歯学部
- 12. 4 大阪大学助教授大学院歯学研究科
- 14. 3 大阪大学教授大学院歯学研究科
- 19. 4 大阪大学大学院歯学研究科副研究科長 (平22.3まで)
- 22. 4 大阪大学教育研究評議員 (平23.3まで)
- 23. 4 大阪大学大学院歯学研究科長・歯学部長 (平25.3まで)

星 野 俊 也 (ほしの としや)

大学院国際公共政策研究科長



【略歴】

- 昭59. 3 上智大学外国語学部英語学科卒業
- 61. 3 東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了
- 63. 4 外務省在アメリカ合衆国日本国大使館専門調査員
- 平 3. 5 財団法人日本国際問題研究所研究員
- 4. 3 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学
- 7. 4 財団法人日本国際問題研究所主任研究員
- 10. 4 大阪大学助教授大学院国際公共政策研究科
- 15. 3 博士 (国際公共政策) (大阪大学)
- 15. 7 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科
- 18. 8 国際連合日本政府代表部公使参事官
- 18. 9 国際連合総会日本政府代表顧問
- 20. 8 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科
- 22. 4 大阪大学研究・産学連携室員 (平23.3まで)

新部長紹介

掛 下 知 行 (かけした ともゆき)

低温センター長



【略歴】

- 昭51. 3 北海道大学理学部物理学科卒業
- 53. 3 北海道大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
- 54. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科物理系博士後期課程退学
- 54. 4 大阪大学産業科学研究所技官
- 58. 4 大阪大学助手産業科学研究所
- 62.12 理学博士 (大阪大学)
- 平 5. 7 大阪大学助教授工学部
- 7.10 核融合科学研究所助教授大型ヘリカル研究部装置技術研究系併任 (平9.3まで)
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 12. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 13. 4 大阪大学工学部材料物性工学科長 (平14.3まで)
- 20. 4 大阪大学大学院工学研究科附属構造・機能先進材料デザイン教育研究センター長 (平24.3まで)
- 22. 4 大阪大学教育研究評議員 (平24.3まで)
- 23. 4 大阪大学大学院工学研究科附属高度人材育成センター長 (平25.3まで)
- 23. 4 大阪大学低温センター長 (平25.3まで)

仁 平 卓 也 (にひら たくや)

生物工学国際交流センター長



【略歴】

- 昭50. 3 京都大学工学部工業化学科卒業
- 52. 3 京都大学大学院工学研究科工業化学専攻修士課程修了
- 55. 3 京都大学大学院工学研究科工業化学専攻博士後期課程修了
- 55. 3 工学博士 (京都大学)
- 55. 4 京都大学工学部研究生
- 56.10 大阪大学助手工学部
- 57. 6 大阪大学助手工学部附属微生物工学国際交流センター
- 60. 4 大阪大学助手工学部附属生物工学国際交流センター
- 62.12 大阪大学助手工学部
- 平 2. 4 大阪大学助教授工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 14. 6 大阪大学教授生物工学国際交流センター
- 23. 4 大阪大学生物工学国際交流センター長 (平25.3まで)

三 成 賢 次 (みつなり けんじ)

コミュニケーションデザイン・センター長



【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学法学部法学科卒業
- 57. 3 大阪大学大学院法学研究科前期課程修了
- 60. 3 大阪大学大学院法学研究科後期課程単位修得退学
- 60. 4 大阪大学助手法学部
- 62. 4 大阪大学助教授法学部
- 平 9. 7 大阪大学教授法学部
- 11. 1 博士 (法学) の学位授与 (大阪大学)
- 11. 4 大阪大学教授大学院法学研究科
- 14. 4 大阪大学評議員 (平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学大学院法学研究科長・法学部長 (平20.3まで)
- 19. 8 大阪大学総長補佐 (平21.8まで)
- 20. 4 大阪大学総合計画室員
- 20. 5 大阪大学教授大学院法学研究科附属法政実務連携センター
- 23. 4 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長 (平25.3まで)

新施設長紹介

菊池 章 (きくち あきら)

医学系研究科附属共同研究実習センター長



【略歴】

- 昭57. 3 神戸大学医学部卒業
- 57. 4 神戸大学医学部(内科学第三講座)において研究に従事
- 57. 7 医員(研修医)(神戸大学医学部附属病院)
- 58. 7 住友病院医員(研修医)(昭59.3まで)
- 63. 3 神戸大学大学院医学研究科博士課程修了
- 63. 4 神戸大学助手医学部
- 平成元. 2 医学博士(神戸大学)
- 4. 6 神戸大学講師医学部
- 4. 7 米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部客員研究員
- 6.12 広島大学教授医学部
- 14. 4 広島大学教授大学院医歯薬学総合研究科
- 20. 4 広島大学大学院医歯薬学総合研究科副研究科長
- 21.12 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 23. 4 大阪大学医学系研究科附属共同研究実習センター長(平25.3まで)

荒木 秀 樹 (あらき ひでき)

大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター長



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学工学部金属材料工学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院工学研究科金属材料工学専攻前期課程修了
- 62. 4 住友電気工業(株)入社
- 63. 6 大阪大学助手工学部
- 平 6. 3 博士(工学)(大阪大学)
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 11. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 15. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター
- 20. 5 大阪大学教授大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター
- 23. 4 大阪大学大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター長(平25.3まで)

掛下 知行 (かけした ともゆき)

大学院工学研究科附属高度人材育成センター長



【略歴】

- 昭51. 3 北海道大学理学部物理学学科卒業
- 53. 3 北海道大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
- 54. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科物理系博士後期課程退学
- 54. 4 大阪大学産業科学研究所技官
- 58. 4 大阪大学助手産業科学研究所
- 62.12 理学博士(大阪大学)
- 平 5. 7 大阪大学助教授工学部
- 7.10 核融合科学研究所助教授大型ヘリカル研究部装置技術研究系併任(平9.3まで)
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 12. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 13. 4 大阪大学工学部材料物性工学科長(平14.3まで)
- 20. 4 大阪大学大学院工学研究科附属構造・機能先進材料デザイン教育研究センター長(平24.3まで)
- 22. 4 大阪大学教育研究評議員(平24.3まで)
- 23. 4 大阪大学低温センター長(平25.3まで)
- 23. 4 大阪大学大学院工学研究科附属高度人材育成センター長(平25.3まで)

新教授紹介

福井 康太 (ふくい こうた)

大学院法学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 九州大学大学法学部卒業
- 7. 3 九州大学大学院法学研究科基礎法学専攻修士課程修了
- 10. 3 九州大学大学院法学研究科基礎法学専攻博士後期課程修了
- 7. 4 日本学術振興会 特別研究員 (平10.3まで)
- 10. 4 山形大学講師人文学部
- 11. 9 山形大学助教授人文学部
- 15. 4 大阪大学助教授大学院法学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院法学研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院法学研究科

所 属：大学院法学研究科
専門分野：法社会学・法政策学

竹 原 徹 郎 (たけはら てつお)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 59. 4 大阪大学医学部内科学第一教室において研究に従事
- 59. 6 大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
- 59. 7 医員 (研修医) (大阪大学医学部附属病院)
- 60. 7 大阪大学医学部研究生 (内科学第一教室) (平3.4まで)
- 60. 7 大阪警察病院内科医員
- 61. 4 関西労災病院臨床研修医
- 61. 9 大阪厚生年金病院内科医員 (昭63.6まで)
- 平 3. 5 医員 (大阪大学医学部附属病院)
- 5.12 医学博士 (大阪大学)
- 9. 5 大阪大学医学部研究生 (内科学第一教室) (平10.4まで)
- 10. 5 米国マサチューセッツ総合病院消化器内科研究員
- 12.10 大阪大学医学部研究生 (平13.3まで)
- 13. 4 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院医学系研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科内科学講座 (消化器内科学)
専門分野：消化器病学

熊ノ郷 淳 (くまのこう あつし)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 平 3. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 3. 4 大阪大学医学部附属病院において診療補助に従事
- 3. 7 医員 (研修医) (大阪大学医学部附属病院) (第3内科)
- 4. 7 大阪通信病院 (現NTT西日本病院) 第2内科研修医 (平5.3まで)
- 9. 3 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 9. 3 医学博士 (大阪大学)
- 9. 4 大阪大学微生物病研究所研究生 (平9.7まで)
- 9. 8 大阪大学助手微生物病研究所
- 15.12 大阪大学助教授微生物病研究所
- 18. 6 大阪大学教授微生物病研究所
- 19.10 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授 (学内派遣) (微生物病研究所兼任)
- 23. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科内科学講座 (呼吸器・免疫アレルギー内科学)
免疫学フロンティア研究センター (感染病態)
専門分野：免疫学、内科学

新教授紹介

竹 内 栄 一 (たけうち えいいち)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科マテリアル生産科学
専攻材料エネルギー理工学講座
専門分野：移動速度論

【略歴】

- 昭50. 3 九州大学工学部鉄鋼冶金学科卒業
- 52. 3 九州大学大学院工学研究科鉄鋼冶金学専攻修士課程修了
- 52. 4 新日本製鐵(株)入社
- 57. 9 プリティッシュコロンビア大学大学院冶金工学専攻修士課程入学
- 59.11 プリティッシュコロンビア大学大学院冶金工学専攻博士課程修了
- 59.11 Ph.D (冶金工学) (プリティッシュコロンビア大学)
- 59.11 新日本製鐵(株)中央研究本部第3技術研究所製鋼研究センター研究員
- 平 2.11 新日本製鐵(株)中央研究本部第3技術研究所製鋼研究センター主任研究員
- 3. 6 新日本製鐵(株)技術開発本部プロセス技術研究所製鋼研究センター主任研究員
- 7. 4 新日本製鐵(株)技術開発本部プロセス技術研究所製鋼研究センター主幹研究員
- 12. 4 新日本製鐵(株)技術開発本部広畑技術研究部部长
- 19. 1 新日本製鐵(株)技術開発本部環境・プロセス研究開発センター研究審議役
- 20. 7 新日本製鐵(株)技術開発本部環境・プロセス研究開発センター部長
- 23. 4 大阪大学教授大学院工学研究科

大 津 智 彦 (おおつ のりひこ)

大学院言語文化研究科



所 属：大学院言語文化研究科言語社会専攻地
域言語社会講座
専門分野：英語史

【略歴】

- 昭58. 3 大阪外国語大学外国語学部英語学科卒業
- 58. 4 藤沢薬品工業(株)海外事業部(～62.3)
- 62. 4 大阪外国語大学大学院外国語学研究科英語学専攻修士課程入学
- 平成元. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科英語学専攻修士課程修了
- 元. 4 大阪外国語大学助手外国語学部
- 6. 1 大阪外国語大学講師外国語学部
- 9. 1 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 19. 4 大阪外国語大学准教授外国語学部
- 19.10 大阪大学准教授大学院言語文化研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院言語文化研究科

藤 本 利 一 (ふじもと としかず)

大学院高等司法研究科



所 属：大学院高等司法研究科
専門分野：民事手続法

【略歴】

- 平 2. 3 大阪大学法学部法学科卒業
- 4. 3 大阪大学大学院法学研究科民事法学専攻博士前期課程修了
- 7. 3 大阪大学大学院法学研究科民事法学専攻博士後期課程単位取得退学
- 7. 4 和歌山大学講師経済学部
- 9. 4 和歌山大学助教授経済学部
- 10. 5 法学博士(大阪大学)
- 12. 4 立命館大学助教授法学部(平15.9まで)
- 16. 4 大阪大学助教授大学院高等司法研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院高等司法研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院高等司法研究科

新教授紹介

石 田 剛 (いしだ たけし)

大学院高等司法研究科



【略歴】

- 平 2. 3 京都大学法学部卒業
- 4. 3 京都大学大学院法学研究科民刑事法専攻博士前期課程修了
- 7. 3 京都大学大学院法学研究科民刑事法専攻博士後期課程研究指導認定退学
- 7. 4 京都大学助手大学院法学研究科
- 8. 4 立教大学専任講師法学部
- 10. 4 立教大学助教授法学部 (平18.3まで)
- 14. 4 ミュンヘン大学Leopold-Wenger 法史学研究所客員研究員 (平16.3まで)
- 18. 4 立教大学教授法学部
- 19.10 同志社大学准教授大学院司法研究科
- 20. 4 同志社大学教授大学院司法研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院高等司法研究科

所 属：大学院高等司法研究科
専門分野：民法学

近 藤 久美子 (こんどう くみこ)

世界言語研究センター



【略歴】

- 昭59. 3 大阪外国語大学外国語学部アラビア語学科卒業
- 63. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了
- 平 6.10 大阪外国語大学講師 外国語学部
- 10. 2 大阪外国語大学助教授 外国語学部
- 19.10 大阪大学准教授 世界言語研究センター

所 属：世界言語研究センター・中東・アフリカ言語文化圏研究部門
専門分野：アラビア語、アラブ文学

田 邊 欧 (たなべ うた)

世界言語研究センター



【略歴】

- 昭63. 3 大阪外国語大学 外国語学部 デンマーク語・スウェーデン語科卒業
- 平 3. 3 デンマーク・コペンハーゲン大学北欧語学科・第2課程修了
- 4. 4 大阪外国語大学講師 外国語学部
- 7. 1 大阪外国語大学助教授 外国語学部
- 19. 4 大阪外国語大学准教授 外国語学部
- 19.10 大阪大学准教授 世界言語研究センター
- 23. 4 大阪大学教授 世界言語研究センター

所 属：世界言語研究センター・ヨーロッパ・アメリカ言語文化圏研究部門Ⅰ
専門分野：近・現代北欧文学

新教授紹介

堀 川 智 也 (ほりかわ ともや)

世界言語研究センター



【略歴】

- 昭62. 3 東京大学教養学部教養学科(科学史・科学哲学分科)卒業
- 平元. 3 東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了
- 元. 9 東京大学大学院人文科学研究科博士課程言語学専攻中退
- 元10 北海道大学講師 言語文化部(日本語系)
- 4. 6 北海道大学助教授 言語文化部(日本語系)
- 6. 4 大阪外国語大学助教授 外国語学部国際文化学科
- 19.10 大阪大学准教授 世界言語研究センター
- 23. 4 大阪大学教授 世界言語研究センター

所 属：世界言語研究センター
専門分野：日本語学

青 井 考 (あおい のり)

核物理研究センター



【略歴】

- 平 4. 3 東京大学理学部物理学学科卒業
- 6. 3 東京大学大学院理学系研究科修士課程物理学専攻修了
- 8. 4 日本学術振興会特別研究員(DC)
- 10. 3 東京大学大学院理学系研究科博士課程物理学専攻修了
- 10. 3 理学博士(東京大学)
- 10. 4 日本学術振興会特別研究員(PD)
- 10.10 東京大学助手理学研究科
- 15. 1 理化学研究所研究員
- 18. 4 理化学研究所先任研究員
- 23. 4 大阪大学教授核物理研究センター

所 属：核物理研究センター核物理実験研究部
門
専門分野：原子核

石 川 真由美 (いしかわ まゆみ)

大阪大学国際企画推進本部



【略歴】

- 昭59. 3 神戸大学教育学部 卒業
- 62. 3 在マレーシア日本国大使館専門調査員
- 平 3. 3 国際連合児童基金(UNICEF) ニューヨーク本部
Assistant Public Affairs Officer
- 9. 3 東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程社会人類学
専攻 退学
- 13. 8 UNICEF駐日事務所コンサルタント/プロジェクト・オフィサー
- 15. 8 大阪大学講師人間科学研究科
- 17.10 大阪大学特任助教授国際企画室
- 20. 4 大阪大学准教授国際企画推進本部
- 23. 4 大阪大学教授国際企画推進本部

所 属：大阪大学国際企画推進本部
専門分野：社会人類学

重永凱男名誉教授(歯学研究科)逝去



本学名誉教授重永凱男先生は、平成22年12月17日(金)に、急性心不全のためご逝去されました。享年71歳でした。永年のご功績に対し、正四位・瑞寶中綬章に叙せられました。

先生は、昭和41年に大阪大学歯学部をご卒業後、昭和45年に大学院歯学研究科(歯科薬物学講座)を修了され、歯学博士の学位を授与されました。同年に大阪大学歯学部(口腔解剖学第二講座)助手に採用され、昭和49年に助教授に昇任された後、昭和57年から広島大学歯学部(口腔解剖学第一講座)教授に就任されました。平成2年に、歯学部教授として大阪大学に戻られ、12年間にわたって口腔解剖学第二講座を主宰されました。平成14年3月に定年にて退職され、大阪大学名誉教授の称号を授与されました。その後、平成14年9月から17年8月まで、韓国国立

慶北大学歯学部(解剖学教室)教授に就任されました。帰国後の19年4月から、森ノ宮医療大学保健医療学部教授に就任されました。この間、先生は、研究と教育に情熱を捧げ続けられ、ご逝去の1時間前まで神経解剖学の講義を学生にされておられました。

ご専門は、口腔内を含む頭部の感覚(特に痛覚)の伝達と運動の発現に関与する脳内神経機構の研究でした。免疫電子顕微鏡法やトレーサーを用いた神経回路追跡法などの形態学的手法に加え、単一神経内記録法などの電気生理学的手法や薬理学的手法などを駆使して行われた見事な実験によって、感覚情報の伝達と下行抑制の機構の解明や、咀嚼運動に関わる脳幹反射の機構の解明において、多数の卓越した研究業績をあげられました。特に、歯痛の伝達および抑制機構の解明、口腔顔面感覚の上行路の特性の解明、顎運動ニューロンの興奮と抑制機構の解明は高く評価されています。平成17年からの4年間は、Journal of Comparative Neurology 誌の編集委員をつとめられ、神経解剖学分野の世界的な発展に多大な貢献をされました。学会においても、日本解剖学会理事、歯科基礎医学会常任理事、日本疼痛学会理事などの要職を多数歴任され、我が国の歯科医学、神経解剖学の発展に貢献されました。

大阪大学を含む4大学で教授をつとめられましたが、先生の豪放磊落な性格から、教室には常に多くの若者が集まり、先生は、その一人として見捨てず情熱を持って指導をされ、優れた研究者、医療人に育てられました。

ここに謹んで重永先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに、哀悼の意を表します。

(歯学研究科・歯学部)

又賀 昇名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授又賀 昇先生は、平成23年1月4日にご逝去されました。享年83歳でした。

先生は昭和26年3月東京大学理学部化学科を卒業され、同年4月から大阪市立大学理工学部助手、同講師、理学部助教授を経て、昭和39年8月大阪大学基礎工学部に教授として着任され、長年にわたり教育・研究にご尽力されました。平成3年3月に大阪大学を定年退職され、大阪大学名誉教授となりました。また定年後は、財団法人レーザー技術総合研究所特別研究員として、精力的に研究を続けてこられました。

先生は、1950年代から励起状態における種々の分子間相互作用の動的側面の重要性に着目され、励起分子や励起分子錯体の電子構造、立体構造が溶媒分子や他分子との相互作用により時時刻々変化するダイナミクスとして化学反応を捉えるという基本的・独創的立場に基づいて、物理化学分野の研究者として凝縮系の光反応全般に関する先駆的

研究を展開し新概念の創出を次々に行ってこられました。特に凝縮系励起分子の双極子モーメントに対して、蛍光スペクトルのストークスシフトに対する溶媒効果に関する実験・理論両面にわたる定量的研究から導出された解析手法は、又賀-Lippertの式として広く知られ、励起電荷移動錯体やエキサイプレックス系の電子構造の研究にも重要な役割を果たすとともに、現在でも励起分子の電子状態の研究に広く用いられています。

1960年代後半からは、反応過程の動的挙動を直接観測するためにナノ秒レーザーを用いた測定を開始されるとともに、その後、ピコ秒、フェムト秒レーザーによる時間分解分光測定法の開発・確立を行い、時間分解計測手法を駆使して分子集合系のエネルギー伝達、分子錯体のエネルギー緩和、光イオン化機構、光合成反応中心モデル系における光誘起電子移動反応等に関する開拓的研究を展開されました。これらの研究成果は広く国際的にも認められ、凝縮系の化学反応研究の発展に大きなインパクトを与えています。またこれらの研究の過程で電子状態計算に対する西本・又賀近似の提出、有機磁性体ポリマーに対する伊藤・又賀の提案など、現在の計算化学や有機磁性研究に対しても先駆的な研究を展開されました。これらの先生のご業績に対しては「昭和60年度日本化学会賞」、「平成6年(第35回)藤原賞」、「平成7年紫綬褒章」、また光化学分野におけるノーベル賞と言われ当該分野において国際的に最も権威のある「ポーターメダル(1996年)」を受賞するとともに、平成18年には「日本学士院賞」を授与されています。

また平成19年11月3日には、先生のご研究・教育・行政上の偉大な功績が認められ、瑞宝中綬章を授与されました。先生の多大なご功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

附属図書館サービス向上にむけてのアンケート調査実施報告

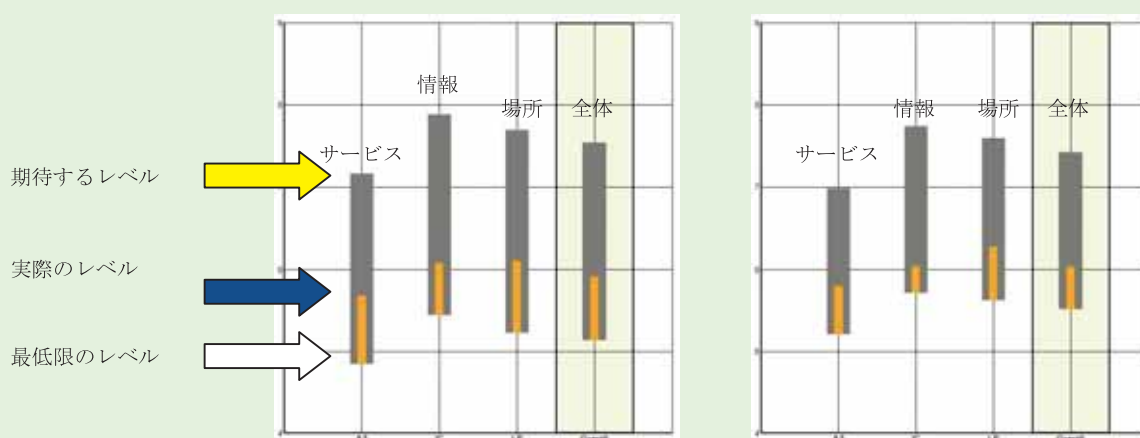
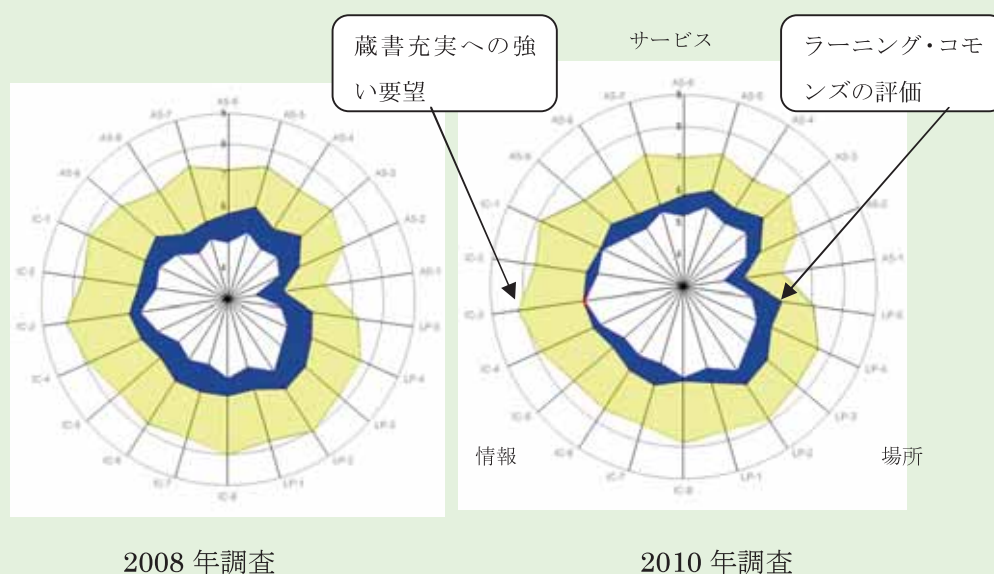
附属図書館では、図書館サービスの向上ならびに事業計画策定の基礎データ収集のため、昨年10月にアンケート調査 LibQUAL+（ライプカル）を実施しました。この調査は、学部生・大学院生・教員を対象として一昨年に引き続いて実施され、今回は955名の方から回答がありました。

ライプカルは22の評価項目について、「最低限必要であると思われるサービスのレベル」「期待するサービスのレベル」「現在の図書館サービスのレベル」という3つの指標を9段階で評価し、その結果から図書館サービスの全体像を把握することを目的としています。

調査の結果、「蔵書」「電子情報」「学習・研究環境」の充実に対する期待が強いことが明らかになりました。また、前回調査と比較すると「場所としての図書館」機能に対する評価が上がっていることから、ラーニング・コモンズの新設や開館時間の延長が評価されたものととらえることができます。

自由記述の結果から開館時間の延長に対する要望が強いことを受け、総合図書館では12月1日から2月16日まで、理工学図書館では1月31日から2月18日まで、平日の開館時間の繰上げ（早朝開館）を試行しました。調査結果の概要は大阪大学図書館報に掲載しています。また、報告書を附属図書館のウェブページ（<http://www.library.osaka-u.ac.jp>）に掲載していますので、詳しくはそちらをご覧ください。

附属図書館は、今後も隔年でアンケート調査を実施し、大学図書館機能の更なる質の向上を目指します。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。



(附属図書館)

大阪大学室内楽アンサンブル第12回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル（OUCE）は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として年2回（春・秋）、MOホールにおいて演奏会を開催し、毎回多くの方にご来聴をいただいております。

平成22年10月24日に開催された第11回演奏会は大学関係者、近隣のお住まいの方などを中心に、多くの方にご来聴いただきました。

また、12月21日には附属図書館にてクリスマスコンサートを開催し、好評を博しました。

平成23年4月30日（土）に第12回演奏会を下記の通り開催いたしますので、皆様、お誘い合わせの上、ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくは、OUCEのホームページ（<http://orchestra.musicinfo.co.jp/~ouce/>）*をご覧ください。（*当ホームページは、クラシック音楽情報センター（<http://www.musicinfo.com>）より、サーバーの無償提供を受けています。）

〈問い合わせ先〉 shinomiya@chem.eng.osaka-u.ac.jp

日 時：平成23年4月30日（土） 開場：13:30 開演：14:00

場 所：大阪大学コンベンションセンター MOホール

入場無料

（演奏曲目）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第4番 イ長調 K.298

ブラームス：チェロソナタ 第1番 ホ短調 Op.38 第1楽章

シューベルト：幻想曲 ヘ短調 D.940

スメタナ：弦楽四重奏曲 第1番 ホ短調 <わが生涯>より1・4楽章

ドビュッシー：ピアノ三重奏曲 ト長調 第3楽章

オンスロウ：七重奏曲 Op.79



休憩時間にはリコーダー演奏もあります。



* OUCEでは一緒に演奏していただける方を募集しています（特に弦楽奏者）

OUCEの演奏に参加してみたい方はぜひ下記までご連絡ください。

四宮良美 shinomiya@chem.eng.osaka-u.ac.jp

堀井俊宏 horii@biken.osaka-u.ac.jp

文書館設置準備室の移転

文書館設置準備室は、平成23年4月1日に、豊中キャンパスから箕面キャンパスへ移転いたしました。

平成18年7月に設置された文書館設置準備室では、本格的な文書館設置を目指して、大阪大学（大阪外国語大学および旧制の前身学校を含みます）の歴史に関する資料の収集・整理・保存活動を行っています。本学が発行した刊行物（研究紀要を除く）や会議資料、書翰、書類、メモ類、講義ノート、学生運動に関係するビラ、機関紙、学生生活に関係する資料、写真、アルバムなど、大阪大学の歴史に関する資料をお持ちの方におかれましては、文書館設置準備室に御寄贈もしくは御貸与いただけますよう、お願い申し上げます。

また、平成23年4月1日には、公文書等の管理に関する法律（公文書管理法）が施行されました。保存期間が満了した法人文書の移管を受けて保存・公開する「国立公文書館等」（国立公文書館に類する機能を有する施設）として、内閣総理大臣の指定を受けるための準備も行っています。

移転先 箕面地区管理棟1階 旧談話室及び旧入試作業室
(〒562-8558 箕面市栗生間谷東8-1-1)

電 話 072-730-5113

FAX 072-730-5114

E-mail kan@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp（菅真城講師）

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/archives/top.html>

（文書館設置準備室）

平成23年度大阪大学いちよう祭

いちよう祭は、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的に毎年開催しています。

多くの方に本学を知っていただくため、大学主催の行事として各部局等の施設開放、展示会、実験や体験コーナーの設置、講演会等を予定しております。

また、学生団体による協賛行事については、去る3月11日に発生しました東日本大震災を受け、「被災された方のために我々ができる最大限のことをし、日本全体に活力を与えていく」ことを基本姿勢として、ステージ企画、模擬店、スポーツ大会が計画されております。

多数の方がご来場いただきますようご案内いたします。

・ **日 程** 平成23年5月2日（月）、5月3日（火・祝）

・ **問い合わせ先** 総務企画部総務課総務係（TEL 06-6879-7014）

（総務企画部総務課）

豊中市市制施行75周年記念事業・大阪大学総合学術博物館第13回企画展
大阪大学創立80周年記念展
阪大生・手塚治虫 —医師か?マンガ家か?—

日本を代表するマンガ家手塚治虫は大阪大学の卒業生です。終戦の直前 1945 年に大阪大学医学専門部に入学し医師を目指しました。また、手塚治虫がマンガ家としてデビューしたのは翌年の 1946 年でした。当時中之島にあった医学専門部での講義・実習が終わると、角帽を脱ぎ、かわりにトレードマークとなったベレー帽をかぶってマンガ家に変身、そのまま松屋町の出版社へと赴く日々が始まりました。手塚治虫はまるで「ジキル博士 とハイド氏」のように、まったくちがう二つの世界をかけもちしながら学生生活を送っていました。

阪大在学中の 1950 年には東京の出版社で代表作の一つ「ジャングル大帝」の連載も開始し、東京と大阪を片道 11 時間もかけて往復する超多忙な生活となりました。阪大を 1951 年に卒業する頃には、マンガ家・手塚治虫 の名は全国へ轟くようになっていました。1952 年には大人気マンガ「鉄腕アトム」の連載を開始するまでに至っています。さらにおどろくべきことに、同年 7 月には「医師国家資格」を取得しています。

本展覧会では、文化・芸術・自然豊かな北摂地方（豊中・宝塚）で育ち、中之島や松屋町といったにぎやかで活気あふれる街で学生生活を送った手塚治虫の学生マンガ家時代の生活を、「作品」や「写真」その他の資料により振り返るとともに、手塚治虫を成功へと導いた、「雅と俗」を併せもつ「大阪」の秘密を紹介していきます。大阪大学創立 80 周年を記念するとともに、大阪のすばらしさの一端を再認識していただきます。

会 期：2011 年 4 月 28 日(木)～2011 年 6 月 30 日(木) 10 時 30 分～17 時／入場無料 日祝休館。ただし 5 月 3 日・4 日は開館

会 場：大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

主 催：大阪大学総合学術博物館 大阪大学創立 80 周年記念委員会

共 催：大阪大学大学院医学系研究科 豊中市・豊中市教育委員会

協 力：手塚プロダクション 大阪大学 21 世紀懐徳堂

ミュージアムレクチャー（全 4 回）

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館 3F セミナー室 いずれも聴講自由、30 分前より受付開始。定員 60 名。

【第 32 回】4 月 30 日（土）13：30～15：00

齋藤彰（大阪大学准教授 工学部 応用自然科学科）「二人以上の手塚治虫 ～現役科学者から見た手塚の不思議～」

【第 33 回】5 月 3 日（火・祝）13：30～15：00

手塚るみ子（手塚治虫 長女・プランニングプロデューサー）「父親としての手塚治虫」

【第 34 回】5 月 28 日（土）13：30～15：00

清水義裕（手塚プロダクション 著作権事業局 局長）「手塚治虫のマンガ・アニメーションの歴史的位置」

【第 35 回】6 月 4 日（土）13：30～15：00

平野俊夫（大阪大学教授 前医学部長）「大阪大学医学部：来し方を振り返り、未来を想う」

関連イベント 5 月 14 日（土）14：00～16：00 展覧会関連トークと木下東鶴 講談「手塚治虫物語」

豊中市立ルシオーレホール（阪急宝塚線・大阪モノレール 蛸池駅直結ルシオーレビル北棟 4F）

入場無料、参加自由、30 分前受付開始。定員 60 名

問い合わせ先：豊中市文化芸術・国際室 TEL 06 - 6858 - 2503

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-20 tel：06 - 6850 - 6284 <http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>

交通のご案内 阪急宝塚線「石橋駅」下車、徒歩 10 分

※公共交通機関をご利用ください。

また、当館はバリアフリーですので、障害者向駐車場スペースをご活用ください。

INTERVIEW

もり わき ち か こ
森脇 千賀子

静と動

医学部附属病院看護部看護師長



森脇さんは、長年茶道（裏千家）を続けておられます。茶道の「静」、そして看護師という職業の「動」の対比という視点からが非常に興味深いお話を伺いました。

茶道との出会いから、今日まで

森脇さんは西病棟5階：整形外科病棟の看護師長。スタッフの勤務管理、医師と入院患者の入退院調整、病棟の施設管理のほか、フロアで起こるさまざまな出来事の調整など多様な業務に携わっている。そんな森脇さんの茶道との出会いは京都の看護専門学校に入学後。『『京都にいたのだから』との親の勧めもあり、お茶の稽古を始めました。お花（華道）も一緒に習っていたんですが、お茶の方が私に合っていました。就職後も、当時の上司が京都出身で茶道の心得がある方であったため色々配慮もあり、週末に京都で開かれるお稽古を継続することができました。現在でもお付き合いのあるこの方との出会いのおかげで、今まで茶道を続けてこれました。』

静と動



森脇さんは、「茶道は『静』の境地。走る仕事の看護師は『動』の世界なんです。」と説明してくれた。仕事でどんなに疲れていてもお稽古は

苦にならない。全く異なる世界を持つことで、絶妙なワークライフバランスが保たれている。また、茶道具や着物、菓자에春夏秋冬があり、四季を感じる中に心のゆとりが生まれるのだという。「おっちょこちょいな性格なので、お茶がうまくコントロールしてくれているんですよ。」

森脇さんにとっては稽古と一緒に参加している社中（同門）さんとのつながりも良い刺激になっている。「世代、性別、職業の異なる人たちのとの交流がプラスになっていて、愚痴っぽくならないですね。前向きな気持ちになれま

す。」茶道を続ける理由がここにもある。

作法と手順を重んじる茶道は、一見格式ばっているように見えるが、本来身近なものであり、お茶の先生の教えには「鼻で飲まずに口で飲んでおくれやす。お茶は庶民のものです。」とある。また、動きにはまったく無駄がなく、この合理的な動きは一刻を争う看護師の仕事に通じるところがあり、相手にお茶を振る舞う心は、看護師が大切にしなければならない「相手を思いやること」に通じている。

職場でのエピソード

職場でもお茶は人のつながりを生んでいる。以前アメリカ人の講師が来日した折には当院の看護管理室でお茶を点てて、日本のおもてなしを喜んでいただいたこともある。また、



平山前看護部長とともに

末期のがん患者さんの病室で点てたお茶がその患者さんの最後に口にしたものになったこともあり、お茶を通したつながりの広がりや深さを感じる。

日頃は、勤務が終わって上司や同僚といただく一服が束の間のやすらぎとなっている。

将来の夢

将来の夢を聞いてみた。「将来は学校（中学高校）の『芸術』の授業で取り入れられている学校茶道に進出してみたいですね。茶道の魅力である、人のつながり、心のつながりを伝えることに携わることができればと思っています。また、定年後は阪大の茶室等で気軽に茶道に触れてもらえる会が催せたらいいですね。」

※平成23年3月17日にインタビュー実施。

大阪大学の欧州での連携活動近況報告

大阪大学グローニンゲン教育研究センター長

弘 津 禎 彦

当原稿の草稿中に東北地方太平洋側で大震災が勃発し、津波の害により、阪神淡路大震災での犠牲者数をはるかに超える多くの方々が犠牲になられた。欧州のTVトップニュースで続々入ってくる映像や情報は、まさにわが目、耳を疑わんばかりであり、それに追い打ちをかけるような福島原子力発電所の惨状を目のあたりにした。わが国の未来を賭けた今後の防災政策、エネルギー政策のあり方がどうあるべきか、最重要課題として国民に十分に考えさせる課題がこのような形でしか与えられないのが実に残念である。今回亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、復興に向けた活動が順調に展開されることをお祈りいたします。

今回のグローニンゲンセンター報告は、昨年と今年のセンター活動に関係したトピックスについて、「連携」を題材にいくつか紹介する。

■ グローニンゲン大学とのパートナーシップ

大阪大学の欧州センターとしてのグローニンゲンセンターは、グローニンゲン大学ゼルニケ・キャンパス内にある。グローニンゲン大学とは2002大学間学術交流協定を締結しており、いくつかの部局同士の交流が盛んである。昨年4月にグローニンゲン大学の文系学生12名、理系学生22名が、それぞれツアーを組んで大阪大学を訪問し、センターは企画、実施までの積極的な支援を行った。本学文系学生による日蘭学生会議のメンバーは、グローニンゲン大学文系学生と「教育」に関する活発な討論会を行った。今年9月には、今度は日蘭学生会議学生がツアーを組んでグローニンゲン大学を訪問し、「労働」に関する討論会を開催する計画であり、双方の大学の学生の自主的な活動が芽をふき、成長を始めている。阪大生の活力を大いに欧州で示していただきたい。一方、グローニンゲン大学の理系学生訪問に際しては、「環境問題」に関する基礎工学部留学生会との討論会を行い、豊中、吹田キャンパスの低温物理、超高電圧電顕、核物理関係のセンターを訪問した。吹田キャンパスでは、医学部の前身の大阪医学校に1870年に赴任し、7年間に渡り、医学教育を行ったエルメレンス先生の碑を訪れ、また、銀杏会館の医学史料展示室を見学した(写真)。昨年春に、医学系研究科はグローニンゲン大学の医科学部とインターンシップの学生交流を行うことになり、双方数名ずつのインターンシップ学生の派遣交流が開始されている。エルメレンス先生来阪からちょうど140年の期



間を経て、医学分野での交流が再開されることになった訳である。

昨年9月28－30日に、グローニンゲン大学で大阪大学フォーラム“Globalization and Conflict”が開催され、鷺田総長はじめ約30名の大阪大学スタッフと大学院生が参加した。今年6月21、22日には、グローニンゲン大学で大阪大学80周年記念事業の一環として、“Bioinspired Materials and Functionalities”シンポジウムが開催される。大阪大学とグローニンゲン大学とで、毎年、サイエンス・シンポジウムを共同開催することが決まっており、欧州、日本において両大学の優れた研究成果を宣伝し、かつ最新情報を共有することが狙いである。来年は大阪大学で開催される予定である。一方、教育関係では、欧州委員会が進めているEU教育プログラムに関し、グローニンゲン大学はいくつかのコンソーシアムへの大阪大学の参画を積極的に支援し、欧州での大阪大学のstatus向上に貢献している。このように、グローニンゲン大学と大阪大学との間に強固な友好関係が確立されつつあり、互いにStrategic Partnerとして信頼し合える関係が継続することを期待する。

■ 日独大学間交流の新しい潮流

昨年度は、本学とドイツの4大学(ビーレフェルト大学、ハイデルベルグ大学、ポッフム大学、フランクフルト大学)との間で大学間学術交流協定が結ばれた。ドイツでは、日独交流150周年を意識して、日独大学間の学術研究交流を深める気運が起こりつつあるのは確かである。

7月29日、30日に、日独6大学(大阪大学、京都大学、東北大学、ハイデルベルグ大学、ゲッチンゲン大学、カールスルーエ工科大学)学長会議がハイデルベルグ大学の主催により中世の雰囲気が残るハイデルベルグで開催され、6大学の学長、副学長、教授、国際交流担当者など約100



名が参加した。この会議は「日独6大学の学術研究協力のネットワークを作り上げる」ことを目的としている。このドイツ側3大学は、2007、2008年に選定されたドイツでの9 Excellence Initiative (9 elite universities) のうちの3大学であり、当6大学の連携は今後の日独の学術研究交流推進において先導的な役割を果たしていくことが期待される。

会議初日には、ドイツ側3大学、日本側3大学の学長の挨拶、大学紹介に次いで、学術研究交流セッションが開かれ、学術研究交流のための組織作りや、予算獲得上の戦略など、多くの事柄が議論された。2日目には、9つの文系理系学術研究グループに分かれてのグループ討論、研究発表などが実施された。2日目の最後に、今回の会議の“Joint Statement”への6大学学長による合同署名が行われ、署名の後、6大学学長が連携を誓った(写真)。今回の日独6大学連携の企画は、日独交流150周年記念行事の一つとして、ドイツ側ハイデルベルグ大学の音頭で実現に漕ぎつけたものであるが、この連携については、EU学術交流プログラムの一つであるICI ECP-Interfaceのコンソーシアム校(グローニンゲン大学と大阪大学が幹事校)としてハイデルベルグ大学、京都大学、東北大学などが参加していることが大きく関わっている。このようないきさつから、当6大学学長会議の準備には当初からグローニンゲンセンターも関与することとなった。

このほか、ドイツ、日本両政府マッチング・ファンドによる共同研究プログラムも、例えば大阪大学-アーヘン工科大学、大阪大学-ハノーバー医科大学間で実施されており、本学での日独間連携は盛んである。また、他の欧州地域の主要大学と本学の連携も進行しており、今後、欧州では各種の連携ネットワークが確実に増えて行くであろう。

■ 欧州での我国の大学との連携

最近、我国の多くの大学が欧州地域にオフィスを開設するようになった。センターでは、今後、欧州での日本の大学との連携を図ることも活動目標の一つに掲げ、連携を開始している。昨年12月にデュッセルドルフ・インターナショナルスクールで名古屋大学、早稲田大学、大阪大学による合同のG30留学説明会を開催し、今2月にロンドン・インターナショナルスクールで名古屋大学、大阪大学の同

様な説明会を行った。神戸大学は昨年9月にブリュッセルに欧州オフィスを開設しており、そのオープニング記念シンポジウムが3月4日にブリュッセルで開催された。本学から辻理事・副学長が招かれ、「大阪大学の国際化戦略」に関する講演を行った(写真：向かって右隣は福田神戸大学学長)。今後、欧州での神戸大学との連携や、EU Institute in Japan, Kansaiに属する阪神4大学(神戸大学、関西大学、関西学院大学、大阪大学)との連携をスタートさせる計画である。シンポジウムや大学説明会の合同開催などが考えられる。



■ 大阪大学欧州同窓会の設立支援

グローニンゲンセンターでは、大学の国際化支援に向けた大阪大学欧州同窓会の結成支援活動を開始した。この会は、在欧州の大阪大学同窓生と旧大阪外国語大学同窓生(咲耶会メンバー)と一緒に組織する欧州同窓会であり、大阪大学、旧大阪外国語大学に留学、長期滞在経験のある在欧州の人々も含む。この同窓会会員の増強活動は最初は容易でなかったが、デュッセルドルフに阪大待兼山会が存在する情報を得たことが突破口となり、デュッセルドルフ咲耶会の協力も得て、またたく間に、約40名の在欧州同窓会員が登録された。その後、大阪大学側でも各部局への呼びかけなどの協力体制が生まれ、現在すでに100名を超える在欧州の方々が入会しており、在欧日本企業、大学・研究機関、公的機関など、所属は様々である。今後、会員間の交流に加え、大阪大学と欧州大学との留学・インターンシップ交流に関しても支援できる組織作りになればと願っている。第1回欧州同窓会は、今年6月18日に、鷲田総長、神余・駐ドイツ日本大使(本学同窓生)にもご参加いただき、ベルリンにて開催される。(写真：今年デュッセルドルフでの待兼山会・ドイツ咲耶会合同新年会(中央は神余大使))



フィリピンにおける健康格差縮小のためのシステム構築について

医学系研究科 修士課程 1年
医学部保健学科 学部 4年
理学研究科博士後期課程 1年

若林 真美
森山 愛子
Regina Medelo SALMASAN

■健康格差とは

健康格差という言葉をご存知でしょうか。健康格差とは様々な社会的要因、例えば収入、教育、文化によってある集団、国や地域内において、健康状態に大きな差が生じている状態である。日本でも、いろんな分野の『格差』が取りだされているが、健康格差もそのうちの1つとして最近話題に上りつつある。しかしながら、ある研究で、日本は最も健康格差の小さい国であるということが明らかになっている。今回、フィリピンという国を訪問し、健康格差の大きさは日本とは比べ物にならないくらい大きいことを実感した。それはフィリピンが発展途上国だからという理由だけでなく、健康を支えるシステムに問題があると考ええる。



1) Robinson's commercial complex

■マニラの健康格差

発展途上国と一括りにして考えてしまいがちであるが、それぞれの国や国内の地域によっても様子は異なる。フィリピンのマニラは大都市で、高層ビルが立ち並び日本より大きなショッピングセンターもいくつもある。しかし、その一方で、スモキーマウンテンと呼ばれるゴミ捨て場周辺で暮らす人々がいる。また、市内のあちこちで路上生活を余儀なくされている人々を見かける。こういった生活状況の前提ですでに大きな健康格差が存在している。衣食住は健康の基本であり、それが無いことで健康に害を与える。

私立有名病院、国立総合病院、国立感染症専門クリニック3つの病院にも訪問した。それらの比較から、収入によって病院へのアクセスが制限され、さらに健康問題の質や病院でのケアの質にも非常に大きな差がある実態を目の当たりにした。例えばサンラザロ病院は国立の感染症病院であり、所得によって異なるが入院費が安く貧困層が多く詰めかけ、ベット数が不足し2~3人が1つのベットに寝ているということもある。ここでは、日本ではめったに見られないような破傷風、デング熱、狂犬病などの感染症の患者などがいる。その一方で私立有名病院はほとんどが個室で、日本の高級病院と医療や施設の水準は変わらないが、入院費が日本円で約1.5万/日と非常に高額である。この

病院には糖尿病、心臓病、脳卒中などの生活習慣病の患者が多い。フィリピンは決して医療水準が低いわけではない。



2) Smokey mountain

優秀な医療人材もいる。しかし、人々が平等に病院にアクセスできるような仕組みが十分に機能していないためこのような健康格差が生まれている。

■最後に

世界中の誰もが健康であることを望むだろう。だが、フィリピンには十分な食べ物や安全な水を得ることができず、健康な生活からは遠い過酷な状況で暮らす人々がいる。一方で、マニラには公園などの施設が少なく、車社会であり、庶民もジブニーという乗り合いタクシーみたいなものを利用することが多く運動不足になりがちで、さらに肉中心の食生活などから生活習慣病に苦しむ人々も多くいる。日本では当たり前のようにある上下水道などの衛生環境、食品

衛生などの行政管理、公園などの余暇施設、電車などの交通手段といった公的システムを整えることは、その国の全ての人の健康を支えるシステムであると日本の良い面を再発見した。それとともに、グローバル社会の中で日本人である私たちがどのように他の国へ貢献できるか考える貴重な機会をいただいたことに感謝の意を表したい。



3) Jeepney



4) San Lazaro Hospital

北欧における幼児期から高齢期にわたる食育活動の現状と将来展望

医学系研究科 医科学修士課程 1年 久保 佐智美、竹下 ひかり、湊 聡美

わが国では急速な経済発展に伴い、食環境が大きく変化したことを受けて、脂質の過剰摂取や野菜の摂取不足、朝食の欠食といった栄養の偏りや食習慣の乱れが、大人のみならず子どもにも見受けられる傾向があることが国民健康・栄養調査（厚生労働省）において報告されている。更に肥満や生活習慣病の増加、女性における過度の痩身等の問題も報告されている。

これらの問題を受けて、平成17年には「食育基本法」が施行され、国民が生涯にわたって健康で豊かな人間性を育むため、食に関する知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる“食育”が国民運動として推進され始め、平成18年には“食育推進基本計画”も策定されたことで、日本各地で幼児期からの食育活動が盛んに行われるようになってきた。

そこで今回の海外研修では、私たちの共通のバックグラウンドである管理栄養士という視点から、食育の確実な定着を目指す戦略を立てることが必要であると思い、S (Sustainable)、U (Understandable)、R (Realistic)、E (Enjoyable, Entertaining) の頭文字から“SURE”という法則を考え、スウェーデンの食育について実地学習および視察、現地大学の学生の方々と交流を行い、“SURE”に基づいた我が国における施策への提言のモデルとなるような知見を得ることを目的とした。

(1) 研修内容

- ①カロリンスカ大学の公衆栄養学研究者および修士学生との情報交換
- ②スウェーデンの食環境の視察調査
- ③スウェーデン人大学院生と情報交換
- ④「第2回国際公衆栄養学会」への参加と研究者との交流

(2) 研修の成果

スウェーデンにおける食育活動は、国のアクションプランである「健康的な食習慣及び運動量の増加のためのアクションプラン」を基本として展開されている。食品業界が主体となって実施している取り組みうち、“キーホールシンボル”表示制度は食環境改善のための取り組みであり、消費者が脂質や塩分、糖分が少



なく、繊維が多く含まれる健康な食物を選択しやすくする為に緑色の鍵穴をイメージしたラベルが商品パッケージに表示されている。

学校給食において日本と大きく異なる点として、費用は無料であるということ、昼食だけではなく朝食や学童保育における軽食も提供されていることなどが挙げられる。昼食では伝統食意識した献立も立てられているとのことであったが、概ね栄養素適正摂取を意識した活動であるような印象を受けた。

また、日本と同様にスウェーデンを含むヨーロッパにおいても子ども達の朝食欠食率の増加や野菜・果物摂取量の不足、ファーストフードや炭酸飲料の摂取増



加などが大きな問題となっていることがわかった。このような問題に対し、カロリンスカ大学のAgneta Yngve教授を中心にEU9カ国の大学研究者が“PRO-GREENS”プログラムを各国で実施している。この成果がポルトで開催された第2回国際公衆栄養学会にて報告されており、効果的な食育の実施のためには“sustainable (継続可能性)”が重要なキーワードであることが繰り返し伝えられていた。

福祉国家であるスウェーデンは、税率が非常に高いことでも有名であるが、生活必需品に対しては税率が低く設定されるなど、国民が日常生活を営みやすいように工夫されていた。滞在中、スウェーデンのスーパーマーケットで購入した食材で自炊生活をしてみると、黒パンや全粒粉の Pasta、多種類の穀物やドライフルーツが入ったシリアルなど、主食となるものに食物繊維が豊富に含まれていることが印象に残った。日本では食物繊維摂取といえはまず野菜や果物由来のものが思い浮かべるが、毎食摂取する主食が安価で食物繊維を豊富に含むのであれば、日本における食物繊維不足の問題解消に役立つのではないかと考えられた。

スウェーデンにおける食育活動を受けてきたスウェーデン人学生と交流し、情報を得る機会を得た。彼らによると、食育活動の一つとして推奨されている“キーホールシンボル”付きの食品は「栄養を考慮した高価でまずいもの」という認識があるため、シンボルの存在や意味は知っていても実際に利用している人は少ないということであった。こ

のように、行政や専門職が国民の健康のためによいと考え実施している施策が実際は国民に受け入れられていないという問題は、日本だけの問題ではなく、食育を国民の生活に定着させるためには、どちらの国においても“SURE”の全要素を取り入れたプログラムの構築が必要であると思われる。

(3) 私たちに今後どのようなことができるか？

私たちにとって最も身近な、大阪大学の食環境整備を行い、少しでも多くの大学関係者及び学生が、健康的でQOLの高い日常生活を送ることができるような“SURE”の全要素を取り入れたプログラムを企画できれば、と考えている。その具体案として、大学関係者および学生がよく利用する食堂で、利用者の野菜および果物摂取量の増加を目指すためのいくつかの段階的な取り組みを提案する。

〈認知度の向上〉 ①卓上メモ・ポスターの掲示

②食堂メニューの栄養価表示

〈動機付け〉 ①イベントメニューの提供

- ②特典メニューの導入
〈行 動〉 ①サラダ&果物バーの設置
②野菜を多く含む汁物の充実

このような取り組みは、食堂の従業員の方々の理解と協力が不可欠である。そして管理栄養士といった食事の栄養バランスについて専門的な立場から助言できる者が取り組みを支援し、継続可能な形で進めていく必要があると思われる。そのためには、利用者のニーズを定期的に把握し、常に栄養バランスがよく、利用者に受け入れられるような食事提供の在り方を模索していくことが何より大切なことと考えられた。



「学生を受け入れる社会の器―日伯の比較から―」

法学部法学科

三 浦 あかり (4年)、中 田 陽 子 (同)、谷 田 夕里子 (同)、
福 田 友紀子 (3年)

2004年の法科大学院創設、2009年の裁判員制度導入。法曹界激動の時代に法学部での四年間を過ごした私たちは「法曹界」を目指す友人を身近に持ちながら、日本の法律家養成が果たしてベストな道を辿っているのか疑問に思っていた。

そのようななか、国際交流科目の講義を通してブラジルの法学部生から話を聞くうちに、日伯における法教育の違いを知った。そして、ブラジルの大学にはリーガルクリニックが併設されており、法教育を通して学生時代から相当の社会経験を積んでいることに興味を持ち始めた。当研修では、リオデジャネイロ州立大学とサンパウロ大学さらには各州立裁判所など実際に現地ブラジルを訪問することで、



サンパウロ大学のリーガルクリニック

日伯における法学部生の社会貢献を比較し、法学部生の社会貢献のあり方について模索することを目的とした。

ブラジルでは、州により多少の違いはあるものの、大きな特徴として、司法修習が無い代

わりに、司法試験を受ける前にインターシップという形で実務に関わる機会がある。

今回 リオデジャネイロ州立大学法学部学生とディスカッション
私たちが注目したリーガルクリニックもこのインターンシップの一環である。リーガルクリニックは、問題を抱えながらも金銭的な理由で弁護士に相談することのできない人を対象としており、法学部生が相談を受け、弁護士の指導を受けながら、訴状作成などの実務を行っている。

このような制度が存在する理由の一つとして、ブラジルの社会背景があげられる。私達の訪問したリオデジャネイロ州立大学の真横には、貧しい人々の不法占拠により形成されているブラジルのスラム街、ファベラが広がっていた。また、近年の急速な経済発展がもたらした経済格差は大きく、ごく一部の裕福な家庭で生まれ育った人が大学に通える一方で、職もなく路上で物乞いをする人もいるのが現状である。その他にも、不十分なインフラなど、たった数日間とはいえ、実際に目にした状況から、いまだブラジ





サンパウロ大学リーガルクリニックの学生

ルが発展途上である
事実は明らかだった。
そのような社会だから
こそ、法学部生を
必要とし、学生も自
覚をもって社会貢献
に励んでいる様子
を見ると、大学のリー
ガルクリニックが担
う社会的責任の大き
さというものを実感
した。

しかし、社会背景が違うから、求められるものが違う。
だからブラジルには学生時代から実践的なリーガルクリ
ニックが必要だ。という単純なものではなかった。たとえこ
の先ブラジル社会
が満足に発展して
も、このような活
動はなくなってし
まうとは思えない。
さらに、実際に目
にした光景から、
出会った学生から、
単なる社会背景の
違い以上のものを
感じとった気がし



リオデジャネイロ州立裁判所で現地記者による取材

た。それは、一人前にならないと認めてはもらえない日本
とは異なり、ブラジルでは、大学が学生の自立を応援して
いて、学生という未熟な存在を社会が受入れている、とい
う考え方の違いであるように思う。日本でも、そんな学生
の自立をもっともっと応援する社会・大学になればいいの
に、と思わずにはいられなかった。

残念ながら日本では興味関心を後押ししてくれる機会は
まだまだ少なく、余裕が少ない社会ではあるけれども、今
回の研修で私たちが経験したように、大阪大学は応援して
くれる環境にある。後に続く人たちにも、外に目を向け、
人と人とのつながりが無限の広がりを持つということを実
感してほしいと思う。

最後になりましたが、今研修の機会を与えてくださった
方々、日本や現地で、研修を支えてくださった方々に御礼
申し上げます。



リオデジャネイロ州立裁判所判事と

平成22年度大阪大学「学生海外研修助成」事業報告会開催

平成22年度大阪大学「学生海外研修助成」事業に採択
された学生グループによる報告会が1月21日(金)にICホ
ールで行われました。この事業は、本学学生の積極性と企
画力・実行力の向上を目的として、自らの企画により海外
で交流・研修活動を行うグループを支援するため、平成14
年度から実施されているもので、本年度は、医学系研究科
若林真美さん他2名による「フィリピンにおける健康格差
縮小へ向けたシステム構築について～保健行政・NGOの
取り組みから」、医学系研究科久保 佐智美さん
他2名による北欧における幼児期から高齢期に
わたる食育活動の現状と将来展望」、法学部三浦
あかりさん他3名による「法学部生の社会貢献
の国際比較～日本・ブラジルの例から～」の3
件の研修計画が採択され、各グループから、研
修成果ならびに海外での交流体験等について報
告が行われました。報告会には、学生及び教職
員約15名が出席し、報告内容に関して活発な質
疑応答が行われました。

また、2月8日(火)には、総長室で各グループ

による鷲田総長に対する報告会が、辻毅一郎国際交流担当
理事・副学長、菊野亨留学生センター長、亀岡雄国際部長
同席のもとに行われました。1グループ10分という限られ
た時間の中、緊張した面持ちで研修成果の報告や大阪大学
への提案が行われました。報告内容に関する質疑応答の後、
総長から各グループに対して、今回の研修成果を無駄にせ
ず、後に続く者のために広報に努めてほしいと激励の言葉
がかけられました。



香港中文大学

The Chinese University of Hong Kong (CUHK)



香港中文大学（CUHK）は、1963年に設立された総合大学で、人文学部、ビジネス・アドミニストレーション学部、教育学部、工学部、法学部、医学部、理学部、社会科学部の8学部から成っています。22の研究所を持ち、2006年からの戦略として、中国研究、生物医学、情報科学、経済学・財政学、地理情報学・地球科学の5つの分野が選ばれ、さらに研究投資を行っています。学部生約11,000人、大学院生約3000人を含む約21,000人の学生が研究をしています。香港では、香港大学とともにトップの位置にあり、THEのランキングは毎年、阪大とほぼ同じ位にあり、香港や中国だけでなく、世界のなかでもトップレベルの教育・研究を行っています。キャンパスは、英語、中国語標準語（普通語）、広東語などの多言語世界で、それらの言語によるコースが提供されています。また、アジアではユニークなカレッジシステム（<http://www.cuhk.edu.hk/english/college/system.html>）を導入しています。敷地面積は134ヘクタールという香港で最大のキャンパスを持っています。

学長の沈祖堯教授（Professor Joseph J.Y. Sung, SBS MB BS (HKU); PhD (Calgary); MD (CUHK); FRCP (London); FRCP (Edinburgh); FRCP (Glasgow); FRACP; FAGA;



F A C G ;
F H K C P ;
F H K A M
(Medicine))
は、本来の
消化器系癌
の専門家と
しても有名

ですが、医学部長であった2003年のSARS流行のときに、感染者たちを受け入れて大活躍をされたことでも有名で、その貢献により『Time』誌にAsian Heroとして紹介された方です。

香港中文大学と大阪大学の大学間協定は、2010年11月に締結されました。香港中文大学側は、日本研究、人類学、ビジネス・アドミニストレーションを専門とする教員、また、大阪大学側は、人間科学研究科、文学研究科、言語文化研究科という文系中心の教員をコンタクトとして結ばれましたが、両大学は理系の強い総合大学であり、あらゆる幅広い分野での交流が期待されます。夏季プログラムも充実していますので、たとえ1年間の交換留学が無理な学生でも、短期留学なども良い機会となることでしょう。

（コンタクトパーソン・大谷順子 人間科学研究科准教授）

ウェブサイト：<http://www.cuhk.edu.hk>

編集後記

3月に卒業式・大学院学位記授与式、4月に入学式が挙行されました。3月11日に発生しました東日本大震災の影響により、東日本では卒業式・入学式を中止した大学もありましたが、大阪大学から旅立つ方や大阪大学で新たなスタートを切る方々の区切りとしてそれぞれの思いを胸に卒業式・入学式に臨まれたことでしょう。

被災地の復興に向けて大学や個人としてできることはいろいろあると思います。私も大阪大学の一員として、そして関西の一員として「できること」をしていきたいと思えます。

（柿木）

大阪大学応援団

勝ち鬨をあげろ！



みなさま、こんにちは！

大阪大学応援団です。その名のごとく、私たちはまさに大阪大学をより明るく元気にしたい！という思いのもとに活動しています。主な活動は、野球やアメリカンフットボールといった試合の応援と入学式でエールを振ったり学祭ステージで演舞を披露したりする演舞会の二つです。

それではその活動内容を紹介させていただきます。

まず、阪大選手の試合の応援は、野球、アメフトのほか、バレーボールやボート、ソフトボールなどの応援に行っています。団旗、太鼓やトランペットなどの楽器が使えるスタジアムではそれらを用いて盛大に応援をしています。ただし、そのようなものを使用できないときはメガホンやタンバリンでの応援を行っています。前には学ランを着て白手をつけ、全体の指揮をとって腕をふっているリーダー部と呼ばれる部員がいて、その後ろには華やかなチアコスチュームにポンポンをもって踊るチアリーダー部、そして楽器を演奏する吹奏部と、応援団はこの3つの部から成っています。



そして演舞会は、普段試合で阪大選手の応援を行う私たちが、逆に「見られる」立場でのステージとなります。これは先ほどの3部がそれぞれの持ち味を発揮してステージを作り上げるもので、見ている人を惹き付け、楽しませるものです。ここでも大きな団旗をあげ、太鼓も打ち鳴らします。特に団旗は今年阪大創立80周年と、応援団創立50周年を記念して新たなデザインで作られたばかりのものです。

いかがでしょうか。何より私たちは楽しく、充実した日々を送っています。そして現在応援団には経験者なんて一人もおらず、みんな大学から始めた部員ばかりです。どんな人でも1年たてば立派な風格が出てきます。新入生の皆様のご入団を心待ちにしています。



団長 光吉礼人(医4年)

〈コメント〉

前年の七大戦の総合優勝以降、阪大は今破竹の勢いで乗りに乗っています。ぜひみなでいっしょに阪大の栄光の瞬間を分かち合いましょう！



練習場所：リーダー部、チアリーダー部：豊中キャンパス第一体育館下
吹奏部：豊中キャンパス内 明道館
練習日時：火曜、木曜：17時30分～19時30分
土曜：10時～13時(土曜は、応援があるときはそちらを優先)
団員数：15人(四回生4人、三回生2人、二回生9人)
連絡先：主務 中井佳与(外4回生)
cheer-you-up0728meiner_mut@docomo.ne.jp
ホームページ：http://oh-endan.com/



トピックス

東北地方太平洋沖地震義援金へのご協力をお願い

東北沖を震源とする地震をはじめとした東日本大震災により被害を受けられたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

大阪大学では、東北地方太平洋沖地震被災者への支援のため、義援金を受け付けています。

義援金の受付口座は次のとおりとしています。皆様の温かいご協力をお願いいたします。

今回お預かりする義援金は日本赤十字社を通じ被災地域へお届けいたします。なお、振込手数料、振替料金は各自でご負担願います。また、預り証の発行もいたしません。あらかじめご了承ください。

三井住友銀行 豊中支店 普通預金 7180457

口座名義：大阪大学（震災義援金） 代表 鷺田清一

義援金募金状況（2011年4月15日現在）

募金総額：13,348,687 円

・卒業式、入学式を含む募金箱にご協力いただいたもの：6,428,454 円

・銀行振込によりご協力いただいたもの：6,920,233 円

4月8日に第1次分の震災義援金として、10,000,000 円を大阪大学関係者一同名にて日本赤十字社に送金いたしました。ご協力ありがとうございました。

一日も早く復旧されますよう、お祈り申し上げます。

お問い合わせ先：大阪大学基金事務室

Tel：06-6879-8327 Fax:06-6879-4337

E-mail：kikin@office.osaka-u.ac.jp

東日本大震災について

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/info/earthquake/earthquake>



阪大 NOW No.124 2011 4月号

2011年4月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室

発行 大阪大学広報・社会学連携オフィス広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

TEL：06（6879）7017 FAX：06（6879）7156

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせにつきましては、下記までお寄せ下さい。

E-mail：ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp